

神戸薬科大学 エクステンションセンター 開設10周年記念誌

10th



神戸薬科大学 エクステンションセンター

神戸薬科大学エクステンションセンター

開設10年の軌跡と今後の展開

—薬剤師の社会的役割の向上と
職能の高度化を目指して—



神戸薬科大学エクステンションセンター

開設10周年記念誌編集委員会

Congratulatory Address



厚生労働省
医薬・生活衛生局 総務課
薬事企画官

紀平 哲也

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年を祝して

神戸薬科大学エクステンションセンターが開設 10 周年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。貴大学におかれては、長年にわたり生涯研修支援事業に取り組み、エクステンションセンターを設置されてからより一層、社会で活躍する薬剤師の資質向上と生涯研鑽に寄与されており、その功績に深く敬意を表します。

諸外国に例を見ないスピードで高齢化が進行する中で構築が進められている地域包括ケアシステムにおいて、薬剤師には、日頃から患者と継続的に関わることでいつでも気軽に相談できるかかりつけ薬剤師として患者に寄り添い、薬学的管理を実践することが求められています。その中では、急性期疾患や生活習慣病における日常的な薬物治療のほか、従来では入院医療で実施されていた高度な管理を必要とする薬物治療なども地域の薬剤師が対応する必要があります。一方では、地域住民による主体的な健康の保持増進を積極的に支援するため、要指導医薬品や一般用医薬品に関する相談を含めた健康の維持・増進に関する相談に対して、より詳しく対応することも薬剤師の重要な役割です。貴センターが取り組まれてきた生涯研修プログラムや在宅医療を支援する指導薬剤師養成プログラム、生涯研修認定制度に加え、健康食品領域においても研修認定薬剤師制度が始まることは、時代の要請に応える意義の高いものと考えます。今後は、患者の薬物治療の質の向上に向けて、臨床での薬物治療の現状や治療上の具体的課題を分析・評価し臨床に還元する、教育・研究機関としての大学ならではのさらなる取組に期待いたします。

薬学部教育が 2006（平成 18）年に6年制に移行して 12 年が経過し、20 歳代の薬剤師は6年制卒業生が占める時代になりました。2015 年からは改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムに基づく教育が始まり、それに基づく実務実習も充実が図られます。さらに、卒後教育についても、認定薬剤師や専門薬剤師・指導薬剤師の研修プログラムの整備、研修プログラムの第三者評価を行う薬剤師認定制度認証機構の取組等が進められています。今後、卒後初任研修や管理者研修、レジテント制度の充実・均てん化など、卒後教育の体系化に向けて、貴センターの今後の取組の発展に期待が持たれます。

最後に、貴センターが今後ますます発展され、薬剤師の生涯研修と社会的役割の向上のさらなる充実・発展に貢献されることを祈念して、貴センター開設 10 周年の祝辞とさせていただきます。



公益社団法人
薬剤師認定制度認証機構
代表理事

吉田 武美

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年を祝して

神戸薬科大学は、薬剤師に対する積極的な生涯学習支援のためにエクステンションセンター事業を推進されています。その事業の根幹となる薬剤師のための生涯研修認定制度は、2007（平成 19）年に当認証機構から評価・認証（G07 生涯研修プロバイダー）され、エクステンションセンター開設の一環となり、ここに 10 周年を迎えましたことを心からお祝い申し上げます。

薬剤師は 1992 年の医療法改正により、医療人として生まれ変わり、その後各種の法改正を経て、今や高齢社会に対応する地域包括ケアシステムでの地域社会や医療関連職からも大いに期待される存在となっています。また、2004 年から薬学は 6 年制教育となり、薬剤師を輩出する薬系大学・薬学部教育・研究環境も大きく変化しています。

その中で、貴学は早期から生涯研修認定制度を立ち上げ、大学教育から薬剤師生涯学習という継ぎ目のない学習支援活動を行っていることに深く敬意を表します。薬剤師の自主的、自律的な自己研鑽である生涯学習の成果の証としての研修認定薬剤師が、かかりつけ薬剤師の備えるべき一要件となり、公に認められたことは、学習プログラムを提供する貴センターの果たす役割の重要性を示しております。薬剤師は、進歩・発展を続ける薬物治療を良く理解し、患者に対して安全で適正な医薬品を提供することが求められます。かかりつけ薬局や健康サポート薬局の流れは、地域社会における薬剤師への大きな期待が込められています。今や薬剤師の専門職としての機能は「情報提供の義務及び薬学的知見に基づく指導」であり、薬物治療における有効性や安全性を確かなものとしなくてはなりません。

貴学では、薬剤師養成教育から貴センターにおける諸活動を含め、あらゆる職域で活躍する薬剤師に開けた継ぎ目のない生涯学習環境を提供されています。まさに社会から信頼され、選ばれる薬剤師となるための薬学・薬剤師教育を実践されております。この方向性は、健康食品関連教育へも展開され、適確な評価・判断能力を有する、優れた薬剤師を育成し、医薬品との相互作用回避も含め、患者や地域社会、ひいては国民の安心・安全な生活環境づくりに貢献されております。貴学及び貴センターによる薬剤師養成と生涯学習の提供による専門能力向上のための積極的な社会貢献活動の益々のご発展を期待いたします。

10th
Anniversary



一般社団法人
兵庫県薬剤師会
会長
笠井 秀一

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年を祝して

神戸薬科大学エクステンションセンター開設 10 周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。

地域包括ケア構築に向けて、地域の薬局の役割も大きく様変わりをしていっています。2015（平成 27）年 10 月に「～「門前」から「かかりつけ」、そして「地域」へ～」をテーマとする「患者のための薬局ビジョン」が厚生労働省より公表されました。

地域で高齢者の生活を支えるためには、薬剤師もより一層の多職種との連携が求められます。2017 年 8 月に開催した、多職種連携に先駆けた薬業連携強化を目的とする兵庫県薬剤師会、病院薬剤師会連携 1 周年記念大会においては、県下 5 大学の先生方にもご参加をいただき誠に有難うございました。兵庫県薬剤師会では今後も学・薬・薬連携強化を進めて参りますので引き続きのご指導宜しくお願い申し上げます。

神戸薬科大学エクステンションセンターが我々薬剤師にとって職能研鑽の場になりますことを大いに期待しております。今後益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



一般社団法人
兵庫県病院薬剤師会
会長

橋田 亨

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年をお祝いして

この度は、エクステンションセンター開設 10 周年、誠におめでとうございます。

今日、第一線で活躍する薬剤師は自らの日々研鑽を欠かすことはできません。兵庫県病院薬剤師会においても多くの講演会、研修会を企画し会員に提供しているところですが、今日の目まぐるしく進歩を遂げている薬物治療の変化に対応し、新しい情報を自らの実践に活かせるようにするには、系統だった学びのプログラムが必要です。その点、神戸薬科大学エクステンションセンターの提供される生涯教育プログラムは、最近の医療を取り巻く情勢を踏まえながら、テーマ・講師を的確に選定されており、内容も一般的なものから専門的なものまで幅広く薬剤師のニーズに応じていただいています。今後、益々事業を充実され、その成果がさらなる地域薬剤師の資質向上に活かされていくものと期待しております。今後とも宜しくお願い申し上げます。

10th
Anniversary



学校法人 神戸薬科大学
理事長

宮武 健次郎

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年を迎えて

神戸薬科大学エクステンションセンターは、このたび開設 10 周年を迎えることができました。関係各位のご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。

神戸薬科大学の生涯研修支援事業が 2007（平成 19）年に西日本の薬系大学として最初に薬剤師認定制度認証機構より生涯研修プロバイダー（G07）として認証されると共に、その生涯研修プログラムを推進する組織としてエクステンションセンターが開設され、10 年が経過いたしました。また 2017 年には「健康食品領域研修認定薬剤師制度」も特定領域研修制度として認証され、1 教育機関で初めて 2 つの研修認定薬剤師制度の認証を受けることができました。

西日本の薬系大学としていち早く 1975 年度より開始した「卒後教育講座」（CEP）は、「卒後研修講座」（CPD）と名称を 2009 年に変更しました。20 歳代から 80 歳代まで幅広い年齢層で毎年 500 名を超える受講者が土曜日、日曜日に熱心に受講される姿は、受講する学部学生に対しても生涯研修の重要性を理解する場となっています。「リカレントセミナー」、「薬剤師実践塾」、「健康食品講座」、「シンポジウム」など、実践的な内容を取り入れた豊富な研修プログラムを提供することで、更新も含め延べ 1,100 名を超える生涯研修認定薬剤師を神戸薬科大学は認定してきました。

また、2017 年には JR 住吉駅近くに 130 名程度収容できるセミナールームと 50 名程度を収容できるコミュニティルームを配置した「地域連携サテライトセンター」を開設しており、薬剤師実践塾や健康食品講座などは、大学キャンパスだけでなく地域連携サテライトセンターを活用する計画となっています。

薬学教育モデル・コアカリキュラム（平成 25 年度改訂版）において、薬剤師として求められる基本的資質のひとつに自己研鑽が記載され、「薬学・医療の進歩に対応するために、医療と医薬品を巡る社会的動向を把握し、生涯にわたり自己研鑽を続ける意欲と態度を有する」ことが必要とされています。

神戸薬科大学はエクステンションセンターを通して、豊富な生涯研修支援プログラムを提供することにより、薬剤師の自己研鑽を支援する体制を構築してまいりますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



神戸薬科大学 学長
エクステンションセンター長

北河 修治

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年を迎えて

神戸薬科大学エクステンションセンターが開設されて 10 周年を迎え、記念誌を出版するにあたり、学長、エクステンションセンター長として、関係の皆様へ厚く御礼申し上げます。本学の生涯研修支援事業は、開始当初から現在に至るまで、本学教職員をはじめとして多くの人が携わり、ここまで発展してきたものです。また、本部、支部を問わず同窓会の皆様のご協力があったのであり、ご尽力いただきました同窓会の皆様にも厚く御礼申し上げます。

神戸薬科大学は、2007（平成 19）年 6 月に公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構（CPC）から西日本の薬系大学として初の「生涯研修プロバイダー」（G07）の認証を受けています。また、生涯研修支援事業を実施する機関として、同年 9 月にエクステンションセンターを開設しています。これらの活動は、本学のみならず薬学全体への波及効果があり、中心となっておられました松田芳久特別教授（当時、現・名誉教授）はその貢献が認められ、平成 19 年度の公益社団法人日本私立薬科大学協会教育賞を受賞されています。その後の教職員の皆様と支部を含め、同窓会の皆様方の熱心な活動により、神戸薬科大学の生涯研修支援事業は、全国でも特筆すべき充実した内容で行われるに至っており、本学の大きな特徴となっています。2015 年度に実施されました公益財団法人大学基準協会による点検・評価でも優れた点として評価されています。また、CPC から 2017 年 12 月に特定領域認定制度の認証を受け、「健康食品領域研修認定薬剤師制度」（P05）を発足しました。一つの研修機関において「G」、「P」両方の認証を認められたプロバイダーは神戸薬科大学が初めてとなります。地域包括ケアの中での薬剤師の職能の意義が問われ、生涯研修の重要性が増しています。そうした状況下で、2 つの薬剤師研修認定制度をもっていることは、本学にとって大きな強みとなります。2017 年 9 月 1 日に東灘区住吉の校地に竣工しました「地域連携サテライトセンター」を、地域の多職種との連携活動の場とし、生涯研修に活用しながら、特色ある生涯研修支援事業を展開することによって、地域医療の発展と健康の維持・向上に、これまで以上に貢献できる人材の育成に努めたいと考えています。今後とも、ご支援ご協力のほど、宜しくお願ひ致します。



初代
エクステンションセンター長
神戸薬科大学
特別教授
棚橋 孝雄

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年を迎えて

近年の進歩が激しい医療現場において、薬剤師が期待される職務を果たすためには、薬剤師養成に取り組む大学の薬学教育の充実と卒後の継続的な自己研鑽が不可欠である。そのため薬学教育の年限延長の議論とともに、生涯にわたる継続研修の必要性が強調され、質の高い生涯研修を制度的に保証する仕組みが期待されていた。それを受けて、2004（平成 16）年に、薬剤師に対する生涯学習と認定制度を第三者評価し、基準に適合する優れた研修認定制度を認証する薬剤師認定制度認証機構が設立された。しかし、薬系大学では 2006 年に始まる 6 年制薬学教育への対応が急務であり、積極的に生涯研修プロバイダーに名乗りを上げる大学は限られていた。

しかし、本学では永年にわたる卒後教育の歴史があり、その事業に取り組んできた松田芳久特別教授（当時）、長嶺幸子講師（当時）や同窓会の池田千恵子会長（当時）らを中心とする有志が認証機構への申請に向けた取り組みを開始していた。当時、次期学長に内定していた私は、大学が社会に開かれ、生涯学習に貢献することの意義と責任を認識し、積極的に支援することとした。2007 年、本学は西日本の薬系大学として初の生涯研修プロバイダーの認証を受け、独自に認定薬剤師証を交付できることになった。直ちにエクステンションセンターを開設、各種委員会と緊密な連携のもと、事業の企画・運営を開始した。

もとより、生涯学習には社会の動きや時代の要請に即応した企画が求められる。従来からの卒後教育や同窓会と共催の研修会などの充実に加えて、時宜に合ったテーマを取り上げたシンポジウム、フィジカルアセスメントの講習会など、種々の新たな取り組みが開始された。健康志向の社会動向を背景に健康食品講座が開始され、また、高齢化時代を迎えて在宅チーム医療に貢献する薬剤師養成の重要性から、地域の医師会を中心に他職種連携を推進するエナガの会の協力を得て、在宅医療コースも立ち上げた。また学生にも各種研修事業を開放し、学生時代から社会で活躍する薬剤師までシームレスの研修としている。

この 10 年間のエクステンションセンター事業の充実と発展は、歴代の事業委員長、各委員、センターの教員、職員の熱意と創意によるもので、その尽力に深い感謝と敬意を表したい。さらなる発展のためには、事業に対する全学的な理解と支援を基盤に、受講者の高い学習意欲と、それに応える企画・運営委員、職員の努力と熱意が不可欠である。今後も激しい医療環境の変化に問題意識をもちつつ、薬剤師の資質向上に貢献しうる質の高い企画を新たに展開し、エクステンションセンター事業が益々発展していくことを強く期待している。



神戸薬科大学
同窓会長
宮田 興子
(大 21 回)

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年を祝して

母校である神戸薬科大学におかれましてはエクステンションセンター開設 10 周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

母校は、「薬剤師の資質向上」のために生涯研修の重要性を早く 1975 (昭和 50) 年から認識され、長年にわたり卒業研修に取り組んでおられました。一方、同窓会本部も 1994 年 4 月に薬剤師の生涯教育の充実を図るために、学術研修委員会を設立し、その後、各支部においても学術研修委員会が設置され、研修会が定期的に行われるようになりました。2007 年には研修制度が統合され、同窓会の研修事業は母校の生涯研修支援事業に入れていただき、新たな出発をいたしました。この 10 年間、同窓会支部も薬剤師に広く学習する機会を提供するために、種々の独自性のある研修会を行い、高い資質を持つ薬剤師の養成に貢献してきました。これまでの同窓会の研修事業における成果は、諸先輩方の努力の賜物です。ここにお礼を申し上げます。

2016 年 4 月より同窓会長を拝命し、母校の先生方および同窓会員の皆様方との話し合いを通して、若い卒業生の研修会参加人数が少ない実情を知りました。昨今、薬剤師の医療への関わり方が大きく変化している時期であるからこそ、若い卒業生の日々の勉学が重要と考えられます。そこで、エクステンションセンター事業で若い卒業生が主体となって行う症例検討会を立ち上げました。この会の特徴は、医師の立場からコメントをいただくと共に、薬学の特徴である基礎薬学の分野からもコメントを行い、幅広い知識をもった問題解決型薬剤師の養成を図っていることです。

医療の中での 2025 年問題、すなわち、医療が必要となる高齢者が劇的に増えていく状況がすぐそこまできています。この中で薬剤師は何ができるか、真剣に考えなければならないと思っています。そのためにも卒業研修の充実が不可欠です。

母校は 2017 年 9 月には、地域医療に貢献する目的で「地域連携サテライトセンター」を開設されました。この施設を利用して様々な地域課題に関する学生教育も行われる予定とお聞きしています。さらに、2017 年末に「健康食品領域研修認定薬剤師制度」が認証され、薬剤師の生涯研修を更に充実されています。同窓会員の方々には母校が実施されている生涯研修にて研鑽を積み、社会で活躍できる人材として成長していかれることを願っています。

最後になりましたが、このように充実した薬剤師研修制度を構築していただきました母校に感謝いたしますと共に、これからの母校の益々のご発展をお祈りいたしております。

「科学する心」を思い出す場所

呉市生活衛生課 山下 千波
(大 29 回)



神戸薬科大学エクステンションセンター開設 10 周年、おめでとうございます。
私が神戸（女子）薬科大学に在席したのは、1977（昭和 52）年 4 月から
1981 年 3 月。薬学部がまだ 4 年制の時代です。その頃、国家試験合格 100%の実績を支える大学の支
援は手厚く、夏休みも特別講義が開講されていました。

私は地元の呉市役所に就職し、薬学部で学んだ知識を活用しながら食品衛生行政などに携わってきまし
た。しかしながら、同級生の大半が病院や薬局に就職する中、調剤業務から離れているのは寂しくもありま
した。その間、薬剤師免許が錆びないように、最新の知識を習得するため、エクステンションセンターが開
講している講座を受講し続けました。研修認定薬剤師及び健康食品指導薬剤師の認定を受けたことは心の
支えになったような気がします。

ベンゼン池のある学舎は、私にとって「科学する心」を思い出す場所であり、薬剤師の可能性を広げるべく、
たゆまない努力をされている母校を誇らしく思います。

開設 10 周年、おめでとうございます

そらまめ薬局 辻井 理津子
(大 32 回)



私は病院勤務約 10 年の後、17 年という子育て専念期間がありながら、今も尚、
訪問薬剤師として働かせて頂いています。これも、その期間中も大学エクステンシ
ョンセンターの卒後教育を継続して受講していたお陰です。

その創設には諸先輩方の並々ならぬご尽力があったと伺っており、誠に感謝の念に堪えません。卒後教育
にもその年毎に動向を踏まえた素晴らしい講師陣を誘致して頂き大変刺激を受けております。

昨今、必要とされているかかりつけ薬剤師、在宅訪問薬剤師は、いかに専門家として医療に参画でき
るかが問われています。患者様を中心におき、薬学的知識を総動員して自ら考え、患者様の利益になる医療
を提供する。これが出来てこそ本物の薬剤師だと思います。

私はそれを目標に研修手帳が一杯になるほどの講座を受けてきました。

一つ知識が増えると、まだまだ自分が無知であることに気付かされます。

「学問に終わりなし」。今後も実践に即した、心あるエクステンションセンターの講座に期待します。

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年記念誌に寄せて

三重中央医療センター薬剤部 **溝口 和代**
(大 43 回)



神戸薬科大学エクステンションセンター開設と生涯研修認定制度の認証取得 10 周年を迎えられたことに、心よりお慶びを申し上げます。

私が大学を卒業したころの病院薬剤師の役割としては、外来調剤中心で処方せん通りに間違いなく調剤をすることが求められていました。わずかながら入院患者への服薬指導を行っていましたが、病棟に行っても患者さんがどのように医薬品を使い、そしてどのようなことに困っているかについての知識は、今思えば皆無だったと思います。そのような状況で病棟活動を広げようとしても、知識が乏しい上、薬剤師一人での研鑽では限りがあると感じ、エクステンションセンターが開設される以前から行っていた社会人対象の研修会に、仕事の合間を縫って参加させていただいていました。その研修会は現在と同様、大学の先生方だけでなく臨床で活躍されている医師や薬剤師が講師としてご指導され、即戦力になるものでした。薬剤師として活躍するためには、今後も最新の知識・技能・態度を継続して習得していく必要があります。そのためには、エクステンションセンターのような存在は大切です。またエクステンションセンターにおいては時代に沿った研修会を開催することが求められ、開催には並々ならぬ努力をしていただき、いつも感謝しています。

この 10 年の間で、薬局薬剤師・病院薬剤師ともに、国民から求められる社会的役割が大きく変化してきました。2015（平成 27）年 10 月に厚生労働省が提示した「患者のための薬局ビジョン」の中では、「対物業務から対人業務へ」ということが示されています。これは薬剤師は、薬という“物”の仕事をしていると国民からは見えているということです。これを“人”の作業へとシフトする必要があります。“人”である患者に医薬品を提供した後、責任をもってフォローアップし、その薬学的評価を次回処方までに医師にフィードバックできるような働き方が、今以上に求められるのではないのでしょうか。そうすれば医師の仕事の負担も大きく減ると期待でき、さらに薬剤師の生きる道が開かれると思います。既存の形態にとらわれることなく日々自己研鑽を継続し、それを次世代に伝えられるものにしていきたいと考えています。

末筆ながら、神戸薬科大学エクステンションセンターの一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

10th
Anniversary

一生学び続ける覚悟

中西薬局 仙波 貴広
(大 47 回)



薬剤師の研修認定が調剤報酬の一要件になり、様々な認定薬剤師が作られ、薬剤師に生涯研修が広まりつつある。だが、薬剤師が学び続けなければならない本当の理由は何か。

医療人である薬剤師の責務は、患者さんに寄り添い、とことん向き合い、問題を解決していくことである。そして、薬剤師が扱わなければならない問題は病気や薬、健康、行政サービス等、多岐にわたる。

多様な問題を適切に解決していくには、薬学を基盤とし、臨床現場で必要となる、幅広く、浅くない知識が必要になる。目の前の患者さんがどのような問題、想いを持っているかを探し出し、適切な解決策を提供し、それを検証する技術も必要となる。そして、知識、技術を活かすために、患者さんの役に立ちたいという強い想いが何より必要となる。

つまり、臨床で患者さんの望みに応え続けていくためには、一生を通して自己研鑽を続け、知識・技能・態度を深め、成長し続ける覚悟を持たなければならない。これが、薬剤師が学び続けなければならない本当の理由であると考えている。今後もこの意識をもって自己研鑽に取り組んでいきたい。

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 年の軌跡 次世代を担う臨床薬剤師の育成を考える

医療法人橘会 東住吉森本病院 佐古 守人
(大 53 回)



私は卒後、東住吉森本病院に入職し、病棟担当薬剤師として活動している。当初は大量の臨床的な疑問を解決できる場がなく、目の前で患者の容体が悪化するのをただ見ているだけであった。

その中で母校から届いたのが、卒後研修講座開催のお知らせであった。まさに知りたい領域かつ著名な講師の先生方であり、内容の充実ぶりに驚いたことを今でも鮮明に記憶している。その後、可能な限り研修講座を受け続け、得た知識を現場で活用するということを繰り返した。結果、現在、集中治療室を担当する傍らで各診療科の医師から難渋症例等の薬物治療の相談を受けるようになった。

また、ご縁によりエクステンションセンターが開催する症例検討会の企画・運営に関わっている。薬局・病院・大学・その他のフィールドで活躍中の薬剤師が症例を通して、ディスカッションを行っており、大変満足度の高い研修会となっている。様々な分野の薬剤師が集まって議論できる環境を与えてくれた母校の先生方には感謝の言葉が見当たらない。

今後も微力ながらエクステンションセンターに協力し、臨床・研究を共に実践できる臨床薬剤師の育成に尽力しながら、私自身も医療に全力で携っていく。

生涯研修プログラム受講にあたって

薬局勤務 **山下 知宗**
(大 62 回)



神戸薬科大学エクステンションセンターが実施している生涯研修支援プログラムは、日々の業務において患者様や医療従事者へフィードバックできる内容になっており、非常に役に立っています。また公開講座の受講料が魅力的な価格となっており、加えて開催場所が通い慣れた出身大学ということもあり、気軽に参加しやすくとっても心強く感じています。

ところで、私は患者様に常に穏やかな気持ちで接して相手を観察し、その人が望み求めていることを日々模索し、信頼関係を築き上げていくという対応を心掛けています。“来局していただいた方々の笑顔が絶えず、薬局の雰囲気も明るく気軽に立ち寄れる”という理想へ近づけるよう、本研修で学んだことを調剤業務やOTC薬販売、健康相談などといった日々の業務へ活かしています。なお今後の研修には、セルフメディケーションへの対応も慮り、OTC薬の講座などの検討をお願いしたいと思います。

さて、2018（平成30）年に診療報酬改定が施行されます。特に個別改定項目では、かかりつけ薬剤師・薬局の機能の評価、薬剤師・薬局による対人業務の評価、後発医薬品の使用促進などの項目で新たな評価方法が検討されています。今まで以上に地域に根差した、かかりつけ薬剤師・薬局へと変化していけるよう、今後とも研修会への参加をしつつ、精進していきます。

10th
Anniversary

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設 10 周年記念誌

執筆者（執筆順）

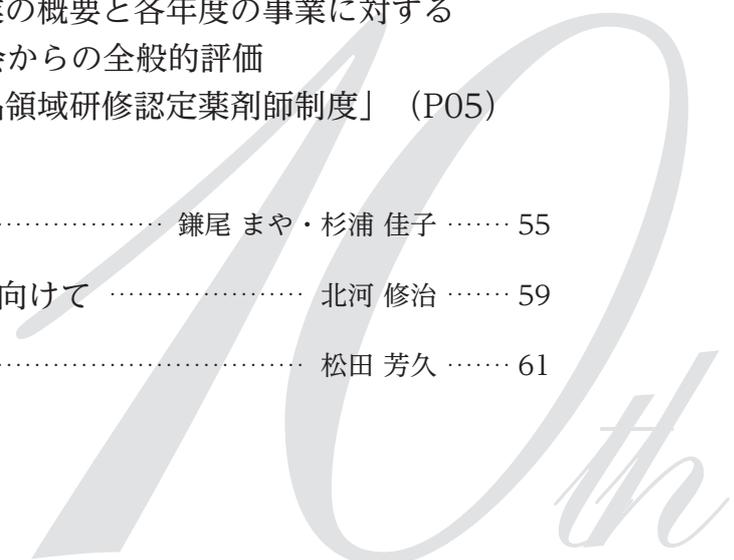
松田 芳久	名誉教授 初代エクステンション事業委員会 委員長
岡田 功	事務局次長 兼 企画広報課課長 前エクステンションセンター主査
杉浦 佳子	エクステンションセンター課長補佐
岩川 精吾	健康食品領域研修事業委員長 兼 特別教授 学長特命補佐（生涯研修担当）
長嶺 幸子	エクステンションセンター生涯研修 事業委員会委員 前エクステンションセンター臨床教授
鎌尾 まや	エクステンションセンター講師
北河 修治	学長 エクステンションセンター長

神戸薬科大学エクステンションセンター 開設10周年の軌跡と今後の展開

— 薬剤師の社会的役割の向上と職能の高度化を目指して —

目 次

1. はじめに	松田 芳久	16
2. エクステンションセンター開設の経緯	松田 芳久	17
2.1 神戸女子薬科大学時代の卒後教育活動		
2.2 生涯研修支援事業の目的と理念		
2.3 申請準備会の立ち上げ		
2.4 認証取得とエクステンションセンターの開設		
3. 事業運営を支える事務局活動	岡田 功・杉浦 佳子	23
3.1 創設期：エクステンションセンターの開設から第1回認証更新まで (2007年9月－2010年7月)		
3.2 発展期：認証更新を受け継いで (2010年8月－)		
4. 事業の企画と運営	岩川 精吾・長嶺 幸子	34
4.1 「生涯研修認定制度」(G07)による研修支援事業		
4.2 過去10年間の研修支援事業の概要と各年度の事業に対する 生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価		
4.3 特定領域認定制度「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05) による研修支援事業		
5. 事業の点検と評価	鎌尾 まや・杉浦 佳子	55
6. 今後の生涯研修支援事業の発展に向けて	北河 修治	59
7. おわりに	松田 芳久	61



1. はじめに

医学や医療の学術・技術水準が日進月歩で変貌している医療現場では、薬剤師はコメディカルの一員として他の医療スタッフや患者との信頼関係を構築することが不可欠であるが、そのためには生涯にわたって自己研鑽を積み重ね、業務に関わる新しい知識や技能を修得して、資質の向上を図らねばならない。また、それとともに薬剤師が時代の趨勢に柔軟に対応できるよう、大学側にも支援態勢を整えることが求められている。したがって、これからの薬系大学は単に薬剤師の養成機関にとどまらず、社会で活躍する薬剤師からの期待とニーズに応えるための不断の努力と体制作り（“薬剤師の母港”としての機能強化）も当然必要であることは、今や論を俟たない。

このような状況のもとで、本学は厚生省（当時）の支援を受けた有限責任中間法人 薬剤師認定制度認証機構（CPC：Council on Pharmacists Credentials、現在は公益社団法人）へ生涯研修認定制度の認証申請をしていたところ、2007（平成19）年6月20日無事に首都圏以外の大学では初めて（全国の大学の中では4番目）「生涯研修プロバイダー（提供機関）」（G07）として正式に認証された。これを機に学内に活動拠点として「エクステンションセンター」を新たに開設し、専任の教職員を配置して本格的な生涯研修支援事業を円滑に運営する体制を整えることとした。

本センターは開設以来2017年で早10年を経過したが、この間、数々のユニークで実践的な研修プログラムを広範囲かつ積極的に提供することによって、本学の社会的活動に大きく貢献するとともに、ゆるぎない実績を重ねてきた。また、開設10年を機に前述の認証取得に関連して、新たに申請していた特定領域認定

制度「健康食品領域研修認定薬剤師制度」（P05）が2017年12月15日に認証され、事業内容を一層拡充させることとなった。これらの実績は各方面から注目されるとともに、高い評価を得ているが、何よりも受講者である社会人薬剤師からきわめて好評を博するなど、多大な成果を収め、内容、規模ともに国内有数の事業に発展している。

そこで今回、開設10周年を記念して小冊子を発刊することによって、これまでの軌跡を改めて検証するとともに、次なる10年に向けて足掛りの礎とすることとした。

本冊子ではエクステンションセンター開設に至るまでの経緯を回顧することに始まり、センターの事業運営の現状について述べるとともに、生涯研修認定制度における4件の基幹事業について個別に成果と実績を報告している。またこれら4事業に加えて、前述の「健康食品領域研修認定薬剤師制度」において、申請前後の経緯を踏まえて、従来と新制度のもとで開講する「健康食品講座」の目的と方向性の違いについても明確にし、解説した。更に事業を安定的に発展・充実させていくためには、これら諸事業に関する自己点検・評価が不可欠であるとの認識に基づき、過去10年間の事業に関する受講者からのアンケート結果を客観的に分析し、今後の企画に資することとした。最後に、これまでの事業成果の確認と、問題点及び改善点の抽出、事業を取り巻く環境変化への対応策、並びに今後の事業展開に向けた抱負を総括している。

次項にこれまでの記憶と記録に基づいて、項目別に要点を述べる。

（松田 芳久）

2. エクステンションセンター開設の経緯

薬学教育6年制のスタート(2006年)に伴って、既存の4年制大学を卒業した、キャリアの比較的浅い薬剤師からは、「今後は4年制下での卒業者が、6年間にわたって高度な学識を修得し入職してきた新任者を現場で指導しなければならないという事態に陥る」ことに対する少なからぬ懸念や戸惑いが各方面で聞かれるようになってきた。このように、既職の薬剤師は実務経験は豊富であっても、これを支えるための広範囲に及ぶ医学・薬学の科学的知識を改めて体系的に修得する機会に乏しく、これに加えて全国各地で開催されている卒後教育講座や各種の研修会の多くは、ややもすれば断片的又は表面的な情報の提供に終始しており、知識の整理という点では必ずしも十分に満足できていないのではないかと推察された。

このような状況に鑑みて、本学は社会人特別選抜制度を導入した、大学院を含む“開かれた大学”を目指して、医療現場の薬剤師に有用性の高い生涯研修の場と情報を提供するとともに、薬剤師業務活動のための強力で信頼性の高い専門的支援拠点の構築が必須であると考えに至った。

2.1 神戸女子薬科大学時代の卒後教育活動

生涯研修プロバイダーのような一大事業は、単なる思いつきや貧弱な構想を描いただけでは到底認証されるはずもなく、これまでの実績と成果に基づいた今後の綿密な事業計画の成否が多数の評価委員によって厳正に審査される。

本学はかねてより有限責任中間法人 薬剤師認定制度認証機構(CPC、現在は公益社団法人)の内山充理事長(当時)から申請を勧奨されていたが、申請当時、研修支援事業において既にかんがりの実績を積み上げていた。すなわち、全国屈指の伝統・実績と規模を誇る「卒後教育講座」(現在は「卒後研修講座」に改称)をはじめ、「リカレントセミナー」(1998(平成10)年開講)、「薬剤師実践塾」(2004年開講)(4.1「生涯研修認定制度」(G07)による研修支援事業1)~4)参照)などである。これらのうちで最も重要な柱である「卒後教育講座」のルーツは43年前の1975

年まで遡らねばならない。当時、新しい知識の吸収と研鑽の重要性・必要性が高まり、神戸女子薬学専門学校時代から伝統的に受け継がれてきた、卒業生の旺盛な知識欲・向学心と、強い熱意と要望に応える形で、大学側でも積極的に卒後教育の実施に踏み切ることにした。この講座の発足が全国の大学中で東京薬科大学に次いで第2番目であったことから容易に窺えるように、当時の本学の教育方針は、“卒後教育の草分け的存在”の一校として、時代を先取りするものであった。名称は「神戸女子薬大卒後教育(CEP(セップ): Continuing Education in Pharmacy)」とされたが、学内講義室の収容定員の関係から、当初、受講対象者は近畿圏ならびに愛知、岡山、広島各県在住者で、卒後15年以上経過した者とし、開催時期は7月又は9月の3日間(いずれも土、日曜日)とされた。当時の学内広報誌「ききょう通信」によれば、夏休み中の猛暑にもかかわらず、40代から60代までの卒業生が熱心に講義に耳を傾けている姿は真剣そのものであった、と記されている。ちなみに毎回2日以上受講した者には学長から履修証書(現在は廃止)が手渡され、その総数は第10回までで延べ2,225名に及んでいる。なお、既に第1回から受講者にアンケート調査を行っており、感想や希望・要望などを集約していることは、特筆すべきことである。これらの状況を総合すると、当時の関係者の先見性と進取の精神には深い敬意を表すべきであろう。

卒業生の熱意に支えられた卒後教育は、前述した講義室の収容定員の関係で第10回(1984年)までは受講者数は概ね一定(すなわち、ほぼ満席状態)で推移してきたが、この頃から筆者を含む数名の教員によるこれまでのボランティア活動に替えて、教授会のもとに企画・運営のための卒後教育企画委員会を本格的に発足させることにした。また講師陣も学内教員に加えて学外の医学・医療関係者を積極的に招聘することにしたため、第12回を終えた頃から受講(希望)者が急激に増加しはじめた。このため第15回(1989年)からは卒後15年未満の受講希望者からの強い要望に応えるため、受講対象制限を撤廃して対象を全卒業生に拡大するとともに、会場を初めて学外の西山記念会

館（収容定員：約 500 名）に移すことによって受講者の急増に対応できるようにした。更に第 20 回（1994 年 この年から共学制導入により校名を神戸薬科大学に変更した）ではそれまで本学出身者に限定していた受講対象者を他大学出身者にも開放するという公開講座制に変更したため、受講者数はその後若い薬剤師を含めて右肩上がりに増加し、西山記念会館でも収容しきれなくなった。これらの状況の中で、他大学出身で毎年受講される、いわゆるリピーターは着実に増加し、その割合は予想をはるかに上回る 25% を超えるまでに至った。このように本講座が学外で広く知られるとともに高く評価されるようになってきたのは、我々関係者にとって誠に心強く喜ばしい限りであった。このため、2 年後の第 22 回（1996 年）からは学内に新築されたばかりの 5 号館の 5 階と 6 階に連なる「ききょう記念ホール」（収容定員：約 720 名）へ会場を再度変更することにした。ところが予想外にこの回の受講者数は 800 名近く（1 日あたり）に達し、同ホールだけでは到底収容しきれなかったため、苦肉の策として別階の小講義室（収容定員：50 名）3 室に大型モニターテレビを設置し、受講してもらうことにした。このような会場併設方式は熱心な受講者からはきわめて好評で、広い固定機のほかに、受講中に講義室からの出入りが自由である、受像画面が鮮明で理解しやすく、落ち着いた雰囲気を受講できるなどの感想が寄せられ、“固定客”ができる有様となった。この態勢は以後、現在に至るまで続けられている。なお、多数の受講者に快適で効率的な研修をしていただく目的で、同じプログラムと講師陣（9 名）により秋期に再度開催するというスケジュール（受講日程選択制）を数年間実施したこともあったが、講師の日程調整が必ずしも円滑に行えないこともあり、大変苦勞を重ねた。

本講座開設以来四半世紀を迎えた、記念すべき第 25 回（1999 年）では、『今、医療の最前線で何が行われているか』というメインテーマのもとに、最先端の医療分野を展望することにした。また、この回には当時の公益社団法人 日本薬剤師会会長の基調講演をはじめとして、最終日に『これからの薬剤師は何をなすべきか』というテーマのシンポジウムを初めて盛り込むなど、多彩な企画により大きな成果を収めることができた。なお、プログラムの編成にあたっては毎回 9 コマのうち医学分野を 6 コマとし、薬学関係を含むその他の関連分野 3 コマを<トピックス>として各日に配置し、常に医学と薬学のバランスを考慮した内容としており、この

基本方針は現在に至るまで継承されている。

更に第 33 回（2007 年）は折しも認証取得直後の開催となったため、本講座はその記念すべき最初の総合学術研修講座となった。これに伴って、これまで常に斯界の第一人者や優れた医療関係者を全国レベルで講師として招聘するなど、全国有数の卒後教育講座の実施母体を担ってきた生涯教育企画委員会に代わって、第 34 回（2008 年）からは新たに開設した「エクステンションセンター」が事業を引き継ぎ、集約的な薬剤師生涯教育を目指して事業を拡大・発展させていくこととなった。なお「卒後教育」時代からの流れを容易に確認できるように、通算開催回数はリセットせずに継続することとした。

ところで、第 20 回以降から常に高水準（700 名以上）を維持してきた受講者数は、近年種々の要因が重なり合って、全体としてやや漸減傾向にあるのは否めない。このような現況は決して本学に限った問題ではなく、広く薬剤師生涯研修支援事業の全般に関わる重要な問題として捉えるべきである。今後の対応にあたっては、冷静な分析と的確で効果的な解決策が求められる（5. 事業の点検と評価、6. 今後の生涯研修支援事業の発展に向けてを参照）。

なお、長年にわたって受講者から馴染まれてきた公開卒後教育講座の英名略称（CEP）は、生涯研修支援事業に対する大学側のスタンスをより明確にしたいとの方針に基づいて、2009 年から CPD（Continuing Professional Development）に改称した（4. 1「生涯研修認定制度」（G07）による研修支援事業 1）を参照）。

2.2 生涯研修支援事業の目的と理念

2000 年頃から医療過誤に関する夥しい情報が種々のマスメディアを通して我々の耳目を集めるようになってきた。当時の米国科学アカデミー医学部会の調査によると、米国では毎年 4 万 4 千～9 万 8 千人の入院患者が医療事故で死亡しており、このうちでも医薬品に関係する事例は、薬物治療を通じた積極的な医療への貢献にもかかわらず、少なからぬ割合を占めていることが報告されている。このような状況は実数は違っても、我が国においても概ね同様ではないかと推察される。厚生労働省ではかかる事態を憂慮して 2001 年 10 月に医療事故の防止を目的とした、いわゆるヒヤリ・ハット事例の収集作業をスタートさせた。このほかに、病

院薬剤部以外の医療機関においてもリスク・マネジメントの重要性やインシデント・レポートの必要性などが医療関係者の間でしきりに指摘され、医療に携わる薬剤師を取り巻く環境はますます厳しくなってきた。したがって、薬剤師が真に他の医療職や患者からも信頼され、医療人として職責を全うするためには、日々たゆまぬ研鑽に励むことによって、急速な進展を遂げる医学や医療水準に追随する以外に道はない。このような努力によってこそ初めて国民医療に資する薬剤師の質を確保できるといえるであろう。しかし、薬剤師が多忙な日常業務の中で自学・自習によって自己を高めていくのは決して容易ではなく、むしろ至難の業である。

前項で述べたように、本学ではこのような状況の中で早くから卒後教育の重要性と必要性を認識し、地道ながら着実に成果を収めてきた。これらの活動は学外の関係者からの深い理解と期待感によって支えられ、年月を経るにつれて規模の拡大と質的向上を果たしてきたといえる。したがって、ますます高度化・複雑化する医療現場からのニーズに十分に自信をもって応え得る体制の整備を一層進めることが今後の本学に求められる重要な検討課題である。

繰り返すまでもなく、本学の掲げる目標「生涯研修の推進と大学の積極的関与」において、両者の関係は表裏一体であり、不可分である。米国の名門大学であるスタンフォード大学の教育理念である“Not four years, but forty years（大学はあなたの4年間のためにあるのではなく、40年間のためにある）”は、分野を問わず、これからの大学のあるべき姿を示唆するものとして正鵠を射たものであるが、本学による薬剤師の生涯研修支援事業もまさにこの理念にかなうものの一つであろう。この理念には我々は大いに勇気づけられるとともに、これからの活動を支える強力で貴重な提言として、常に意識するところとなった。

このような理念に基づいて、信頼性の高い生涯研修支援事業を推進するには、以下の基本的諸点を常に踏まえながら企画・運営にあたる必要がある。

1. 選定したテーマや各論と、これに関連する講師の選定が適切で時宜を得ているか
2. 講義内容が受講者の学識の深化と技能の向上に役立つか
3. 受講者が講義内容を業務に有効に活用することが期待できるか
4. 日常の薬剤師業務におけるモチベーションの高揚に寄与できるか

したがって、大学側の自己満足的あるいは独りよがりの観点からではなく、常に受講者にとってどれだけのメリットが得られるかという点に主眼を置いた生涯研修の意義を確認することが求められよう。

さらに社会人薬剤師の研修支援を一層活発化することによる、彼らの“アクティブ・ラーニング（自ら積極的に学ぶ姿勢）”に及ぼす大学側の寄与はきわめて重要で意義深い。硬直的で柔軟性に欠けたプログラムに安住するのではなく、常に数歩先に視点を定め、時代の動きと要請に即応する姿勢が今後必要であることは今更言うまでもない。

2.3 申請準備会の立ち上げ

1994年に公益財団法人日本薬剤師研修センターや一般社団法人日本病院薬剤師会による研修認定薬剤師制度が発足したのを契機に、2、3の学会認定薬剤師制度が1997年から2000年にかけて相次いで開始された。その後種々の専門分野で専門薬剤師の必要性が高まり、その養成のための研修が各地で始められたが、同時に、それらの水準維持と相互調整の必要性も認識され始めた。一方、2003年頃から薬学教育6年制に向けての改革が本格化し、国家試験受験資格として特に重視される実務実習の指導者認定の必要性が示された。

これらの情勢を背景として、薬剤師に質の高い生涯研修の機会を提供し、研修成果を認定する生涯研修プロバイダーから申請された研修・認定制度について、公的第三者評価機関として客観的評価を行い、基準に適合する制度を認証することを目的として、関係する職能団体、学術団体、大学関係団体などの協力のもとに、2004年にCPCが新たに設立された。

このような動きの中で、本学でもこれまでの実績を基盤にした薬剤師支援活動を一層強固にしたいという気運が大学側と同窓会側の双方に芽生え始めた。そこでまず2006年8月に筆者らが池田千恵子会長（当時）と個人的な意見交換を行い、同窓会側の並々ならぬ熱意と意欲を確認した後、翌々月の10月11日に「薬剤師生涯研修支援システム検討の推進に向けた懇談会」を予備的に開催し、両者のベクトルが一致していることを再確認した。そして同年11月8日に初めて「第1回薬剤師認定制度認証機構申請準備会」という名称のキックオフ・ミーティング（合同準備会）を立ち上げた。準備会のメンバーは大学側有志6名（平井み

どり、岩川精吾各教授、松田芳久特別教授、杉本 功特任教授、長嶺幸子、寺岡麗子各講師）、同窓会側3名（池田千恵子会長、田中良子学術研修委員長、西川寿美子同副委員長）（職名、肩書きはいずれも当時）のほか、陪席として事務職員3名を含む、合計12名である。以後は、長年にわたって卒後教育関係の委員を務めてきた筆者による議事進行のもとに、ほぼ2週間に1回のハイペースで活発な議論と検討を重ね、わずか4カ月（合計9回）ですべての詳細な申請資料を完成するまでこぎ着けることができた。

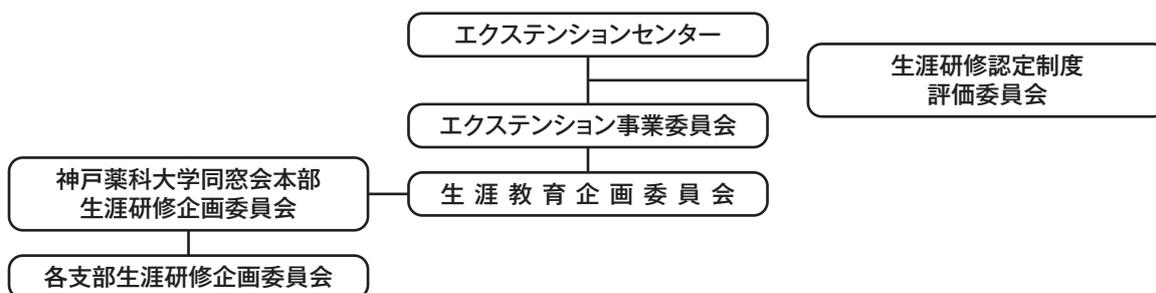
同窓会の本支援事業への関与のしかたについては当初、両者間で根本的な意見の食い違いが認められたが、率直で忌憚のない議論を重ね、紆余曲折を経た結果、最終的に図2-2の組織図下側のような位置づけとすることでようやく了承された。ところで、大学と

同窓会のコラボレーション効果として、一般に大学が単独で実施する場合には、元々医療現場の実情に必ずしも十分に明るくはないのに加えて、ややもすると理解が偏る嫌いがあるのに対して、医療に従事している薬剤師は常に明確な当事者意識をもっている上に、広範囲な視点に立って最新の情報に触れることができるというメリットを有している。さらに問題点の把握や適切な解決法の見出し方について、効率的に対応する能力があることも有利である。このような観点から、時代に即応したテーマの策定や適任講師の選定などにおいて大いに寄与することが期待できる。出発点における両者のこのような大同は、以後の企画を相互に補完しあうことによって円滑にするとともに、協力関係を改めて確認することになった。このような大学と同窓会による共同運営形態は全国で最初である。

図 2-1 学内におけるエクステンションセンターの位置づけ



図 2-2 エクステンションセンター組織図（創設時）



ところで、本学の生涯研修支援制度には他のプロバイダーの大半と比類すべき重要な特色点がある。まず第一点に前述のように大学単独で事業展開するのではなく、全国17支部で定期的に活発な研修会や講演会等を開催して卒後研修に相当な実績を重ねている同窓会と緊密に連携し、より拡大された研修支援を進めていこうとするところに大きなポイントがあること、更に第二点は、活動基盤を強固にする必要があるとの認識に基づいて開設した「エクステンションセンター」の学内での位置づけである。仄聞するところでは、教

授会構成員の一部に「教授会の下部組織とすべきではないのか」という意見もあったが、準備会では、“学部、大学院と並び立つ、学長直属の第三の教育組織”（図2-1参照、センター長：学長）とするという、当初からの基本方針と独立性を強く貫いた。これによって教授会での議論と手続きに時間を費すことなく、エクステンション事業委員会が所掌するすべての事項の企画・立案から実施・運営に至るまでのプロセスを極めて効率的かつ迅速に稼働させることができることになり、この体制が今日に至るまで事務手続き面で全く支障なく維

持・運営されているのは、他のプロバイダーのいずれにもみられない、本学独自の大きな特色点である。更に本学では、本制度の名称を「生涯研修支援」としたことである。本学では薬剤師が社会で自立して主体的かつ能動的に行動することに主眼を置いているため、「生涯教育」ではなく「生涯研修支援」を掲げ、このための最適な研修の場と情報を提供するというスタンスをとっている。ここでは行為の主体はあくまでも薬剤師であり、大学はその積極的サポーターとしての任務を担うべきであるという姿勢である。

本学では活動拠点の正式名称として、米国の大学で用いられている“エクステンション（社会人を対象とした公開教育）”を冠した「エクステンションセンター」とすることにした。当時このようなカタカナ名は我が国では未だ耳新しく、薬系大学ではもちろん皆無であったので、CPCの内山 充理事長（当時）からも「カタカナのスマートな組織名は貴学が初めてで、新鮮なイメージを与えている」という、好意的な評価をいただいた。なお、この名称を用いているのは現在に至るまで本学のみである。ちなみに、当時米国では各分野にわたって既に400を超えるエクステンション事業が展開されていた。

次に着手したのがセンターの大綱となるエクステンションセンター規程と、センター内で中核を占めるエクステンション事業委員会及びその周辺委員会（生涯教育企画委員会、生涯研修認定制度評価委員会）に関わる規程、並びに「研修認定制度実施要領」、「生涯研修認定制度実施細則」などの諸規定の策定と整備であった。

以下に当時の各委員会の設置目的と任務について簡潔に述べる。

1) 制度運営のための委員会

エクステンション事業委員会

本制度の管理運営を全般にわたって統括するとともに、認定のための審査にあたる。薬剤師の倫理的及び学術的水準を高め、また、薬剤師の資質向上と職能強化のために、関係する専門分野に関するエクステンション事業を展開する。なお規程中の（目的）の項の条文では、「神戸薬科大学エクステンションセンターの生涯研修認定制度に関するセンター事業の効率的な展開を図ることによって、薬剤師の資質と職能向上のための研修支援に寄与する」としている。また同規程中の（任務）の項では

「本委員会は5項目に及ぶ広範囲な事業について審議する」とした。

2) 企画・運営のための委員会

生涯研修企画委員会

前項の委員会の下部組織として、事業の企画・立案と運営にあたる。規程中の（目的）の項の条文では、「神戸薬科大学エクステンション事業委員会の方針に基づき、生涯研修支援事業の円滑な推進を図り、薬剤師職能の資質向上のための研修支援プログラムを企画し、運営する」とした。なお、本委員会は大学側と同窓会側の委員により構成されている。

3) 制度評価のための委員会

生涯研修認定制度評価委員会

エクステンション事業委員会の運営状況を適正に評価し、その結果に基づいて適切な助言を与えることによって、本制度の改善と一層の充実を図るための委員会である。このため、学外から複数の有識者を委員として委嘱するとした。規程中の（目的）の項の条文では、「エクステンション事業委員会による薬剤師生涯研修支援事業が円滑かつ適切に実施され、所期の目的を達成しているか否かを評価し、この結果に基づいて事業委員会に適切な指導又は助言を与えることにより、事業の改善・充実と発展を図ること」としている。

なお上記3委員会のうち、エクステンション事業委員会については、かねてより申請中の特定領域認定制度である「健康食品領域研修認定薬剤師制度」（P05）が2017年12月に新たに認証されたため、健康食品領域研修事業委員会が従前のエクステンション事業委員会（2017年12月よりエクステンションセンター生涯研修事業委員会）と分離・並立する状態で新設された。これに伴って、これら両委員会の上部組織としてエクステンションセンター事業統括委員会が設置されることになった（図3-1参照）。

2.4 認証取得とエクステンションセンターの開設

このように複雑多岐にわたる諸項目を精力的に検討してまとめ上げた最終申請書は2007年3月に完成し、3月12日開催の教授会で承認された後、翌3月13

日に CPC へ提出され、多数の評価委員による厳正な評価を受けることになった。本制度の認証を受けるためには「事業目的に適合した管理運営体制を有し、公正かつ非営利の精神に則り、適切な運営が行われていること」が必要条件の一つとして挙げられているが、各委員からのコメントは概ねきわめて好意的で、組織面で若干の懸念が示されたコメントに対しても本学からの適切な回答により問題なく了承され、同年6月20日に棚橋孝雄新学長のもとで晴れて認証取得することができた。なお、この取得は、既に取得済みのプロバイダー（公益財団法人 日本薬剤師研修センター、東邦大学薬学部、一般社団法人 薬剤師あゆみの会、慶応義塾大学薬学部、一般社団法人 イオン・ハピコム人材総合研修機構、明治薬科大学）に次いで7番目であるが、この数は2018年3月現在延べ30機関に達している（資料編参照）。本学のこれまでの多大な成果及び実績と、同窓会との緊密な連携体制に基づく今後の広範囲な事業展開や積極的な運営方針がCPC及び同認定制度委員会から高く評価されたものであるが、足掛け8か月に及んだ我々準備会メンバーの努力がまさに報いられた思いであった。なお認証に伴って、今後は本学が独自に公的な認定を行うことができることになり、認定証はいずれのプロバイダーから交付されても同等に評価される。

CPCからの認証を受けて、同年9月に開催予定のCEPに向けて直ちにセンターの体制固めに着手した。すなわち、初代エクステンション事業委員長として筆者が委嘱され、同時に学内の配置転換人事が発令された結果、センター教育職員として「医療薬学総合研修センター」（業務終了により2008年閉所）における12年間の豊富なキャリアを積んだ長嶺幸子講師（当時）が着任し、併せて就職課から着任した岡田 功主査（現・事務局次長兼企画広報課課長）を迎え、3人体制でスタートすることとなった。両氏のエネルギーで進取の気性に富んだ、実務面における目覚ましい活躍によって、複雑な事務処理がスムーズに進められた。それでも開設当初はあまりにも懸案事項が多く、毎日がまさに“走りながら考える”状態で、特に受講シールや「生涯研修履修手帳」の発行等にあたっては種々の手違いもあり、大変苦労した。秋のCEPに間に合わせるべく準備中のこのような事態に際しても、両氏の沉着な対応と処理によって難局を無事に切り抜けることができた。

筆者の後、エクステンション事業委員長は太田光熙特任教授に引き継がれ、現在はセンター長である北河

修治現学長がエクステンションセンター生涯研修事業委員長を兼任している。2018年4月からは岩川精吾特別教授が健康食品領域研修事業委員長として就任している。両委員長の斬新な発想力と幅広い洞察力に基づいた今後の成果の発揮が大いに期待されている。一方、教育職員と事務職員については、長嶺幸子臨床教授の後任として2017年4月に意欲的で新進気鋭の鎌尾まや講師が衛生化学研究室から配置換えにより着任し、新スタッフの参画により、センターが大いに活気を帯びてきた。また、岡田主査の後任として既に2010年8月に教務課から着任している、ベテランの杉浦佳子主査（現・課長補佐）が緻密で事業の諸分野に精通した手堅い実務・企画経験を活かして、センターの運営に貢献している。

このような陣容のもとで、隔月に開催されるエクステンションセンター生涯研修事業委員会において、これまでの事業内容の点検・確認と今後の方針が策定され、これに基づいて豊富な実務経験と現場感覚をもつ、病院や調剤薬局に勤務する有能な本学出身者を含めたエクステンションセンター生涯研修企画・運営委員会で、具体的なプログラムを事業別に検討するというシステムで運営している。

このようにして、全事業の開催日数は年間延べ22日に及んでいる。具体的には、次々項で詳述される5件の事業（「卒後研修講座」、「リカレントセミナー」、「薬剤師実践塾」、「シンポジウム」、「健康食品講座」）と、その後新たに1件の事業が追加されて現在に至っている。各事業においてはいずれも時宜を得たテーマを選定することを目標にしているが、これらの事業の中で特筆すべきものの一つとして、いち速く取り上げた、薬剤師のフィジカルアセスメントへの取り組みがある。本件については当時、一般社団法人 日本病院薬剤師会や公益社団法人 日本薬剤師会において近未来の薬剤師業務としての重要性が強調され始め、厚生労働省からも理解を示されるなどの“追い風”もあって、本学では他のプロバイダーに先駆けて採り入れている。また「リカレントセミナー」における医学部出身の江本憲昭教授（本学臨床薬学研究室）による熱心で幅広い専門的継続指導や協力の甲斐もあって、『薬剤師はバイタルサインを薬物治療にどのように活かすか』をメインテーマとして掲げたシンポジウム（2009年）が大いに盛り上がり、関係者から高い評価と好評を博するなど、常に本学の進取性を遺憾なく発揮してきた。

（松田 芳久）

3. 事業運営を支える事務局活動

3.1 創設期：エクステンションセンターの開設から第1回認証更新まで (2007年9月－2010年7月)

1) 組織固めと事務局の運営

「生涯研修認定制度」(G07)の認証取得に伴い、エクステンションセンターを開設すべく、2007(平成19)年8月から本学1号館2階で改装工事が開始された。工事完了を待って配置転換の人事異動が学長から発令され、同年9月1日に教育職員として長嶺幸子講師(当時)、事務職員として岡田 功主査(当時)が着任した。また、エクステンション事業を統括するエクステンション事業委員長に松田芳久特別教授(当時)が学長から委嘱された。

2) 組織・人員と事務局の運営

全国屈指の伝統・実績と規模を誇る卒後教育講座を核とした、いくつかのユニークな研修システムとプログラムが高い評価を得て認証に至ったが、組織・人員と事務局の運営においてもそのユニークさは際立ったものだった。

規程により、学長がエクステンションセンター長を兼務し、社会的ニーズに柔軟に対応するため、学部教授会や大学院教授会の下部組織ではなく、本センターを学長直轄の独立した組織としたところも、他プロバイダーには見られないものであった。これまで多数の生涯研修プロバイダーが認証されているが、このような組織運営をしているところは未だない。実際、エクステンション事業を展開するにあたり、意思決定のスピードが格段に高く、そのためシンポジウムなどの旬なテーマを取り上げた研修会をタイミングよく開催できている。

エクステンションセンター開設と同時に、松田芳久事業委員長、長嶺幸子講師、岡田 功主査で討議を重ね、まずは本センターの立ち上げと事業を軌道に乗せることを第一のミッションとすることを確認した。具体的には、本センター及び事業の学内へ

の周知を第一に掲げた。また提供する研修プログラムについては、収益性よりも研修内容や受講者の満足度を優先することも併せて確認した。

3) 委員会活動のサポート

エクステンション事業を円滑に推進するために、以下の委員会が設置され、事務局は、これらを全面的にバックアップする態勢を敷いた。

a) エクステンション事業委員会

生涯研修認定制度の管理・運営を全般にわたって統括するとともに、認定のための審査にあたる。薬剤師の倫理的及び学術的水準を高め、また、薬剤師の資質の向上と機能の強化のために関係する専門分野に関するエクステンション事業を展開する。

b) 生涯教育企画委員会

神戸薬科大学エクステンション事業委員会の下部組織として事業の企画・立案と運営にあたり、神戸薬科大学同窓会本部生涯研修企画委員会と互いに緊密に協力することにより、研修プログラムを企画する。事業ごとに分担して小委員会制とした。

c) 生涯研修認定制度評価委員会

エクステンション事業委員会による薬剤師生涯研修支援事業が円滑かつ適切に実施され、所期の目的を達成しているか否かを評価する。事業委員会に適切な指導又は助言を与えることにより、事業の改善・充実を図る。

4) 開設当初のエクステンション事業

a) 卒後教育講座

1975年から開講しており、最新の医学・薬学情報を総合的かつ体系的に修得できるように編成された学術的色彩の濃いユニークな研修講座である。筆者が在任中の3か年(2007年～2009年)の受講申込者数は、それぞれ753名(延べ受講者数は2,045名)、906名(同2,420名)、788名(同2,235名)であった(いずれも3日間)。

- b) 卒後教育関東地区講座
母校の卒後教育講座を関東地区でも開催してほしいとの同窓会関東支部からの要望に応じて、認証取得を契機に標記講座を開講した。2007年～2009年の受講者数は、それぞれ146名、174名、133名であった。
- c) リカレントセミナー
「卒後教育講座」のアドバンスコースと位置づけしており、専門領域別・職域別に比較的小人数の受講者を対象とするセミナー形式の研修会である。疾患と薬物治療の観点から、より高度で重要な学識の修得を必要とする服薬指導分野を重点的に「服薬指導シリーズ」として企画した。
- d) 薬剤師実践塾
「初任者研修」
初任者及び復職を希望する薬剤師を対象に開催する再教育プログラムとして企画した。2日間開催し、これらの成果を踏まえたフォローアップセミナーを約4か月後に開催した。
「指導者研修」
指導者養成を目的としたワークショップ形式のリーダー研修会で、学生の長期実務実習における指導者としての中堅薬剤師を対象とした、アドバンスコースと位置づけられる研修会である。
- e) 大学院科目等履修生・聴講生制度
「医療実務研修特論I（卒後教育講座）」及び「医療実務研修特論II（リカレントセミナー）」を大学院生の選択科目として配当した。受講生からはいずれも好評で、レポート提出のうえ、単位を認定する制度とした。
- f) 本学同窓会との共催事業
本学同窓会各支部との共催により各地で支部研修会を開催した。
- g) 公開市民講座
本学では2000年度から公益社団法人日本薬学会近畿支部との共催のもとに、身近な健康や薬に関するテーマを取り上げた公開市民講座を開催してきた。市民に健康や病気と薬に関する正しい情報を提供することによって、これらに対する理解と認識を一層深めてもらい、いつまでも心身ともに健康で充実した生活を送っていただくことを目的としている。本センターの開設

に伴い、主管部署をこれまでの教務課からエクステンションセンターに移管し、内容の一層の充実を図った（現在は、企画広報課に移管）。

5) 広報活動

- a) ホームページの開設とロゴマークの制定
生涯研修認定制度の認証取得と同時にホームページを開設した。開設当初は制度の説明やエクステンション事業の説明にとどまり、開催予定の年間プログラムの紹介までは至っていなかったが、1年間かけて充実させることとした。
松田芳久事業委員長から「認定薬剤師」の認定証取得について、事案を集積し事例集を作成するよう指示があり、ホームページに掲載した。なおこのホームページは、2008年度に最新のトピックスや開催講座情報などにフレキシブルに対応できるよう、リニューアルした。
また、さまざまな広報活動を展開するにあたって、ロゴマーク（本冊子表紙参照）を制定した。本学の薬剤師生涯研修支援への想いや活動展開の方向性などをロゴマークに込めて、積極的な活動の拠り所とした。
- b) 第40回日本薬剤師会学術大会でのPR活動
本センターの開設直後の2007年10月7日（日）～8日（月・祝）に神戸市で開催された第40回日本薬剤師会学術大会の会場において、約1万名の参加者全員に本センターの紹介パンフレットを配布した。岡田 功主査と学生アルバイト7名による人海戦術で「神戸薬科大学が認定薬剤師のプロバイダーになったこと」を大いに広めることに成功した。
- c) マスメディアとの連携
薬事日報社と面談し、どのような工夫をすれば出版社や新聞社に記事として取上げていただけるか、編集長や記者から具体的なアドバイスをいただいた。それらに基づいてプレスリリースなどに反映させた結果、シンポジウムやリカレントセミナーなどがメディアで大きく取り上げられることになった。
- d) 研修認定薬剤師証（カード）の制作
本学による研修認定薬剤師数の増加を促進させるため、携帯用として研修認定薬剤師証（プラスチックカード）を作成した。2008年度から実施したところ、ほとんどの研修認定薬剤師申

請者が希望し、大変好評を博した（資料編参照）。

e) 広報先の選定

広報活動を幅広く効率的に展開するため、エクステンション事業の広報先を選定した。病院、保健調剤薬局、企業などの就職先、本学同窓会各支部、薬系大学や他の生涯研修プロバイダー、マスメディアや職能団体などの送付先を調査し、データベース化した。また同様に、広告掲載先も選定して効率的な広報につなげた。

f) 生涯研修認定制度の周知から「生涯研修支援プログラム」案内へ

本センター開設当初は、本学の生涯研修認定制度の周知を目的に小冊子を作成したが、エクステンション事業が順調に拡充・進展し手応えを感じ始めた2009年度からは年間プログラムのみを掲載し、携帯に便利なB6版サイズとして発行した（資料編参照）。

g) 「健康ガイドブック ー日々の健康増進と活動的な人生をめざしてー」の発刊

一般社団法人 兵庫県薬剤師会監修のもと、市民自らが健康管理できるよう、「健康ガイドブック」を作成（15,000部）し、兵庫県内であらゆる機会を捉えて無料で配布した（資料編参照）。巻頭のご挨拶で兵庫県薬剤師会の東和夫会長（当時）は、「今回、神戸薬科大学エクステンションセンターの皆様をはじめとして、関係各位のご尽力により『健康ガイドブック』を発行できたのは意義のあることではないかと思えます。皆様日々の健康づくりにご活用いただくとともに、薬剤師の仕事についてご理解いただくための一助となれば幸いです。」とご寄稿いただいた。

本冊子を公開市民講座などのイベントや兵庫県薬剤師会各支部でも配布したところ、大変好評を博し、瞬く間に在庫が底をついた。松田芳久事業委員長の号令のもと、改訂版の作成に取り掛かった。

6) 認証プロバイダー連絡協議会への参加

認証プロバイダーと有限責任中間法人 薬剤師認定制度認証機構（CPC、現在は公益社団法人）や厚生労働省関係者などとの情報交換の場として、2008年2月23日（土）に初めて「第1回認証

プロバイダー懇談会」が開催された。CPCの内山 充理事長がコーディネーターを務め、挨拶と本懇談会の開催趣旨が述べられた。その後、各プロバイダーから紹介や実績報告があり、相互の質問や課題、またこの懇談会の在り方について活発な意見交換が行われた。次回からは、認証順に年2回の持ち回り制で開催されることになり、懇談会における主な協議事項は、①認定薬剤師資格の同等性及びそのPR活動、②研修認定単位、③研修の日時・内容のトレーサビリティの向上、④日本病院薬剤師会からのバイタルサインに関する課題への取り組み、⑤認証プロバイダーポータルサイトの構築、⑥認証プロバイダー連絡協議会の位置づけなどであった。

なお、2009年から本懇談会の名称は、「認証プロバイダー連絡協議会」に変更することとされた。

7) 新規研修プログラム

a) シンポジウム

エクステンション事業委員会において、「卒後教育講座」、「リカレントセミナー」、「薬剤師実践塾」に続く第4の柱として、「シンポジウム」を開催することが決定した。社会でクローズアップされている話題をタイムリーに取り上げたシンポジウムはエクステンションセンターをさらに大きく飛躍させるバネとなった。

第1回は2008年11月8日（土）に開催し、「ジェネリック医薬品の普及促進をめぐる薬剤師の役割」として後発医薬品を取り上げた。近年の医療行政の流れを見据えた、タイムリーな企画であったため、幅広い分野の関係者が参加され（151名）、概ね一定の成果を収めた。

第2回（2009年）は、医療現場におけるスキルミックス構築の一環として、「バイタルサイン」をキーワードに「薬剤師はバイタルサインを薬物治療にどのように活かすか」というテーマのもとに、開催した。「バイタルサイン」をテーマにした本格的なシンポジウムは未だ全国にも前例がなかったため、500名を超える参加者を得て、多大の成果と好評を収めることができた。各メディアでも大きく取り上げられ、本センターは生涯研修プロバイダーとして重要な責務を果たすことができた。

第3回（2010年）は「プライマリ・ケア

における薬剤師の役割」をテーマに取上げた。多職種（薬剤師、医師、看護師、ケアマネジャー）からの考え方が提示され、患者中心の地域医療とケアにおいて多種の医療職の連携と協働が必須であり、その中で薬剤師がどのような役割と能力が必要であるかを中心に討議された。大変内容の濃いものとなり、221名の参加者からは極めて高い評価を得た。

b) リカレントセミナー

「各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ」

午前中にあらかじめ2コマの講義（講師は医師と薬剤師）を行って基礎知識を修得した後、これに基づいて午後から本学教員を含む指導薬剤師（タスク）によるアドバイスを受けながらグループワークを展開し、最後にこれらの成果を一同で発表するという形態としたところ、参加者から多大の好評を得た。

本セミナーは症例検討や情報交換の場として高く評価されるとともに、今後もこのような企画を是非続けてほしいとの要望が多数寄せられた。

「健康食品シリーズ」

「健康食品」への積極的関与が薬剤師に期待されている最近の社会的要請を背景として、健康食品の根幹である「効果」に対する薬剤師としての判断や、薬物治療中の患者に対する相互作用などの面で、薬剤師の立場としての指導力を高めることを目的に開講した。2009年2月8日～3月15日の各日曜日の6日間（6日のうち、後半の2日は欠席者のためのDVDによる研修）にわたって開催し、延べ1,124名の参加者を得た。

「フィジカルアセスメントに関する講義と実践」

2009年7月26日に開催したシンポジウムでの成果を基に、「実践編」ともいべきセミナーを開催した。本学臨床薬学研究室の江本憲昭教授を講師とした、シミュレーターを用いた研修では、種々の基本的事項について手技を含めて理解を深め、好評裡に終了した。なお申込受付開始後3日で定員超過に至るなど、受講希望者も多数に及んだため、追加開催も行った。先進的な本センターの取組みは、多くのメディアで取り上げられるなど、高く評価された。

c) 健康食品指導薬剤師認定制度

薬剤師の職域を広げるため、新しい分野である健康食品を取り上げ、本学独自の認定制度を立ち上げることをエクステンション事業委員会で決定した。これは、生活習慣病予防に関わる特定健康診査・特定保健指導制度が始まり、国民の健康への関心がますます高くなってきた社会背景のもと、ヘルスケアのために安全面も含めて薬剤師が大いに関わる必要があると判断したからである。諸規程及び実施要項の作成に取り掛かり、急ピッチで作業を進めた結果、2008年度から健康食品指導薬剤師認定制度を発足させることができた。

8) 情報収集と施設及び実習見学

a) 情報収集

企画の効率化とプログラムの一層の充実を図るために、各種の職能団体や学術団体の会誌における会告やその他の媒体を通して入手した情報の中で、本センターの事業に直接に有用と思われるものを収集すべく、エクステンション事業委員及び生涯研修企画委員に呼びかけを行った。これらの情報を分野や委員会毎にファイル・整理し、以後の企画において大いに活用した。

b) 「バイタルサイン」研修事業導入に向けての施設・実習見学と意見交換

本学にとって最初の経験となる「フィジカルアセスメント」の企画化に万全を期するため、先進的な活動を行っている九州保健福祉大学薬学部（高村徳人教授）、群馬大学医学部附属病院薬剤部（山本康次郎教授兼薬剤部長）、亀田メディカルセンター（佐々木忠徳薬剤管理部長、千葉県鴨川市）を松田芳久事業委員長、長嶺幸子准教授、岡田 功主査らが訪問し、貴重な意見や助言を得た。

c) 「プライマリ・ケア」研修事業導入に向けての施設及び・実習の見学と意見交換

第3回シンポジウム（2010年）開催に向けての準備を万全にするため、テルモメディカルプラネックス（神奈川県足柄上郡）、一般社団法人 日本プライマリ・ケア連合学会 矢澤一博理事を松田芳久事業委員長、長嶺幸子准教授、岡田 功主査らが訪問し、貴重な意見や助

言を得た。

- d) 全日本大学開放推進機構及び大学公開講座研究会への参加

講座運営方法などの相互情報交換及び勉強会などの公開講座担当者の集会に積極的に参加し、「大学公開講座では受講者増に向けてどのように取り組んでいけばよいのか」を学ぶとともに、「横の繋がり」を構築した。

9) 認証更新

2007年6月20日付けで認証されたが、3年間の有効期限（2010年6月19日）が近づいたため、2010年4月から認証更新申請の準備に入った。認証更新には「自己評価報告書」の提出が必須で、本報告書は、「薬剤師生涯研修プロバイダー評価基準チェックリスト」全項目に対応している。各項目の自己評点は、A：「優れている」、B：「基準をクリアしている、標準的である」、C：「改善の必要がある、改善検討中」、D：「問題がある、実施していない、必要がない」とされており、その評価の項目は次のとおりであった。

「事業の実施母体（組織・運営）」 4項目

「事業の全体像（方針・体制等）」 10項目

「研修制度の実施内容」 17項目

「認定制度の実施内容」 12項目

作成した素案をエクステンション事業委員会で精査した後、「自己評価報告書」を2010年6月14日に提出した。2010年7月7日にCPCから「自己評価報告書」に対する各委員のコメントが届いた。そこには、「大多数の委員より実施内容を高く評価する意見が寄せられている」とのコメントが記載されており、無事認証更新の審査をパスすることができた（同年8月25日 更新許可）。

認証更新の連絡が届くと同時に、岡田 功主查の人事異動が公示された。本センターの立ち上げと認証更新という所期の目的が達せられたためであり、本事務局の後任には、学外実習関係の着実な実績により学内外で高い評価を得てきた教務課の杉浦佳子主查が着任した。

事務引継ぎでは、今後の検討課題として以下の事項を申し送った。

1. e-learning の構築
2. 地域連携事業
3. 新たな研修プログラムの構築

4. 受講者増を目指すため、「生涯研修支援プログラム」をシラバス形式に変更して、春・夏号と秋・冬号に分けての年2回発行
5. 受講者の差別化（会員制、特典としての受講料ディスカウントなど）
6. 認定薬剤師証の交付者数の増加対策
7. 健康食品指導薬剤師証の交付者数の増加対策 → 「P」認証取得に向けて
8. 認証プロバイダー連絡協議会関係

（岡田 功）

3.2 発展期：認証更新を受け継いで

（2010年8月）

エクステンションセンターが設立されてから3年目に入った2010年8月1日付けでエクステンションセンターに異動となった。

いままで所属していた大学の法人事務や学部事務とも違う部署への異動は、正直なところ戸惑いがあった。周りからも様子を伺うような空気を感じ、距離を置かれ、自分の存在が浮いているようにさえ思えた。

これからエクステンションセンターでどのような仕事をするのか、自分は何をするのか、できるのか、どのような考え方で対応すれば良いのかもわからない状態であった。

エクステンションセンターを設立する際に中心となった松田芳久初代事業委員長や長嶺幸子前臨床教授から、右も左もわからない私に今までのことや、今進めていることなどについて機会があるたびに時間を割いて説明をいただいた。ただ残念なことに、私には新しい単語が並ぶだけで、それをどのように結びつけ、それらがどのように影響していくのかなど、想像もできず、何から始めれば良いのかもわからない状態であった。ただ、両教授の熱い思いを感じることはできたので、予定されている研修会を無事に終わらせることを願い、同じことを何度も長嶺幸子臨床教授に確認しながら恐る恐る始めるしかなかった。

卒後研修講座は、前部署である教務課時代から携わっていたが、それ以外の研修会については、どのように行われているのかわからなかったため、生涯研修支援事業が何なのかを理解することに時間がかかった。とにかく既に決まっている研修会の開催に向けてこれまでの資料をひっくり返しなが流れをつかむことで精一

杯の毎日だった。また研修会は、現場の薬剤師の方が対象となるので、当然ながら土曜日・日曜日の開催であり、休みの日に出勤することが当たり前の部署である。そのペースに慣れるのにも時間がかかった。

1) エクステンションセンターの運営

エクステンションセンターの事務局は、委員会の開催、研修会の開催、広報、研修認定薬剤師証や健康食品指導薬剤師証の発行に係わる業務のほか、テキストの作成、アンケート集計、研修会単位申請の受付、各種調査等に加え、大学の業務に関することもきわめて多く、これらの業務が一度に重なると処理時間に追われ、ミスなく適切に対応できているか不安なことも多い。

エクステンションセンターは学外を対象とした大学の重要な事務局のような機関で、すべてが学外の関係機関や関係者、受講者などへ直接に繋がるので、エクステンションセンター内だけで自己完結とはならない。

これらのエクステンションセンターの業務を支えているのが、事業運営組織である各委員会のメンバーである。

2) 事業運営組織

a) エクステンションセンター生涯研修事業委員会

この委員会は、学内の関係教員・職員と同窓会から推薦された委員で構成され、生涯研修の基本方針や生涯研修認定薬剤師の認定及び更新の審査、研修会に対する研修単位数の交付等、エクステンションセンターの中心的な業務について審議する委員会である。生涯研修事業委員会では、常に薬剤師の資質と職能の向上をめざし、厳しい目線で生涯研修支援について意見をいただいている。特に同窓会からは、現場の実情を熟知された委員に参画いただいているので、薬剤師の立場に立った貴重な意見も多く、生涯研修事業運営の中心となる委員会である。

また、エクステンションセンターが行っている事業については、設立当初は「卒後研修講座」、「リカレントセミナー」、「薬剤師実践塾」の3本柱を中心に始まったが、現在では、それらに「健康食品講座」と「シンポジウム」、そして今年度から「症例検討会」が加わり、6本の講座が有機的に動いている。各講座の特徴を

活かした研修内容や薬剤師の資質向上に繋がる研修会になるよう、既存の研修会にとらわれない、先を見据えた意見をいただける委員会でもある。

b) エクステンションセンター生涯研修企画・運営委員会

エクステンションセンターの研修内容を決定するのが生涯研修企画・運営委員会である。この委員会は、学内の教員・職員と同窓会から推薦された委員で構成され、エクステンションセンターで開催している「卒後研修講座」、「リカレントセミナー」、「薬剤師実践塾」、「シンポジウム」、「症例検討会」の各講座に相応しいテーマを企画立案し、それぞれのテーマに適任の講師に講演を依頼する。この委員会には、講座別に小委員会を設け、毎年8月～10月にかけて開催し、次年度の各講座の企画立案を行うが、エクステンションセンターの委員会中でも最も責任の重い大変な委員会ではないかと思う。

テーマは何かが良いか?そのテーマにあった講師の選考は?など、大袈裟ではあるが、この委員会での選定テーマと講師で、その研修会の成否が左右されるので、毎回どのような研修会が企画されるかと期待と不安の入り混じった思いで委員会を運営している。多くの思いが渦巻く中で、薬剤師を取り巻く社会の動きも考慮しながら、薬剤師に必要と思われるテーマを絞り、講師の人選へと移る。ここまでくれば、現場で活躍されている同窓会の委員は頼もしく、そのテーマに適した医師や薬剤師の名前が次々と飛び出してくる。また大学側の委員からは、豊富な人脈を活かし、各テーマに詳しい研究者等の名前が挙げられてくる。

テーマと講師候補が揃えば、次に講師との交渉へ移る。この交渉も委員の重要な仕事の一つで、面識のない著名な先生にも連絡をしていただくが、連絡をしても先約があり断られることも多々ある。その場合は、別の方のご紹介を依頼することになるが、概ね好意的に講演をお引き受けいただいている。このような講師への連絡は、多忙な委員のご尽力の賜物と感謝している。また、委員には、研修会当日の運営にも携わっていただいているが、研修会の運びは

委員のほうがベテランである。受講者の受け付けや講師の紹介、研修会のタスク等にも加わっていただくことで、薬剤師の現状や薬剤師に必要なことなど、また受講者が何を求めているか等、受講者からの声も聞き、次の研修会の企画に役立っている。

c) エクステンションセンター生涯研修認定制度評価委員会

この評価委員会は、神戸薬科大学エクステンションセンター生涯研修支援事業が円滑かつ適切に実施され、所期の目的を達成しているか否かを評価する委員会で、学内教員と学外の学識経験者から構成されている。年に1回開催されるが、やはり評価となると気になるものである。それぞれの研修会については、大成功とまでいかなくとも、受講者からの満足度もある程度得ているので問題は特になくとも、評価結果をいただくまでは、落ち着いた状態である。いただく評価については、受講者のニーズに応える配慮がなされた研修会を実施しているとの嬉しい評価をいただく一方で、今

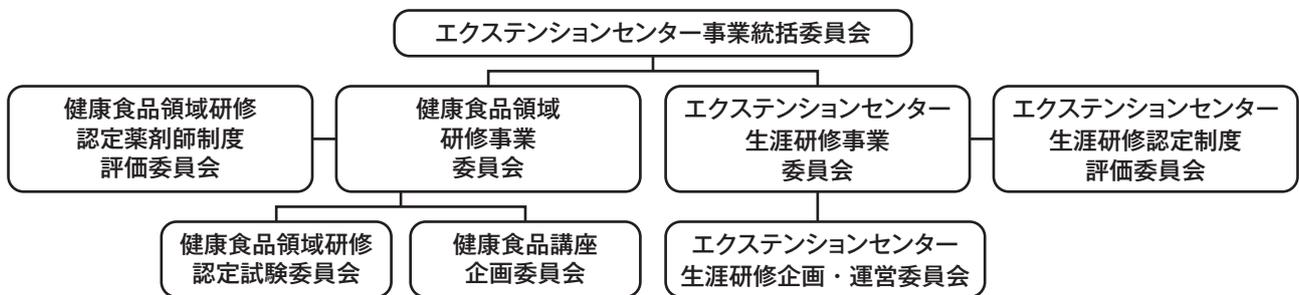
後の生涯研修のあり方として、薬剤師会等との連携や地域との関係性も踏まえ、運営・広報の活動等も工夫が必要ではないか等、将来への方向性を示した厳しい評価もいただく。

このように評価をいただく度に、どのような研修が望まれ、何が必要か、今行っている研修会から繋がることは何か等、研修実施機関の一つとして責任があると再認識する機会でもある。

d) 健康食品領域研修事業関連委員会

「健康食品講座」については、「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)が、2017年12月15日に新たに認証されたことに伴い、従来の生涯研修事業関連の委員会から分離・独立した委員会制度を立ち上げた(図3-1参照)。構成は、生涯研修事業に準じてはいるが、学外の健康食品に関する分野の先生方に委員をお願いし、関連団体との連携を行いながら、「健康食品講座」を企画することになっている。今後は、健康長寿を目指した、より一層興味深い講座が開催されることが楽しみである。

図 3-1 エクステンションセンター生涯研修支援事業組織図 (2017年12月～)



3) 研修会の開催に向けて

a) 講師との連絡

上記企画・運営委員会において研修内容や講師が決まれば、事務的な連絡とともに講演依頼を各講師へ行うが、先方は超多忙で、斯界では重鎮といわれる方が多い。そのような方々に講演依頼メールを送信するのは、いつも緊張する。まずは、メールが無事届くか、失礼なメールになっていないか等、返信メールをいただくまで何度もパソコンの受信トレイを確認している。

講演依頼時には、研修会のメインテーマに即した各講師の講演テーマをいただいているが、

素人でもこの講義を聴いてみたいと思うような、素敵なテーマを提示していただくことも多く、そのような返信メールが届くと急にその先生に親しみが湧いてくる。「ありがとうございます。よろしく願います。お待ちしております。」と笑みを浮かべながらお礼メールを返信する。しかし、良い返事ばかりではない。委員の先生方にせつなく繋いでいただいたにもかかわらず、送信したメールの内容が上手く伝わらず、迷惑をかけることもある。その時は、慌てて委員の先生に助け舟をお願いすることになる。このようなことを繰り返しながら研修会の開催に向けて準備

を整えている。

b) 研修会の広報

年間の生涯研修プログラムを見ると、エクステンションセンターでは1か月に2回のペースで研修会を開催している。上記企画・運営委員会において決定されたテーマや研修内容に沿って、研修プログラムの作成や広報を行っている。

広報はエクステンションセンターの大事な業務の一つである。エクステンションセンターに異動になった当初、松田芳久元事業委員長から「広報が大事ですからね」ということを言われた。エクステンションセンターの研修会の受講者は、他大学出身の受講者も含めて熱心な方が多く、何もしなくても受講者は集まってくるのではないかと思っていたが、アンケートによると、ホームページや職能団体の機関紙等を見て申込みれる方も多い。またその方たちがリピーターとして受講いただいているが、本学が開催する生涯研修は、薬剤師が求めるニーズに合致した内容で企画していることも受講者の定着に繋がっているのではないかと思う。

広報活動については、まだまだ不十分な点も多く、薬剤師を対象とした各種研修会の開催も多いなか、広報の方法については、更なる工夫が必要である。

c) テキストの作成

研修会の講義を依頼する際に、講演の原稿作成も併わせて依頼し、研修会で使用するパワーポイントをそのままテキスト原稿として準備している。受講者からは、講演で使うパワーポイントをすべてテキストに掲載してほしいとの要望があるが、原稿締切日から研修会当日までの最新情報（当然、図表の入れ替えや追加・削除等がある）も含めて準備いただくことも多く、また守秘義務のことも含め難しい点もある。さらに、テキストは白黒印刷で作成するため、カラーでいただいた原稿を白黒印刷でも見やすくなるように濃淡や文字の反転等を依頼するための確認作業を行っている。この確認作業では、パワーポイントの画像や内容の出来映えに思わず見入ってしまうこともある。一足先に研修内容を目にできるお得感を味わえる業務である。

d) 研修会開催準備と終了報告

エクステンションセンターでは、年間20日以上にわたる研修会を実施しているが、研修会の開催は学内外の協力なしでは実現できない。また、研修会は土曜日や日曜日の開催になるので、その準備は当然前週に行う。

当日の入構チェックの依頼、立て看板の設置、受講申込一覧、名札、実習研修の場合の備品、機の配置等、細かいことが多い。これらの事柄は、単に作業をこなすこととして「目的化」しがちであるが、そうになってしまうと悪い方向へ進んでしまう。講演を依頼した講師を始め、受講者にも気持ちよく研修会を受講し、充実した研修会と思っていただけることを願って準備する。当日になって思わぬトラブルが起こっても、対応してもらえる関係職員は出勤していないのが当然で、研修会の開催準備には施設課や他部署の協力をいただくが、今でも不安を抱えながら行っている。

土曜日や休日の開催であるが、毎回同じことを繰り返すだけでたいしたことではないということも耳にした。しかし、10年を超える生涯研修支援事業を大過なく無事に続けてこられたことは、きめ細かい気配りと万全の準備態勢の積み重ねが何よりも大きな要因となっていると思う。

研修会終了後は、講師への礼状はもちろん、研修報告として研修会の様子をデジタルカメラで撮影し、ホームページに掲載すると共に学内メールでも発信している。研修会の写真は迷(?)カメラマンが写すので、良い写真ばかりではないが、少しでも各研修会の雰囲気伝え、エクステンションセンター事業の内容を知ってもらう広報活動の一つであると考えている。

4) ホームページのリニューアル

エクステンションセンターで開催する研修会については、本センターのホームページへの掲載や、近隣薬剤師会や職能団体等の機関誌に掲載を依頼している。2016年度までは、研修会を一度でも受講したことのある受講者へ、メールや郵送により案内を送付していたが、大学のホームページが2016年1月にリニューアルされたのに合わせて、エクステンションセンターのホームページも一新

し、スマートフォン対応も整えた。同年4月からは、研修会の申込みもWebで行えるように変更した。Web申込みの導入については一抹の不安もあったが、順調に進み会員登録も1,100名を超えた。“要らぬ心配”をしていたのは、アナログから脱却できない自分だけだったのかも知れない。

5) 学部学生の受講

エクステンションセンターが開催している研修会は、開設当初から学内教職員、学部学生（他大学薬学生を含む）には、無料で受講できる研修会である。自主的に受講する学生は少ないが、テーマによっては興味を持つ学生もおり、学年を問わず、研修会に参加することができる。このエクステンションセンターの研修会をもっと多くの学生に受講させることができないかと北河修治現センター長（学長）、太田光熙前事業委員長と長嶺幸子前臨床教授と事務局において検討を進め、2013年度から専門教育科目の選択科目として単位化されることになった。現役薬剤師と同じ場で研修会を受講することで、将来の薬剤師像を描けるのではないかと、また、卒業後の生涯研修受講のインセンティブになるのではないかと期待もあった。単位化当初に受講した学生は、現役薬剤師と出席することや、専門的な研修内容に興味を深め、学部の講義とは違う雰囲気と環境で受講することに刺激を受けたと思うが、年々受講する意味の捉え方が大きく違ってきた。一部の学生には出席とレポートだけで単位を取得できるお手軽科目と考えられたのである。それでも、受講することに意味があると思っていたが、エスケープや、いい加減なレポートの提出等、残念ながら卒業要件を満たすための手段となった。学生だからそのように考えることは当然かもしれないが、この科目を受講する意義を理解せず、単位取得のみに走る学生からは、薬剤師のために企画した研修プログラムを汚されたように感じ腹立たしかった。しかしこれらの実情は、学生だけでなくエクステンションセンター側でも実施方法を改善する機会となった。2018年度からは、受講ガイダンスを行い受講者数も限定して意識を持った学生に受講させるように受講方法を変更した。

6) 「健康ガイドブック」の発行

エクステンションセンター開設後の2009年に社

団法人 兵庫県薬剤師会（現在は一般社団法人）、東灘区薬剤師会、同窓会の先生方の協力のもと、「健康ガイドブック」（資料編参照）を発行している（3.1 創設期：エクステンションセンターの開設から第1回認証更新まで（2007年9月-2010年7月）を参照）。この健康ガイドブックは長い間改訂されないままとなっていたが、医療の進歩に伴い、疾病の捉え方や検査値のデータ基準などが変化してきていることから、改訂版を作成することになった。改訂版の企画案を作成していた頃に、臨床薬学研究室の研究生である谷口美保子先生を中心とする臨床薬学研究室2015年度地域保健予防研究チームの学生達が発行していた疾病別の「RINYAKU Medical」をこの健康ガイドブックに使わせてほしいと依頼したところ、快諾をいただくことができた。その他に太田光熙前事業委員長に健康診断の際の検査値情報をまとめていただいた。また、長嶺幸子臨床教授、南 恵理子生涯教育企画委員（本学卒業生）、八木敬子臨床薬学研究室講師、西山由美生薬化学研究室講師、沖 和行薬用植物園課長（職名、肩書きはいずれも当時）、生薬部の学生にも協力を得て、2016年4月に改訂版を発行することができた。新訂の健康ガイドブックは、可愛いイラストが満載の見やすいガイドブックに仕上がりに、大変好評で、2017年4月には第2刷を発行することができた。

7) 公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構（CPC）とエクステンションセンター

a) 生涯研修認定制度について

2007年6月に有限責任中間法人 薬剤師認定制度認証機構（CPC、現在は公益社団法人）から「生涯研修認定制度」（G07）の認証を取得して2018年度で12年目に入るが、その間2回の認証更新申請を行った。

1回目の更新は、認定取得から3年目の2010年に行った。エクステンションセンターが設置されて3年となり、この間は、研修会の企画と開催を軌道に乗せることや、生涯研修の重要性を訴えながら、卒業生を始めとする薬剤師にこれからの薬剤師は認定薬剤師証の取得が必要であることを機会ある毎に勧奨する時期だったかと思う。

2回目の更新は、1回目の更新申請から6

年後の2016年に行った。認証取得してから9年目である。既に生涯研修の実施機関として実績も定着し、生涯研修といえば、神戸薬科大学が挙げられるほどになってきていた。このことは、生涯研修に対する揺ぎない姿勢とニーズに適応した研修会の実施を継続的にやってきた結果ではないかと思う。

2回目の更新に対する評価は、組織・運営や財政、各研修会の習得度評価等、多岐にわたる有益な評価をいただいた。これらのことは、真摯に受け止め、今後の生涯研修支援事業に活かしていく必要がある。現場で活躍する薬剤師が求めていることは何か、それらにどのように対応できるか等、研修企画内容も細かく検討する必要がある。

b) 健康食品領域研修認定薬剤師制度について

2017年度の大きなニュースとして、CPCから特定領域認定制度としてかねてより申請していた「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)の認証を2017年12月15日に新たに取得したことが挙げられる。

この制度は、いままで本学で実施してきた「健康食品指導薬剤師」を更に大きく発展させ、薬剤師による健康サポート活動の質の向上に貢献するとともに、国民の健康増進に一層寄与することを構想している。この制度は、CPCの内山 充前代表理事から早い時期に認証申請を勧められていたが、2016年春頃から申請準備に取り組んだ。申請準備委員会を立ち上げ、申請書の作成と資料をまとめ、修正対応を含む12回の委員会での議を経て申請した結果、無事に認証取得することができた。なお同一プロバイダーにおいて「生涯研修認定制度(略号G)」と「特定領域認定制度(略号P)」の両方の認証を認められたのは、本学が初めてである。この「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)は2018年度より本格的にスタートしており、薬剤師の専門性を活かした「健康食品」に関する情報提供などを行うために、栄養学や健康に関する広範囲な医学的知識も必要である。これらの専門分野の先生方にも協力を得ながら、魅力的な研修内容を企画しなければならないと考えている。認証を取得したことで、実施機関(プロバイダー)としての一層の責任

を痛感するが、生涯研修支援事業の拡充の一環として薬剤師業務に役立つ研修会を開催していきたい。

8) 認定薬剤師認証研修機関協議会(CAPEP)とエクステンションセンター

CPCに認証されたプロバイダーの会議体が認定薬剤師認証研修機関協議会(CAPEP)である。

この会議は毎年2回開催されている。研修会において交付される単位は、各プロバイダーごとの条件はあるが、プロバイダー間で互換性を持ち、新規や更新の申請時に使うことができる。本学が認証を取得後、程なくして設立されたこの会議は、当初、プロバイダー数も少なく、議題も各プロバイダーの活動報告等が中心だったようである。その後、2011年8月に開催された第8回協議会において新たに規約が制定され、会議の主催プロバイダーが議長を務め、代表・会計・監事の各役員(任期2年、認証取得順に3機関が担当)を置き、協議会運営を進める形となった。協議会では、薬剤師の資質向上のために何が必要でどのようなことができるか等、建設的な討議が行われている。新しいプロバイダーも迎え、2018年3月現在では、「G」「P」合わせて30のプロバイダーから構成される大きな組織となっている(資料編参照)。2018年3月には第21回の協議会が開催され、本学は、「生涯研修認定制度」(G07)と「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)の両制度の実施機関として出席する会議となった。

9) エクステンションセンターの今後の事業について

a) 「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム

患者の高齢化が進むなか、医療の高度化に伴い医療環境が大きく変貌してきている。このような状況下、多職種が連携した患者居宅における医療提供の重要性がますます高まっていることから、薬剤師も「在宅医療」を担うチームの重要な一員として他職種と協働し、専門性を活かした質の高い安心・安全な医療を提供することが求められている。エクステンションセンターでは、少人数の薬剤師を対象に、専門知識や技術をそなえた能力のある「在宅医療」を担う人材を育成するためのプログラムである『「在

宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム』を2012年度から事業の一つとして開始した。

このプログラムは長嶺幸子前臨床教授を通じて、仮家公夫神戸学院大学名誉教授にご紹介いただいた中村治正垂水区医師会副会長（現・本学臨床教授）のご尽力により、2013年3月に棚橋孝雄前学長と数岡一吉前垂水区医師会会長との間で協定を結び、正式な事業として実現したものである。

このプログラムの目的は、診察室見学や在宅患者宅訪問、訪問看護ステーション、老人保健施設等で研修を行い、学部学生の指導者を養成することにある。「在宅」の現場で他の職種がどのような専門性を活かした医療提供をされているかを理解することにより、薬剤師としての役割の再認識と他職種との連携を行うことである。2017年度までに24名が受講し、学部学生の実習指導や毎日の業務に活かすとともに、エクステンションセンターでの研修にも参画している。また次年度からは、前出の中村治正臨床教授が代表理事を務めている特定非営利活動法人として設立した「エナガの会」において、引き続き研修をお願いすることとなり、学部学生も交えた研修会も検討することになっている。

b) 症例検討会

エクステンションセンターの生涯研修は、例年多くの薬剤師が受講されるが、他の団体や機関でも多くの研修会が実施されていることもあり、受講者数がやや減少傾向にある。そこで、卒後間もない若い受講者に生涯研修に参加してもらうための方策として、また将来的には学位取得にも結びつけることを目的として、病院や薬局等で積極的に活動している若い卒業生を中心とした若手薬剤師に企画・運営に加わってもらい、卒後20年未満の卒業生（他大学出身者を含む）を対象とした「症例検討会」のトライアルを2016年度に実施した。これは受身の研修会ではなく、示された症例に対してアプローチ案を自由に発言する研修会である。トライアルでは活発な意見交換もあり、非常に有意義な研修会となった。

そこで、2017年度の生涯研修支援プログラ

ムでは、「薬剤師実践塾」の中で卒後20年未満の薬剤師と「在宅医療」等に経験豊富な薬剤師を対象とする「症例検討会」を合計3回開催した。いずれの研修会も概ね好評で、多くの事例を通してどのように患者さんに対応するか、薬剤師同士のディスカッションができる場となった。これらの成果を踏まえて2018年度は「症例検討会」を「薬剤師実践塾」から独立させた。各対象者ごとに2回ずつ、合計4回実施する予定である。

10) エクステンションセンターの今後の運営について

エクステンションセンターは2018年度で12年目に入るが、これまでの研修会の成功は、各委員のご尽力に加えて、講師の先生方の講義力と受講される薬剤師の向上心の結実である。それらが合わさって素晴らしい研修会を開催することができていると感謝している。

2018年度の研修会は21回を予定しており、既に進行しているが、学内外の先生方の協力を得て、素晴らしい研修会になるように進めたい。また今後は、大学だから行うべき研修、大学だから実施できる研修等、大学に求められたり期待される事項も増えるのではないかと思います。これらへの対応も必要となってくる。

大学とすべての薬剤師を繋ぎ、生涯研修の「聖地」は神戸薬科大学となるよう、今後ともセンター長を中心に各委員の先生方、学内の教職員、同窓会のご支援とご協力をお願いしたい。

おわりに、センター長である学長、事業委員長、教育職員に加えて、エクステンションセンターの業務を見えないところで支えてくれた、これまでのアルバイトや派遣社員の方々の協力と尽力も忘れてはいけないと思う。また、2018年現在エクステンションセンターの業務を担当してくれている野田薫子さんには、日常業務はもちろん、ホームページの改訂から「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)の申請のための各種資料の準備、そしてこの記念誌の発行に至るまで多大な支援をしてくれたことに感謝したい。

(杉浦 佳子)

4. 事業の企画と運営

生涯研修支援事業の企画と運営については、以下のように実施している。

エクステンションセンター生涯研修事業委員長はエクステンションセンター生涯研修企画・運営委員長を兼任すると共に、同委員会において議長となり、次年度1年間のおおよその開催日程案を作成する。その際、それぞれの研修支援事業が学内行事と重複しないように調整を行っている。日程調整後、同委員会は担当する研修支援事業の講義内容と講師陣案を作成し、各委員により講師候補者に講義の可否の打診を行い、内諾をいただく。次に、エクステンションセンター事務職員は、出講依頼書を講師の所属機関に送付するとともに、講師候補者から履歴書、講演内容のファイルを送付していただき、講演内容のファイルを利用して研修テキストを作成する。

受講希望者は神戸薬科大学ホームページ (https://www.kobepharmaceutical-u.ac.jp/extension/lifelong_training/)、認定薬剤師認証研修機関協議会が運営するポータルサイト認定薬剤師.com (<https://ninteiyakuzaisi.com/roadmap.html>) あるいは神戸薬科大学エクステンションセンターからのダイレクトメール、電子メールなどで研修内容を確認し、申込み。大部分の申込みは、本学ホームページの【公開講座/セミナー Web 申込システム】から会員情報を入力後、受講を申込み状況になった。申込み後、受講申込者が登録したメールアドレスに申込み完了の連絡が神戸薬科大学エクステンションセンター (extc@kobepharmaceutical-u.ac.jp) から返信される。

主に、土曜日、日曜日、祝日に研修支援事業を開催しており、2017（平成29）年度は、24日間神戸薬科大学エクステンションセンター生涯研修支援プログラムを開催した。なお、2017年9月にJR住吉駅の南側に「地域連携サテライトセンター」^{註）}が竣工した。今後は、この「地域連携サテライトセンター」において開催する研修会も増加することが期待されている。

註）神戸薬科大学住吉校地の有効活用構想：住吉校地の有効利用については、2009年6月にエクステンションセンターの関係教員有志（松田芳久特別教授、岩川精吾教授、長嶺幸子講師、職名は

いずれも当時）によっていくつかの有望な構想案が真剣に検討され、文書化した提案書が当時の学長に提出されたが、日の目を見ないままであったという経緯がある。北河修治学長のもとで2017年9月に「地域連携サテライトセンター」として竣工し、長年の夢がようやく実現したというべきであろう。

現在実施している研修支援事業の概要を以下に記す。

4.1 「生涯研修認定制度」(G07)による研修支援事業

1) 卒後研修講座—CEP から CPD へ—

最新の医療や医学を学べる場を提供するため、神戸女子薬科大学では1975年から「卒後教育(Continuing Education in Pharmacy; CEP)」を開講してきた。この講座は全国屈指の伝統と実績、規模を誇り、最新の医学・薬学情報を総合的かつ体系的に修得できるように編成した、学術的色彩の濃いユニークな内容となっている。毎回メインテーマを設定し、総論・各論として6コマ（1コマ90分）を構成し、これに薬剤師職能に関係する、最近のトピックス（3コマ）が加えられている（全9コマ）。講師陣は全国的視野に立って選定され、斯界の第一線で活躍されている研究者や臨床家に依頼しているが、受講者からは好評を得、毎回高い評価を得ている。

公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構から認証された2007年度の第33回と2008年度の第34回は、これまでと同様に卒後教育講座として開講した。そして、2009年度から名称を卒後研修講座に変更した。以下に当時のエクステンションセンター事業委員長 松田芳久特別教授がその経緯を記載した大学広報誌「ききょう通信」148号（2009年）への寄稿から引用する。

『主催者側の目線から見てきたこれまでの講座名中の「卒後教育」を、時代の趨勢に柔軟に対応するため、「卒後研修」とし、「卒後研修講座」と改称することとしました。この名称に関しては既に国際薬学連合(FIP)によって Continuing Professional

Development (CPD) という用語が使用されており、「個々の薬剤師が、専門職としての能力・適性を常に確保するために、生涯を通じて知識、技術、心構えを、計画的に維持、発展、拡充するという責任行為」と定義されています。すなわち、卒後研修はあくまでも薬剤師が主体的に行うものであるという理念が責任行為の背景にあり、本学などのプロバイダーは、事業を通してこれらの行為を積極的に支援するというスタンスを持ち続けることが極めて重要であると考えられます。』

卒後研修講座 3 日間のプログラムは、まずメインテーマをエクステンションセンター生涯研修企画・運営委員会前で前年度に検討し、そのメインテーマにふさわしい 6

名の講師案を作成する。同時に、最近の医療動向や薬剤師職能などに関連したトピックスについての講義を担当する 3 名の講師案を作成し、個別に講師候補者に出講可能であるかを委員が分担して打診する。出講可能である場合には、講師は講義内容のファイルをエクステンションセンターまで送付する。そして、エクステンションセンターは送付されたファイルに基づき卒後研修講座のテキストを作成し、卒後研修講座講義初日に受講者に配布する。

表 4-1 に認証を受けてからの卒後研修講座（卒後教育講座）のメインテーマと受講者数（3 日間）の推移を示す。

表 4-1 卒後研修講座（卒後教育講座）のメインテーマと受講者数（3 日間）

事業名	年度	回	メインテーマ	受講者数
卒後教育講座	2007	33	性差医学 - からだと薬に関する男女の違い -	2,045
	2008	34	神経変性疾患治療の最前線 - パーキンソン病とアルツハイマー病を中心として -	2,420
卒後研修講座	2009	35	呼吸器疾患の治療最前線	2,235
	2010	36	糖尿病診療の最近の話題	2,626
	2011	37	循環器疾患の最新治療	2,452
	2012	38	感覚器疾患（眼科・耳鼻科・皮膚科）と口腔歯科の治療最前線	2,185
	2013	39	がん治療最前線	2,115
	2014	40	感染症をどう抑えこむか - 予防と治療 -	1,934
	2015	41	代謝・免疫疾患の基礎と臨床	1,786
	2016	42	これからの薬剤師が目指すもの	1,384
	2017	43	疾患を学ぼう薬剤師に必要な 8 疾患 その一 循環器疾患（高血圧、心疾患、脳血管障害）	1,659

同窓会関東支部からかねてより母校の卒後教育講座を関東でも開催してほしいとの希望が寄せられていたので、2007 年の認証を契機に、卒後教育関東地区講座を試験的に急遽企画し、ウィメンズ・ホール（渋谷）で開催することにした。3 日間のプログラム全てを関東でも再度実施するのは不可能であったので、これらの中から関東支部の役員によって選択された 3 演題を 1 日のプログラムとしてまとめることにした。このうち 1 演題は本学で講演していただいた講師に東京でも再度出講していただき、残りの 2 演題は本学で収録した講演

の DVD 映写による研修形態とした（第 2 回以降は 2 講師、1DVD）。初回の受講者は 146 名（このうち他大学出身者 21 名）で、DVD による研修も概ね好評であったが、その後、同窓会各支部との公平性の確保や採算性等、種々の事情により、やむを得ず第 8 回（2014 年度）をもって中止・閉講とした。

2) リカレントセミナー

「卒後研修講座」のアドバンスコースとして 1998 年から始めたセミナーで、より深く学びたいという声に応

え、現場の実務に即した専門領域別・職域別に、比較的少人数の受講者を対象としたセミナー形式の研修会を実施している。第1回のテーマは病院薬剤師を対象とした「服薬指導—基礎編」として実施した。各専門分野に特化したテーマを設定し、医師と薬剤師が病態の基礎や薬物治療について講義を行い、症例を交えたSGD（スモールグループディスカッション）を実施し

ている。受講者からの要望の高い今日的なテーマを設定し、バイタルサイン、フィジカルアセスメントや、コーチングスキルを用いたコミュニケーション、健康サポートについての研修会も企画している。

最近のリカレントセミナーと受講者数の推移を表4-2に示す。

表 4-2 リカレントセミナーと受講者数の推移

年度	回 (内容)	受講者数
2007	21 (服薬指導)	31
2008	22 (薬物治療)、23 (服薬指導)、24(健康食品)	1,124
2009	25 (服薬指導)、26 (薬物治療)、27(服薬指導)、28 (服薬指導)、 29 (薬物治療)、30 (バイタルサイン)、31 (健康食品)、32 (健康食品)	800
2010	33 (服薬指導)、34 (フィジカルアセスメント)、35 (薬物治療)、36 (服薬指導)、 37 (薬物治療)、38 (フィジカルアセスメント)	578
2011	39 (服薬指導)、40 (フィジカルアセスメント)、41 (薬物治療)、42 (服薬指導)、 43 (医薬品情報)、44 (フィジカルアセスメント)	725
2012	45 (服薬指導)、46 (バイタルサイン)、47 (薬物治療)、48 (服薬指導)、49 (医薬品情報)、 50 (フィジカルアセスメント)	558
2013	51 (服薬指導)、52 (バイタルサイン)、53 (在宅医療)、54 (在宅医療)、55 (薬物治療)、 56 (医薬品情報)、57 (服薬指導)、58 (フィジカルアセスメント)、59 (在宅医療)	463
2014	60 (服薬指導)、61 (バイタルサイン)、62 (薬物治療)、63 (医薬品情報)、64 (服薬指導)、 65 (フィジカルアセスメント)	356
2015	66 (薬物治療)、67 (フィジカルアセスメント)、68 (薬物治療)、69 (薬物治療)、 70 (コーチング)、71 (フィジカルアセスメント)	518
2016	72 (健康づくり)、73 (フィジカルアセスメント)、74 (健康づくり)、75 (健康づくり)、 76 (健康づくり)、77 (フィジカルアセスメント)	606
2017	78 (医薬品情報)、79 (フィジカルアセスメント)、80 (服薬指導)、81 (薬物治療)、 82 (服薬指導)、83 (フィジカルアセスメント)	363

3) 薬剤師実践塾

「超高齢社会」を迎えた今日において、医療の高度化、急速な高齢化の進展に伴う医療環境の大きな変動により、医療提供機関だけでなく、患者居宅における医療職種間が連携した医療提供が必要とされている。すなわち、薬剤師も他職種と協働し、質が高く、安心・安全な医療を提供することが求められている。高齢化が進み、居宅での療養介護が増える中で、他職種の技術を学ぶとともに、薬剤師としての専門性

を活かした技術を発揮できるよう、多くの事例（症例）を交えてどのように判断し、多職種の中で薬剤師が主体的に活動するために何ができるかを考える実践的な研修を2004年より実施している。

第1回では現場を離れて久しい離職薬剤師で再就職を希望する未就業薬剤師あるいは新卒の薬剤師を対象として、初任者のための少人数の実践的研修会を模擬患者に協力していただいて実施した。また2008年からは中堅薬剤師のための研修として、薬学生実

務実習の指導者研修となるようなワークショップ形式のリーダー研修も実施した。このリーダー研修の目的は、日常の業務を支障なく遂行しながら実施できる実習カリキュラムの策定と指導法の確立を目指したものであった。そして、その成果として『ワークシートで教える薬

局実務実習指導ガイド』(じほう)を2010年に出版し、改訂第2版を2013年に出版した(資料編参照)。

最近の薬剤師実践塾と受講者数の推移を表4-3に示す。

表 4-3 薬剤師実践塾と受講者数の推移

年度	回 (内容)	受講者数
2007	6 (スキルアップ)、7 (指導者)	17
2008	8 (実務実習)、9 (スキルアップ)、10(実務実習)	81
2009	11 (実務実習)、12 (スキルアップ)、13(実務実習)	111
2010	14 (実務実習)、15 (スキルアップ)、16 (実務実習)	23
2011	17 (実務実習)、18 (実務実習)	39
2012	19 (スキルアップ)、20 (在宅医療)、21 (在宅医療)	73
2013	22,24 <受講申込少なく開講せず>、23 (在宅医療)、25 (在宅医療)	40
2014	26 - 29 (在宅医療)	103
2015	30 - 33 (在宅医療)	74
2016	34 - 37 (在宅医療)	127
2017	38 (在宅医療)、39 (スキルアップ) 40、41 (症例検討)、42 (スキルアップ)、43 (症例検討)、44、45 (在宅医療)	121

4) シンポジウム

病院の病棟や薬局、在宅医療の現場で薬剤師の新

たな業務展開は必須のこととなっている。多くの薬剤師業務の中で今直面している問題点にスポットをあて、

表 4-4 シンポジウムのテーマと受講者数

年度	回	テーマ	受講者数
2008	1	ジェネリック医薬品の普及促進をめぐる薬剤師の役割	151
2009	2	薬剤師はバイタルサインを薬物治療にどのように活かすか	497
2010	3	プライマリ・ケアにおける薬剤師の役割	221
2011	4	臨床思考能力を持った薬剤師の育成に向けて	130
2012	5	在宅医療における薬剤師の役割 -超高齢化社会を迎えるにあたって-	172
2013	6	緩和ケアにおける今後の薬剤師のかかわり	229
2014	7	がんのチーム医療	195
2015	8	呼吸器疾患における吸入指導について：地域における呼吸器ネットワーク	108
2016	9	在宅における摂食嚥下障害と多職種連携	164
2017	10	健康サポート薬局について -あれから1年 皆さんの取組は?-	146

最新的话题をテーマに、他職種を含む先駆的・指導的立場で活躍されている複数の専門家を招いてさまざまな角度から意見交換を行い、相互理解を深めるとともに、今後の薬剤師業務の方向性やあるべき姿について多角的に議論している。

表 4-4 にシンポジウムのテーマと受講者数の推移を示す。

4.2 過去 10 年間の研修支援事業の概要と各年度の事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価

以下に各年度の研修支援事業の概要を記す。

2007 (平成 19) 年度

これまでの卒業教育を担っていた本学の「医療薬学総合研修センター」は、発展的改組となり、新たな生涯研修支援事業を担う部署としてのエクステンションセンターは、本学 1 号館 2 階に設置することとなった。改装工事完了に伴い 9 月 1 日に専任教育職員として長嶺幸子講師、専任事務職員として岡田 功主査が着任した。また、これに加えて、規程に従って学長がエクステンションセンター長を兼任することとなった。

委員会としては、エクステンション事業委員会、生涯教育企画委員会、生涯研修認定制度評価委員会が設置され、2007 年度においてエクステンション事業委員会は 8 回開催した。エクステンション生涯教育企画委員会は、小委員会制として、事業毎に 4 つの分野（卒業教育講座、リカレントセミナー、薬剤師実践塾、公開市民講座）を 4 小委員会で分担した。これまでの小委員会の開催回数は 4 回であった。

卒業教育講座：9 月 2 日（日）、9 月 8 日（土）及び 9 月 9 日（日）の 3 日間にわたって第 33 回を「性差医学—からだと薬に関する男女の違い—」をテーマに開催した。今回の講座の企画は認証前の所管委員会であった教授会下部組織の生涯教育委員会（認証に伴って解散）によるものであったが、延べ 2,045 名の受講者があった。過去に 3 回以上受講した者の合計は 68.5%に達しており、本講座の評価が定着していることが窺えた。受講者の有職率は 80%であった。卒業教育関東地区講座は、かねてより同窓会関東支部から母校の卒業教育講座を関東でも開催してほしいとの要望が寄せられていたので、認証を契機に、試験的に

標記講座を 1 日開催することにした。146 名（内、他大学出身者は 21 名）の参加者があった。

リカレントセミナー：7 月 8 日（日）に第 21 回リカレントセミナーを開催した。今回は薬歴管理を取り上げ、POS の考えに基づく「薬歴の基本的な書き方」と具体的な「症例に基づく演習」を SGD で行う演習形式のセミナーを企画し、大学院生 8 名と薬局勤務の薬剤師 23 名が受講した。

薬剤師実践塾：初任者研修として、実践的かつ少人数の参加型セミナーを目指して企画された薬剤師実践塾を、7 月 21 日、22 日、10 月 31 日の 3 日間にわたり実施した。初任者薬剤師 5 名、未就業の薬剤師 6 名の計 11 名が受講した。指導者研修として 2 月 9 日に開催された第 7 回薬剤師実践塾は、指導者研修の一環として「薬学生実務実習教育のカリキュラム作成と指導法の検討」について、ワークショップ形式でのセミナーを開催した。受講者は薬局での薬剤師を指導する立場にいる薬剤師 6 名が参加し、6 年制の学生の実務実習に向けてグループワークが行われた。

同窓会の 16 支部との共催研修事業：同窓会の 16 支部が各地で支部研修会を開催した。センター発足後の 9 カ月間の合計開催件数は 31 件であり、延べ受講者数は 2,154 名に及んだ。

2007 年度の認定薬剤師証の交付件数は 39 件（内、新規 35 件、更新 4 件）であった。

〈2007 年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

センターの立ち上げに大変ご苦労があったと思いますが、順調に運営がなされていると思います。今後は、生涯教育委員会からの事業の継承にとどまらず、神戸薬科大学エクステンションセンター独自のユニークな企画が出てくるものと期待いたします。リカレントセミナーや薬剤師実践塾を現状の参加人数で是とするのか、もっと人数を増やすか、方針を立ててやる方がよろしいでしょう。

2008 (平成 20) 年度

エクステンション事業委員会は 9 回開催した。生涯教育企画委員会は 4 つの委員会が事業分野を分担し、第 1 小委員会（卒業教育講座担当、委員 7 名）、第 2 小委員会（リカレントセミナー担当、委員 5 名）、第 3 小委員会（薬剤師実践塾担当、委員 5 名）、第 4

小委員会（公開市民講座担当、委員5名）であり、開催回数は総計4回であった。

卒後教育講座：2008年8月31日（日）、9月6日（土）及び9月7日（日）の3日間にわたって、第34回卒後教育講座を開催した。センターの生涯教育企画第1小委員会が初めて担当した。今回は「神経変性疾患治療の最前線ーパーキンソン病とアルツハイマー病を中心としてー」というメインテーマのもとに、これに関連した講義6コマとトピックス3コマで編成したところ、これまでの実績を大幅に上回る過去最大の受講者数（受講申込者数906名、3日間で延べ2,420名）を記録した。ミニ卒後教育講座の形態で1日開催した卒後教育関東地区講座は、受講者の居住地は広く関東一円に及び、遠くは静岡からの参加者もあり、受講者数は174名（前年度は146名）に増加した。

リカレントセミナー：3企画を開催した。新企画による「各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ」は、7月6日（日）に第22回リカレントセミナーとして開催した（参加者33名）。第1回目として大腸がんを取り上げた。午前中にあらかじめ2コマの講義（医師、薬剤師）を行って基礎知識を修得した後、これに基づいて午後から本学教員を含む指導薬剤師（タスク）によるアドバイスを受けながらグループ毎にグループワークを展開し、最後にこれらの成果を一同で発表するという形式とした。また、「服薬指導シリーズ（応用編）ー高齢者ケアにおける薬の管理と服薬指導ー」は、11月16日（日）に第23回リカレントセミナーとして開催したが、最近の在宅医療への薬剤師の関心の高まりと積極的参加意欲を反映して、73名が受講した。新企画の「健康食品シリーズ」は2月8日（日）、15日（日）、22日（日）、3月1日（日）、3月8日（日）、15日（日）の6日間（6日のうち、後2日は欠席者のためのDVDによる研修）にわたって開催した。「健康食品」への積極的関与が薬剤師に期待されている最近の社会的要請を背景として、健康食品の根幹である「効果」に対する薬剤師としての判断や、薬物治療中の患者に対する相互作用などの面で、薬剤師の立場としての指導性を高めることを、本シリーズ開講の目的とした。延べ18名の講師により、主として健康食品に関する基礎的事項が講義され、延べ1,124名が受講した。なお本シリーズでは、全回受講し所定の要件を充足した者には、「神戸薬科大学健康食品指導薬剤師」の認定試験の受験資格が得られることとした。

シンポジウム：「ジェネリック医薬品の普及促進をめ

ぐる薬剤師の役割」をテーマに、11月8日（土）に初めて開催した。最近の医療行政の流れを見据えた、タイムリーな企画であったため、幅広い分野の関係者（151名）が受講した。

薬剤師実践塾：「初任者研修」として7月12日（土）及び13日（日）の両日に、初任者及び復職を希望する薬剤師を対象とした第9回実践塾を本学医療薬学研修施設において開催した。最近の薬剤師業務の重要性に対する認識の高まりに加えて、広報活動の着実な浸透が影響したためか、17名の受講者が受講した。これらの成果を踏まえたフォローアップセミナーを11月1日（日）に開催した。「指導者研修」として2月1日（日）に、長期実務実習指導者としての中堅薬剤師を対象としたアドバンスコースと位置づけられる研修を開講した。今回の目的は、6年制薬学教育における実務実習カリキュラム作成と指導法の検討であり、モデルカリキュラムにおける教育目標に基づいて、学生にいかにか効率的に指導するかということを追究するものである。詳細なテキストに基づいた研修内容の説明の後、グループ毎の実習項目に係わるワークシートの作成を行い、これらの結果を最後に発表するという形式で行った。受講者は41名であった。

同窓会の16支部との共催研修事業：各地で支部研修会が開催された。2008年度開催件数は合計56件（延べ受講者数：4,520名）であった。

2008年度に本センターで交付した認定薬剤師証は82件（新規74件、更新8件）であった。なお、認証取得後の交付累計は121件（新規109件、更新12件）となった。

〈2008年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

薬剤師のニーズに合わせた良い企画が並んでいるので、今後もこのレベルを維持していただきたい。本事業は、質・量・歴史ともに全国でトップクラスであるので、今後もこのレベルを維持していただきたい。30代の子育て世代、20代の卒直後世代をどう取り込むかが今後の課題となるだろう。

2009（平成21）年度

エクステンション事業委員会は、9回開催した。第1回委員会において「卒後教育講座（CEP）」の名称について審議を行い、「卒後研修講座（CPD）」と

改称することとした。既に2002年から国際薬学連合(FIP)によってCPD(Continuing Professional Development)という用語が使用されている。CPDとは、薬剤師などの専門職は、専門職としての能力・適性を常に確保するためには、生涯を通して知識、技能、心構えを計画的に維持、発展、拡充する責任があるという取り組みである。薬剤師がCPDに主体的に取り組むため、認証を受けたプロバイダーとして、その研修支援事業を積極的に行う必要があり、2009年度から「卒後研修講座(CPD)」と改称した。生涯教育企画委員会の4小委員会の開催回数は総計3回であった。

卒後研修講座：9月5日(土)、6日(日)及び13日(日)の3日間にわたって、「呼吸器疾患の治療最前線」をテーマに開催したところ、受講申込者数は788名、延べ2,235名が受講した。卒後研修関東地区講座は、11月29日(日)に開催し、受講者数は133名であった。

リカレントセミナー：「各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ」では6月21日(日)に糖尿病を、11月15日(日)に気管支喘息をテーマとして取り上げたところ、それぞれ45名、28名が受講した。「服薬指導シリーズ」では4月12日(日)に眼科領域を、8月9日(日)にOTC薬を、11月1日(日)に小児科領域を取り上げたところ、それぞれ105名、35名、159名の受講者であった。「バイタルサインチェックに関する講義と実践」は7月26日(日)に開催されたシンポジウムでの成果を基盤として、“実践編”ともいうべきセミナーを12月6日(日)に開催した。本学臨床薬学研究室の江本憲昭教授を講師に、フィジカルアセスメントモデルを用いた研修を44名の受講者を対象に実施した。「健康食品シリーズ」を2月27日(土)、28日(日)、3月6日(土)、7日(日)、21日(日)、22日(月・祝)の6日間(6日のうち、後2日は欠席者のためのDVDによる研修)にわたって開催した。79名(延べ260名)が受講した。また、資格取得者へのフォローアップ研修を目的とした講座を2月27日(土)に開催したところ、124名が受講した。

シンポジウム：医療現場におけるスキルミックス構築の一環として薬剤師によるフィジカルアセスメントの重要性に対する認識が次第に高まりつつあるなかで、7月26日(日)にバイタルサインをキーワードとしたシンポジウム「薬剤師はバイタルサインを薬物治療にどのように活かすか」を全国で初めて開催したところ、497名

の受講者を得た。

薬剤師実践塾：「初任者研修」は7月11日(土)及び12日(日)に、初任者及び復職を希望する薬剤師を対象とした第12回薬剤師実践塾として本学医療薬学研修施設(旧：医療薬学総合研修センター)において開催した。23名が受講した。講義に加え、現職の薬剤師がインストラクター(実務指導薬剤師)としてグループ(5~6名)ごとに指導し、実習・ディスカッション・発表を行うという、きめ細かいプログラムとなっている。なお、9月27日(日)にはこれらの成果を踏まえたフォローアップセミナーとして、SP(模擬患者)参加型の実践的薬学指導を行った。「中堅者研修」は、6月7日(日)、1月31日(日)に、長期実務実習指導者としての中堅薬剤師を対象としたアドバンストコースと位置づけられる研修を開講した。6年制薬学教育における実務実習カリキュラム作成と指導法の検討であり、モデルカリキュラムにおける教育目標に基づいて、学生にいかにか効率的に指導するかということを追及した。詳細なテキストに基づいた研修内容の説明の後、グループ毎の実習項目に係わるワークシートの作成を行い、これらの結果を最後に発表するという形式で行った。この実践と成果を「調剤と情報」に13回にわたって連載した(資料編参照)。

同窓会の17支部との共催研修事業：各地で支部研修会が開催された。平成21年度開催件数は合計56件(延べ受講者数：4,519名)であった。

2009年度における本センターで交付した認定薬剤師証は79件(新規62件、更新17件)であった。また、認証取得後の交付累計は200件(新規171件、更新29件)となった。健康食品指導薬剤師認定証の交付件数は新規167件であった。

〈2009年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

センターとしての活動は順調に発展している。全国的に見てもこれだけの内容とクオリティと参加者数およびその満足度を誇る生涯教育のプロバイダーは数少ない。活動性から見て、センター専任教員の負担は大きいと思われるので、今後のセンターの体制を検討する必要がある。人的充実をはかれば、さらに活動の発展も見込められると考えられる。

2010(平成22)年度

エクステンションセンターの専任事務職員の人事異動があり、2010年8月1日付で岡田 功主査（現・事務局次長兼企画広報課課長）は学生就職課に異動し、杉浦佳子主査（現・課長補佐）が教務課から着任した。エクステンション事業委員会は、23回開催した。生涯教育企画委員会の4小委員会を再編成し、3小委員会とした。第1小委員会（リカレントセミナー担当、委員5名）、第2小委員会（卒後研修講座、薬剤師実践塾、公開市民講座担当、委員7名）、第3小委員会（健康食品講座、シンポジウム担当、委員4名）であり、開催回数は総計5回であった。

卒後研修講座：前年度まで9月上旬に実施してきたが6月5日（土）、6日（日）及び13日（日）に変更し、3日間にわたって開催した。第36回卒後研修講座のメインテーマは「糖尿病診療の最近の話題」で、受講申込み者数は924名、延べ2,626名が受講した。卒後研修関東地区講座は9月5日（日）に開催し、受講者数は118名であった。

リカレントセミナー：「各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ」は、6月27日（日）に睡眠障害を、10月31日（日）に高血圧症をテーマとして取り上げたところ、それぞれ36名、37名が受講した。「服薬指導シリーズ」では4月11日（日）に皮膚科領域を、10月17日（日）に関節リウマチを取り上げたところ、それぞれ265名、157名の受講者であった。「フィジカルアセスメントに関する講義と実践」は5月16日（日）と11月28日（日）の2回開催し、それぞれ45名、38名の受講者であった。

健康食品講座：2009年度まではリカレントセミナーの「健康食品シリーズ」として実施してきたが、2010年度からは健康食品講座として独立した研修会を実施した。健康食品指導薬剤師の資格取得者へのフォローアップ研修としては8月22日（日）、11月7日（日）に研修会を実施し、それぞれ270名、196名の参加者があった。健康食品指導薬剤師資格取得を目的とした基礎講座を2月26日（土）、27日（日）、3月5日（土）、6日（日）、20日（日）、21日（月・祝）の6日間（6日のうち、後2日は欠席者のためのDVDによる研修）にわたって開催したところ、67名が受講した。

シンポジウム：患者中心の地域医療とケアにおいて多岐にわたる医療職の連携と協働が必須である。その中で薬剤師がどのような役割と能力が必要であるかを中心に据え、「プライマリ・ケアにおける薬剤師の役割」

をテーマに7月25日（日）にシンポジウムを開催した。221名が受講した。

薬剤師実践塾：「新任者研修」は7月10日（土）及び11日（日）の2日間に、第15回薬剤師実践塾として本学医療薬学研修施設において開催した。今回の受講者は、3名と学部学生の2名という少ない受講者であった。「中堅者研修」は6月20日（日）、2月6日（日）に、薬学生実務実習のカリキュラム作成と指導方法の検討としての中堅薬剤師を対象とした研修会を開講した。2月6日（日）の研修会では、2010年7月に出版した『ワークシートで教える薬局実務実習指導ガイド』（薬剤師実践塾 編著、じほう社）（資料編参照）をテキストとして使用し、詳しい説明の後、あらかじめアンケートで出されていた、指導しにくい実習内容についての検討を行った。また、症例も提示して実践を行った。それぞれ6名、12名の受講者であった。

同窓会の17支部との共催研修事業：各地で支部研修会が開催された。開催件数は合計58件（延べ受講者数：4,062名）であった。

2010年度に本センターで交付した認定薬剤師証は140件（新規66件、更新74件）であった。なお、認証取得後の交付累計は340件（新規237件、更新103件）となった。健康食品指導薬剤師認定証の交付は新規41件であった。健康食品指導薬剤師認定証の交付累計は208件（新規のみ）となった。

〈2010年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

健全に運営がなされ、順調に発展されていると思います。今後益々発展していくことが期待されますが、そのためには、エクステンションセンターに対するさらなるサポートが必要と考えられます。

今年度の予算の中にも組み込まれていますが、e-ラーニング等の活用を積極的に進め、研修の機会・幅を広げていくことで、さらなる充実が期待されます。

〈第1回目の認証更新〉

公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構 平成22年度第2回書面理事会において、認証更新が以下の理事会記録の記載のように承認された。

平成22年度第2回書面理事会記録（抜粋）

審議概要・結果

(1) 提案者：代表理事 内山 充

(2) 理事会の決議年月日：

平成 22 年 8 月 25 日 (水)

(3) 理事会の決議があった事項の内容：

平成 22 年 6 月 14 日付「G07 神戸薬科大学」より認証更新申請書が提出され、その申請内容について当機構の認定制度委員会において評価を行った。

今般、その評価作業が終了し、認証担当理事より、平成 22 年 8 月 17 日付認証更新「適」の「評価結果総括書」が提出された。

この「評価結果総括書」を平成 22 年 8 月 18 日役員全員に送付し、内容確認の上、承認の可否について意見を求めたところ、当該申請を承認することについて、役員全員から同意する旨の書面をいただき、本提案は可決され認証更新が認められた。

2011 (平成 23) 年度

エクステンション事業委員会は 33 回開催した。生涯教育企画委員会の 3 小委員会の開催回数は総計 6 回であった。

卒後研修講座：5 月 29 日 (日)、6 月 4 日 (土) 及び 5 日 (日) の 3 日間にわたって、「循環器疾患の最新治療」をテーマとして開催した。初日は季節外れの台風に見舞われたにもかかわらず多くの受講者があり、休憩時間を短縮し終了時間を繰り上げて対応した。最終的に 856 名の受講申込みがあり、延べ 2,452 名が受講した。卒後研修関東地区講座は、3 月 11 日に起きた東日本大震災に伴い止むを得ず中止した。

リカレントセミナー：「各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ」は 6 月 19 日 (日) に排尿障害をテーマとして取り上げたところ、36 名の受講者であった。「医薬品情報の活用の仕方」は、「病態と安全性を考慮した妊婦への薬物治療を考える」をテーマとして取り上げた。227 名が受講した。「服薬指導シリーズ」では 4 月 10 日 (日) に「感染症と抗菌薬 PK/PD」を、10 月 16 日 (日) に「インフルエンザと新しいワクチン」を取り上げたところ、それぞれ 267 名、110 名が受講した。「フィジカルアセスメントに関する講義と実践」はフィジカルアセスメントモデルを用いた内容で企画し、5 月 15 日 (日) と 11 月 27 日 (日) の 2 回にわたり開催した。本学臨床薬学研究室の江本憲昭教授を講師に、種々の基本的事項について手技を含めて理解を深

めた。それぞれ 45 名、40 名の受講者であった。

健康食品講座：健康食品指導薬剤師の資格取得者へのフォローアップ研修として、8 月 21 日 (日)、11 月 13 日 (日) に研修会を実施し、それぞれ 143 名、145 名が受講した。2 月 25 日 (土)、26 日 (日)、3 月 3 日 (土)、4 日 (日)、の 4 日間のうち、4 日目はフォローアップ講座を兼ねた研修会としたところ、94 名が受講した。基礎講座については、28 名の受講者であった。また 3 月 18 日 (日)、20 日 (火・祝) に予定していた欠席者のための DVD 研修については、今回ケースとして e-ラーニングによる研修を行った。

シンポジウム：「臨床思考能力を持った薬剤師の育成に向けて」をテーマに 7 月 24 日 (日) に開催した。患者中心の医療とケアにおいて多様な医療職の連携と協働が必須であり、その中での薬剤師の係わりは重要で、臨床対応能力を持った薬剤師が求められ、期待されている。130 名の受講者であった。

薬剤師実践塾：「スキルアップ研修」として、現場を離れて久しい未就業者薬剤師や、新卒の初任者薬剤師を対象に 2004 年度から実施してきた研修を終了し、2012 年に誕生する 6 年制卒の薬剤師を受け入れるにあたり、4 年制卒の現役薬剤師のスキルアップに重点を置いた研修を企画した。21 名が受講した。「中堅者研修」として 1 月 22 日 (日) に実施した第 18 回薬剤師実践塾では「地域医療」を取り上げ、長期実務実習でどのように学生を指導していくかについて検討を行った。18 名の受講者は在宅訪問に対する心構えや、実際に訪問指導を行った事例をもとに、活発な質問と積極的な意見交換を行った。

同窓会の 17 支部との共催研修事業：各地で支部研修会が開催された。2011 年度開催合計件数は 53 件 (延べ受講者数：3,336 名) であった。

2011 年度に本センターで交付した認定薬剤師証は 140 件 (新規 45 件、更新 95 件) であった、なお、認証取得後の交付累計は 480 件 (新規 282 件、更新 198 件) となった。健康食品指導薬剤師認定証の交付件数は新規 34 件であった。健康食品指導薬剤師認定証の交付累計は 242 件 (新規のみ) となった。

〈2011 年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

事業数、事業規模とも、適正に企画、運用されている。資金的にも問題ないようなので、講師陣の充実も含め、

あまりメーカー等に頼らない（地方等での）研修ができる様にしていくといいと思われる。

今後、グループ討論や体験型演習等が多くなることが予想される。さらなる充実を図るためには、質の高い講師および専門的知識をもったファシリテーター確保が重要と思われる。そのためには、事業によっては講師の謝礼や採用するファシリテーターの増員などを再検討してもよいのではないかと考えられる（全ての事業について均一化する必要はないと考えられる）。

2012（平成24）年度

エクステンション事業委員会は32回開催した。生涯教育企画委員会の第1小委員会はリカレントセミナー、薬剤師実践塾担当（委員4名）、第2小委員会は卒業後研修講座、シンポジウム、公開市民講座担当（委員5名）、第3小委員会は健康食品講座担当（委員5名）で小委員会の開催回数は計5回であった。

卒業後研修講座：5月27日（日）、6月2日（土）及び3日（日）の3日間にわたって、「感覚器疾患（眼科・耳鼻科・皮膚科）と口腔歯科の治療最前線」をメインテーマとして開催した。776名の受講申込みがあり、延べ2,185名が受講した。卒業後研修関東地区講座は9月2日（日）に開催し、受講者は94名であった。

リカレントセミナー：「各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ」は6月24日（日）に最新の糖尿病治療をテーマとして取り上げ開催し、定員を上回る58名の受講者となった。「医薬品情報の活用の仕方」は10月21日（日）に演習室を利用して開催し、コンピュータを用いた医薬品情報検索と症例検討を行い、45名の受講者であった。「服薬指導シリーズ」では4月8日（日）に「病態別の栄養管理の実践」を、10月14日（日）は「認知症の診断」を取り上げた。それぞれ226名、114名が受講した。「フィジカルアセスメントに関する講義と実践」は初級者対象と中級者対象に分けて実施した。5月13日（日）は初級者研修会として、聴診器の使い方・血圧・脈拍の測定についての基本的事項について、手技を含め受講者同士で実践を行った。また11月25日（日）の中級者研修会では、学生にアルバイトとして協力を求め、実際の呼吸音や腸音を学習した。また、実際の症例に基づき、考えられる副作用等についてグループワークを実施した。計2回の研修会は本学臨床薬学研究室の江本憲昭教授が講師となり、71名、44名と定員を超える受講者となった。

健康食品講座：健康食品指導薬剤師の資格取得者へのフォローアップ研修を8月19日（日）、健康食品指導薬剤師認定取得のための健康食品基礎講座を2月23日（土）、24日（日）、3月2日（土）、3日（日）の4日間（フォローアップも兼ねる）実施した。それぞれ154名、121名の受講者であった。

シンポジウム：「在宅医療における薬剤師の役割ー超高齢化社会を迎えるにあたってー」をテーマに7月22日（日）に第5回を開催した。172名が受講した。

薬剤師実践塾：「スキルアップ研修」として7月14日（土）、15日（日）の2日間に、第19回を本学医療薬学研修施設において開催した。基本的な薬剤師倫理から、調剤、薬歴管理、服薬指導に加え、薬剤師のメンタルヘルスに関する研修も企画した。今回の受講者は17名であった。「指導者研修」では「在宅医療」をテーマに、9月30日（日）と1月27日（日）に研修会を企画した。9月30日（日）に実施した第20回では、基礎知識として実践的な研修を行った。また、1月27日（日）は認知症患者への応対法や口腔内ケア、シミュレータを用いた呼吸音の確認など、多岐にわたる内容で、充実した研修会となった。受講者はそれぞれ24名、32名であった。

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラムが2012年度より新たにスタートした。医療の高度化、急速な高齢化の進展に伴う医療環境の大きな変動により、患者居宅における医療職が連携した医療提供の重要性が高まっている。薬剤師もチームの一員として他職種と協働し、専門性を活かした質の高い安心・安全な医療を提供することが求められている。そこで少人数の薬剤師を対象に、専門的知識や技術を鍛え、薬物治療のリスクマネージャーとしての実践力を養成する「生涯研修スキルアッププログラム」と在宅医療を支援している地域医療機関や関連薬局と連携して実施する、「実践的な臨床能力育成プログラム」をスタートさせた。地域医療機関で在宅実務実習・臨床研究に取り組む、学部教育プログラムに指導者として参画する指導力養成プログラムを9月から企画し、応募者5名で開始した。具体的には以下の企画を実施した。

- ・在宅医療における薬剤師の役割ー薬剤師だからできる支援事例を交えてー
- ・在宅薬剤師のメンタルヘルス
- ・輸液調製の基礎と実践

これらのプログラムを実施するにあたり、臨床能力育成を図るために神戸市垂水区医師会と連携協定を締結

した。また、本プログラムの受講者の中に、大学と連携し在宅医療を推進しているミヤケ薬局の薬剤師も含まれている。

同窓会 17 支部との共催研修事業：各地で支部研修会が開催された。2012 年度開催件数は合計 56 件（延べ受講者数：3,895 名）であった。

2012 年度に本センターが交付した認定薬剤師証は 112 件（新規 26 件、更新 86 件）であった。これまでの認証取得後の交付累計は 592 件（新規 308 件、更新 284 件）となった。健康食品指導薬剤師認定証の交付件数は新規 7 件、更新 79 件であった。健康食品指導薬剤師認定証の交付累計は 294 件（内、新規 215 件、更新 79 件）となった。

〈2012 年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

エクステンションセンター発足より数年が経過しているが、これまで運営はうまくいっており、破綻はないように思われます。多岐にわたる事業を、限られた人員で的確に運営していると思います。

健康食品講座ではフォローアップを兼ねた講座にしたり、既存の講座も時期を考え、また内容をバージョンアップさせる等、細かく配慮がなされています。

全国的に多くの生涯研修プロバイダーが存在する中で、本エクステンションセンターは、その内容・規模とも有数であります。プログラムを組むのは大変な労力を要すると理解していますし、テーマの設定にはご苦労が多いと思いますが、今後も充実したプログラムが組まれていくこと、また広報に力を入れて、多くの薬剤師の資質向上に貢献されることを期待しています。

2013（平成 25）年度

エクステンション事業委員会は 29 回開催した。生涯教育企画委員会の第 1 小委員会はリカレントセミナー、薬剤師実践塾担当（委員 4 名）、第 2 小委員会は卒後研修講座、シンポジウム、公開市民講座担当（委員 5 名）、第 3 小委員会は健康食品講座担当（委員 5 名）で、小委員会の開催回数は計 3 回であった。2012 年度から進めている「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラムについては、2012 年度の受講者の報告会を実施した。また 2013 年度も受講者 5 名を迎え、多職種の中で薬剤師として専門的知識や技術を鍛え、チームの一員として協働し、また学部学生

の指導者として参画する指導力を養成できるプログラムを引き続き実施した。

卒後研修講座：5 月 25 日（土）、26 日（日）及び 6 月 2 日（日）の 3 日間にわたって、「がん治療最前線」をテーマに開催した。774 名の受講申込みがあり、延べ 2,115 名が受講した。卒後研修関東地区講座は 9 月 1 日（日）に開催し、受講者は 83 名であった。

リカレントセミナー：「各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ」は 6 月 16 日（日）に「COPD（慢性閉塞性肺疾患）」をテーマに実施し、受講者数は 32 名であった。「医薬品情報の活用の仕方」は 10 月 13 日（日）に「症例に基づいた情報検索」を実施した。受講者数は 23 名であった。「服薬指導シリーズ」は 4 月 7 日（日）に「褥瘡」を、10 月 27 日（日）には「OTC について学ぼう」をテーマに実施した。それぞれ 196 名、88 名が受講した。「フィジカルアセスメントに関する講義と実践」は 5 月 12 日（日）に初級者を対象に、11 月 24 日（日）に中級者を対象に実施した。それぞれ定員の 60 名、40 名が受講した。

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラムにおける生涯研修スキルアッププログラムは、リカレントセミナーとして 3 講座を実施した。5 月 19 日（日）に「在宅医療における薬剤師の役割—薬剤師だからできる支援事例を交えて—」、6 月 9 日（日）に「在宅薬剤師のメンタルヘルス」、2 月 16 日（日）に「輸液調製の基礎と実践」を実施した。受講者はそれぞれ 19 名、21 名、20 名であった。「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム受講者 5 名は、垂水区医師会の協力を得て多職種による症例検討会への参加や、在宅患者宅への訪問同行、診察室訪問、地域包括支援センターでの研修等を受講した。

健康食品講座：健康食品指導薬剤師の資格取得者へのフォローアップ研修を 8 月 4 日（日）、健康食品指導薬剤師認定取得のための健康食品基礎講座を 2 月 22 日（土）、23 日（日）、3 月 1 日（土）、2 日（日）の 4 日間（フォローアップも兼ねる）実施した。それぞれ 147 名、351 名（4 日間延人数）の受講者であった。

シンポジウム：7 月 21 日（日）に「緩和ケアにおける今後の薬剤師のかかわり」をテーマに開催した。229 名の受講者であった。

薬剤師実践塾：例年実施してきたスキルアップ研修（第 22 回薬剤師実践塾）と中堅者研修（第 24 回薬剤師実践塾）については受講申込みが少なく、止むを得ず中止した。また、薬剤師実践塾として「在宅医

療」をテーマに実習を交えた研修会を実施した。10月20日(日)に「初めての在宅訪問をするための実践基礎知識」をテーマに、介護保険のしくみや、嚥下障害への対応等、症例を交えてグループワークを行った。また、1月26日(日)の「実践的スキルアップ研修」では、様々な器具を用いて受講者同士がアセスメントを行い、客観的情報を得ることで、患者の状態を把握する方法を実習した。参加者はそれぞれ22名、18名であった。

同窓会 17 支部との共催研修事業：各地で支部研修会が開催された。2013年度開催合計件数は59件(延べ受講者数：3,160名)であった。

2013年度に本センターが交付した認定薬剤師証は96件(新規16件、更新80件)であった。これまでの認証取得後の交付累計は688件(新規324件、更新364件)となった。健康食品指導薬剤師認定証の交付件数は新規13件、更新23件であった。健康食品指導薬剤師認定証の交付累計は330件(新規228件、更新102件)となった。

〈2013年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

全国的にも生涯研修プロバイダーが増加傾向にある中で、本エクステンションセンターは、その内容・規模とも高く評価されるレベルにあり、幅広い薬剤師のニーズに応えています。これを維持、発展させていくには多大な労力を要すると思われませんが、専任教員の配置などマンパワーの充実にも配慮いただいた上で、今後も多くの薬剤師の資質向上に貢献されることを願っています。エクステンションセンターが発足して7年目となり、新たなステージに向けた議論がなされることを期待しております。

2014 (平成 26) 年度

エクステンション事業委員会は24回開催した。生涯研修企画委員会の第1小委員会はリカレントセミナー、薬剤師実践塾担当(委員4名)、第2小委員会は卒後研修講座、シンポジウム、公開市民講座担当(委員5名)、第3小委員会は健康食品講座担当(委員5名)として計4回の小委員会を開催した。学部学生の専門教育科目(選択科目)の認定科目として、生涯研修支援プログラムを科目名「実践薬学」「健康食品」として学生に受講を認めており、2014年度はそ

れぞれ16名、47名が受講した。

卒後研修講座：「感染症をどう抑えこむかー予防と治療」をメインテーマに5月25日(日)、31日(土)及び6月1日(日)の3日間にわたって、開催した。680名の受講申し込みがあり、延べ1,934名が受講した。卒後研修関東地区講座は9月7日(日)に開催し、70名の受講者であった。なお2015年度からは関東支部単独での研修会として実施することとなった。

リカレントセミナー：「疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ」は「腎障害時の薬物治療」をテーマに6月22日(日)に開催し、受講者は47名であった。「医薬品情報の活用の仕方」は10月12日(日)に「添付文書から読み取れる情報」を実施した。受講者数は44名であった。「服薬指導シリーズ」は4月6日(日)に「骨粗鬆症」を、10月26日(日)に「在宅における緩和ケアについて」をテーマとして実施した。それぞれ133名、73名が受講した。「フィジカルアセスメントに関する講義と実践」は5月11日(日)に初級者を対象に、11月23日(日)に中級者を対象に実施した。それぞれ62名、41名が受講した。

健康食品講座：健康食品指導薬剤師の資格取得者のためのフォローアップ研修として7月27日(日)に、フォローアップ研修を兼ねた健康食品指導薬剤師認定取得のための健康食品基礎講座を2月21日(土)、22日(日)、28日(土)、3月1日(日)の4日間実施した。それぞれ143名、444名(4日間延人数)の受講者であった。

シンポジウム：6月29日(日)に「がんのチーム医療」をテーマに第7回を195名の受講者で開催した。

薬剤師実践塾：在宅医療研修として5月18日(日)に「在宅療養における薬剤師の役割ー薬剤師だからできる支援事例を交えてー」(受講者29名)、7月12日(土)、13日(日)の2日間にわたって「患者・他職種とのストレスフリーなコミュニケーション術ータイプ別効果的な関わり方で仕事をスムーズに!」(受講者20名)を実施した。また、1月25日(日)の「実践的スキルアップ研修」(受講者29名)では様々な器具を用いて受講者同士がアセスメントを行い、客観的情報を得ることで患者の状態を把握する方法を実習した。さらに、2月15日(日)は「輸液調製の基礎と実践」(受講者20名)を行い、輸液量の計算方法を含むミキシングの実習を行った。

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム

は5名が受講し、リカレントセミナーのうち中級者を対象としたフィジカルアセスメントと薬剤師実践塾を必修プログラムとして、受講を義務付けた。また、臨床能力育成プログラムとして、垂水区医師会の協力を得て多職種による症例検討会への参加や、在宅患者宅への訪問同行、診察室訪問、地域包括支援センターでの研修等を実施し、9月4日に報告会を開催した。

同窓会 17 支部との共催研修事業：各地で支部研修会が開催された。2014年度開催件数は合計57件（延べ受講者数：2,995名）であった。

2014年度に本センターが交付した認定薬剤師証は113件（新規12件、更新101件）であった。これまでの認証取得後の交付累計は801件（新規336件、更新465件）となった。健康食品指導薬剤師認定証の交付件数は新規4件、更新17件であった。健康食品指導薬剤師認定証の交付累計は351件（内、新規232件、更新119件）となった。

〈2014年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

全国的にも生涯研修プロバイダーが増加傾向にある中で、本エクステンションセンターは、その内容・規模とも高く評価されるレベルにあり、幅広く薬剤師のニーズにえています。これを維持、発展させていくには多大な労力を要すると思われませんが、専任教員の配置など運営体制の充実にも配慮いただいた上で、今後も多くの薬剤師の資質向上に貢献されることを願っています。

2015（平成27）年度

エクステンション事業委員会は35回開催した。生涯教育企画委員会の第1小委員会はリカレントセミナー、薬剤師実践塾担当（委員4名）、第2小委員会は卒業後研修講座、シンポジウム、公開市民講座担当（委員5名）、第3小委員会は健康食品講座担当（委員5名）で、小委員会の開催回数は計3回であった。健康食品指導薬剤師認定希望者の論文審査を行う健康食品指導薬剤師認定試験委員会は論文課題、論文審査等、合格発表までに2回の委員会を実施した。生涯研修支援プログラムを「実践薬学」「健康食品」とし、学部学生の専門教育科目（選択科目）の認定科目（1単位）として、学生の受講を認めており、2015年度はそれぞれ50名、57名の受講申し込みがあった。

卒業後研修講座：5月24日（日）、30日（土）、31日（日）に「代謝・免疫疾患の基礎と臨床」をテーマとして開催し、延べ1,786名が受講した。

リカレントセミナー：2015年度からリカレントセミナーのシリーズ名を廃止し、第66回は「抗血栓療法」をテーマに4月5日（日）に開催し、159名が受講した。第67回は「ビギナーのためのフィジカルアセスメント」をテーマに5月10日（日）に開催し、67名が受講した。第68回は「痛みの治療」をテーマに6月28日に開催し、88名が受講した。第69回は「睡眠障害」をテーマに9月27日（日）に開催し、154名が受講した。第70回は「薬剤師のためのコーチング」をテーマに10月18日（日）に開催し、23名が受講した。第71回は「中級者のためのフィジカルアセスメント」をテーマに11月15日（日）に開催し、26名が受講した。

健康食品講座：7月26日（日）に第14回、2月20日（土）、21日（日）、27日（土）に第15回をフォローアップ講座として開催し、それぞれ133名と378名の受講者であった。

シンポジウム：6月14日（日）に「呼吸器疾患における吸入指導について：地域における呼吸器ネットワーク」をテーマに第8回を開催し、108名の受講者であった。

薬剤師実践塾：第30回として4月26日（日）に「在宅医療研修」を開催し、20名が受講した。第31回も「在宅医療研修」として7月11日（土）、12日（日）に11名の受講者を対象に実施した。第32回は「実践的スキルアップ研修」を1月24日（日）に開催し、26名の受講者であった。第33回は「輸液の基礎と実践」として2月14日（日）に17名の受講者を対象に行った。

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラムでは、5名が受講した。リカレントセミナーのうち、中級者を対象としたフィジカルアセスメントと薬剤師実践塾を必修プログラムとして受講を義務付けた。また、臨床能力育成プログラムとして、垂水区医師会の協力を得て多職種による症例検討会への参加や、在宅患者宅への訪問同行、診察室訪問、地域包括支援センターでの研修等を実施し、5月21日に報告会を開催した。

同窓会の17支部との共催研修事業：各支部で研修会が開催された。2015年度開催件数は合計58件（延べ受講者数：2,826名）であった。

2015年度に本センターが交付した認定薬剤師証は98件（新規16件、更新82件）であった。これまでの認証取得後の交付累計は899件（新規352件、更新547件）となった。健康食品指導薬剤師認定証の交付件数は新規3件、更新56件であった。健康食品指導薬剤師認定証の交付累計は410件（内、新規235件、更新175件）となった。

〈2015年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

全国的にも生涯研修プロバイダーが増加傾向にある中で、本エクステンションセンターは、その内容・規模とも高く評価されるレベルにあり、幅広く薬剤師のニーズにえています。今後、「かかりつけ薬剤師」やベッドサイドで活躍できる薬剤師の養成に関するプログラムの需要がますます増大していくものと考え、本エクステンションセンターの機能を維持、発展させていくにはより多くの労力を要すると思われます。専任教員の配置など運営体制の充実にも配慮いただいた上で、今後も多くの薬剤師の資質向上に貢献されることを願っています。

2016（平成28）年度

エクステンション事業委員会は35回開催した。2016年度の生涯教育企画委員会は4小委員会制とし、第1小委員会：卒後研修講座（委員全員）、第2小委員会：リカレントセミナー、シンポジウム（委員7名）、第3小委員会：薬剤師実践塾（委員6名）である。小委員会の開催回数は計8回であった。健康食品指導薬剤師認定希望者の論文審査を行う健康食品指導薬剤師認定試験委員会は、論文課題及び論文審査等、合格発表までに3回の委員会を実施した。生涯研修支援プログラムを「実践薬学」「健康食品」とし、学部学生の専門教育科目（選択科目）の認定科目（1単位）として、学生の受講を認めており、2016年度はそれぞれ61名、42名の受講申し込みがあり、単位認定者はそれぞれ57名、32名であった。

2017年度に向けて今まで実施してきた「健康食品指導薬剤師」を、特定領域認定制度の「健康食品領域研修認定薬剤師制度」として公益社団法人薬剤師認定制度認証機構へ認証申請を行うため、既存のエクステンション事業委員に申請準備委員を新たに数名追加し、臨時委員会を6回開催した。認証されれば「生涯研修認定制度」と「健康食品領域研修認定薬剤師制度」の2つの制度をエクステンションセンター生涯研

修支援事業として運営することとなる。

卒後研修講座：5月22日（日）、28日（土）、29日（日）に「これからの薬剤師が目指すもの」をテーマに第42回を開催した。508名の受講申し込みがあり、延べ1,384名が受講した。

リカレントセミナー：「健康づくり支援のための薬剤師講座：高齢者糖尿病」をテーマに4月3日（日）に第72回を開催し、150名が受講した。第73回は「ビギナーのためのフィジカルアセスメント」として5月8日（日）に開催し、56名が受講した。第74回は「健康づくり支援のための薬剤師講座：骨粗鬆症」をテーマに6月26日（日）に開催し、136名が受講した。第75回は「健康づくり支援のための薬剤師講座：セルフメディケーション」をテーマに9月25日（日）に開催し、111名が受講した。第76回は「健康づくり支援のための薬剤師講座：認知症」をテーマに10月16日（日）に開催し、119名が受講した。第77回は「中級者のためのフィジカルアセスメント」をテーマに11月13日（日）に開催し、34名が受講した。

健康食品講座：第16回を7月24日に開催し、134名が受講した。2月18日（土）、19日（日）、25日（土）、26日（日）には健康食品基礎講座とフォローアップ講座を開催し、延べ384名が受講した。

シンポジウム：「在宅における摂食嚥下障害と多職種連携」をテーマに6月12日（日）に開催し、164名が受講した。

薬剤師実践塾：在宅医療研修として第34回、第35回をそれぞれ4月24日（日）、7月9日（土）、10日（日）に開催し、25名と42名が受講した。1月22日（日）は第36回として在宅医療の「実践的スキルアップ研修」を開催し、24名が受講した。第37回は「輸液調製の基礎と臨床」として2月12日に開催し、17名が受講した。

同窓会の17支部との共催研修事業：各支部で研修会が開催された。2016年度の開催件数は合計52件（延べ受講者数：3,289名）であった。

2016年度に本センターが交付した認定薬剤師証は123件（新規39件、更新84件）であった。これまでの認証取得後の交付累計は1,022件（新規391件、更新631件）となった。健康食品指導薬剤師認定証の交付は新規7件、更新21件であった。健康食品指導薬剤師認定証の交付累計は438件（新規242件、更新196件）となった。

〈2016年度事業に対する生涯研修認定制度評価委員会からの全般的評価〉

本エクステンションセンターは、その内容・規模とも高く評価されるレベルにあり、幅広く薬剤師のニーズに応えています。これを維持、発展させていくには多大な労力を要すると思われませんが、本年度、不足していたマンパワーが補われたことは評価されます。

県薬剤師会、病院薬剤師会主催の研修会との連携を図り、共通テーマを掲げて進めていくことも有効な方法かと思われまます。

今後は事業の成果がいかに地域薬剤師の資質向上に活かされているかを客観的に評価する指標を定め、さらなる発展につなげていただけることを期待しております。

〈第2回目の認証更新〉

公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構 平成28年度第2回書面理事会において、認証更新が以下の理事会記録の記載のように承認された。

平成28年度第2回書面理事会記録（抜粋）

審議概要・結果

(1) 提案者：代表理事 吉田武美

(2) 理事会の決議年月日：

平成28年8月31日（水）

(3) 理事会の決議があった事項の内容：

平成28年4月15日付「G07神戸薬科大学」より認証更新申請書が提出され、その申請内容について当機構の認定制度委員会において評価を行った。

今般、その評価作業が終了し、認証担当理事より、平成28年8月3日付認証更新「適」の「評価結果総括報告書」が提出された。

この「評価結果総括書」を平成28年8月10日役員全員に送付し、内容確認の上、承認の可否について意見を求めたところ、当該申請を承認することについて、役員全員から同意する旨の書面をいただき、本提案は可決され、認証更新が認められた。

4.3 特定領域認定制度「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)による研修支援事業

生活習慣病予防に係わる特定健康診査・特定保健指導制度が始まり、ヘルスケアに役立つものとして健

康食品の利用が増大している。このような中、2015年には「食品の新たな機能性表示制度」が施行された。品質管理、安全性確保、有害情報の収集体制などが整備されることが望まれるが、これらを踏まえて健康食品に期待される三次機能（生体調節による健康の維持、疾病の予防、体調リズムの調節、老化の抑制など）に関する専門知識を有し、健康食品を利用する消費者に対して、医薬品との相互作用を含む有効かつ安全な摂取方法等について適正な情報を提供できるよう、研修会を実施している。

健康食品に期待される上述の三次機能に関する専門知識を有し、これらの食品を消費者が利用しようとするときに、有効かつ安全に摂取できるよう適正な情報を提供できる薬剤師を健康食品指導薬剤師と称し、神戸薬科大学がこれを認定している。

最近の健康食品講座と受講者数の推移を表4-5に示す。

健康食品領域において地域住民の健康サポートに、より深く貢献できる研修認定薬剤師を養成するため、健康食品領域の研修プログラムを「健康食品講座」及び「薬剤師健康食品実践塾」として充実させた「健康食品領域研修認定薬剤師制度」事業を実施することを計画した。これは、「健康食品領域研修認定薬剤師制度」による研修を実施することにより、所定の研修単位を修得し、公開論文発表会で発表を行い、その際の質疑に対する応答も考慮して合否判定を行う、論文試験に合格した薬剤師を「健康食品領域研修認定薬剤師」とするものである。2018年度からの認定開始をめざして、特定領域認定制度(P)に申請していたところ、2017年12月15日に認証された。

この「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)に基づいて認定された「健康食品領域研修認定薬剤師」を養成することにより、薬剤師による健康サポート活動の質の向上に貢献するとともに、国民の健康増進に寄与することを構想している。

具体的には図4-1に示すように、本学での研究で得られた科学的知見を基盤としながら、薬剤師対象の「健康食品講座」を開講し、講座で得た知見も合わせて地域住民を対象とする「健康サポートセミナー」を開催し、地域住民の健康の維持・増進にも貢献するという内容である。健康食品に関連する研究としては、既に本学ではビタミンA、D、Kやポリフェノールについて実績があり、今後、「健康食品講座」で得た新たな

表 4-5 健康食品講座と受講者数の推移

年度	回 (内容)	受講者数
2010	1、2 (フォローアップ)、3 (基礎)	681
2011	4、5 (フォローアップ)、6 (基礎、4日目フォローアップを兼ねる)	464
2012	7、8 (フォローアップ)、9 (基礎、4日目フォローアップを兼ねる)	553
2013	10 (フォローアップ)、11 (基礎、フォローアップを兼ねる)	498
2014	12 (フォローアップ)、13 (基礎、フォローアップを兼ねる)	587
2015	14 (フォローアップ)、15 (基礎、フォローアップを兼ねる)	516
2016	16 (フォローアップ)、17 (基礎、フォローアップを兼ねる)	520
2017	18-22 (基礎、フォローアップを兼ねる)	421

※ 2009 年度まではリカレントセミナーの中の一つの講座として実施

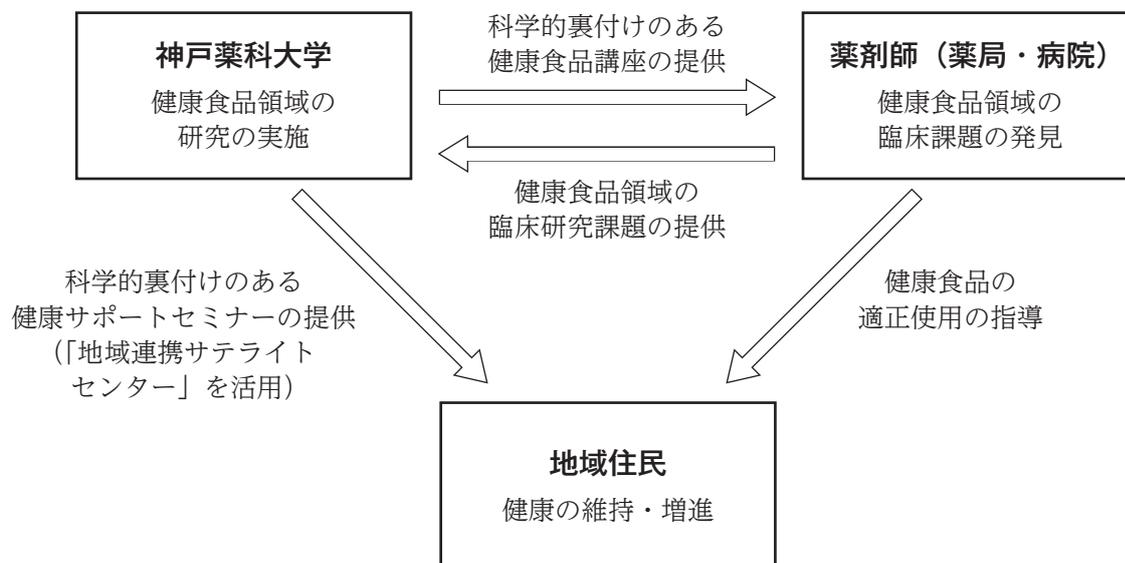
研究課題についても大学で解明を試み、活動に活かす計画である。

「健康食品領域研修認定薬剤師制度」事業は、実施母体に設置したエクステンションセンターが担当し、生涯研修支援事業の一環として「神戸薬科大学エクステンションセンター規程」を定めて運営しており、エクステンションセンター長を兼務する学長が運営責任者として対応する。また、エクステンションセンターの事業全体を統括するエクステンションセンター事業統括委員会を新たに設置し、その下に「生涯研修認定制度」事業を実施するエクステンションセンター生涯研修事業委員会と「健康食品領域研修認定薬剤師制度」事業

を実施する健康食品領域研修事業委員会を置き、「生涯研修認定制度」事業と連携しながら、特定領域研修事業としての実施体制（健康食品領域研修事業委員会、健康食品講座企画委員会、健康食品領域研修認定薬剤師制度評価委員会、健康食品領域研修認定試験委員会）により「健康食品領域研修認定薬剤師制度」事業の運営を行う（図 3-1 参照）。

研修受講者は、薬剤師を始めとする保健医療領域免許取得者及びその領域の学生としている。ただし、「健康食品領域研修認定薬剤師」の対象者は、公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構から認証されたプロバイダーにより認定された生涯研修認定薬剤師制

図 4-1 「健康食品領域研修認定薬剤師制度」の構想



度 (G) の認定薬剤師又は、特定領域認定制度 (P) の認定薬剤師であることを申請の際の必須条件として
いる。受講資格及び認定対象者については、出身大
学を問わない。

本学が認定した「健康食品指導薬剤師」の認定者
数は、2017年3月31日現在で、新規276名、更
新196名の総計472名である。「健康食品指導薬
剤師認定制度」については、移行期間を設け、2019
年度までは継続して行うが、以後は「健康食品領域
研修認定薬剤師制度」に統合する予定である。

以下に「健康食品領域研修認定薬剤師制度」によ
る研修の概要と認定手続きについて記す。

1) 研修の形態

本学の健康食品領域研修認定薬剤師制度に基づ
き主催又は共催する事業は、主に集合研修である。

①健康食品講座 A 1年間 3単位
健康食品講座 A は、健康食品の制度や関連
法規を中心に構成した研修となっている。

②健康食品講座 B 1年間 12単位以上
健康食品講座 B は、健康食品を消費者が有効
かつ安全に利用できるために、健康食品に関す
る、薬学・医学・栄養学・食品学の科学的知
識の習得ができる講座を組んでおり、健康食品
の科学的根拠に基づいた適正な情報を提供で
きる能力を養う講座とする。

③薬剤師健康食品実践塾 1年間 1～3単位
健康食品領域のワークショップ形式の研修会
である。

健康食品領域研修認定薬剤師制度において履修
すべき研修項目として、以下の表 4-6 に示す項目を
設定し、健康食品領域の研修プログラムを実施する。

2) 研修課題及び講師の選定

次年度の年間スケジュールを策定する中で、健康
食品講座企画委員会は毎行っている受講者から
のアンケート回答における希望テーマや最近の医学・
薬学・栄養学分野の情勢を見極めながら、研修内
容及び講師を選定する。健康食品については、国
民の健康への関心が高まる中、身近なものとして利
用が増大している。特に高齢者の利用では、何らか
の疾病のために薬を服用していることが多く、医薬
品と健康食品の相互作用についても未解明のものが
多いので注意が必要である。薬剤師は健康食品の

使用に安全性も含めて大いに係わる必要があり、健
康食品の適正な情報提供に理解を深められる研修
会になるよう企画する。具体的には健康食品講座企
画委員会において、重要性・必要性や今後の薬剤
師職能の方向性を見極めて研修テーマの適否を検
討する。また各委員から推薦された講師候補者案に
基づき、研究・実務領域、経歴、研修テーマへの
適合性の観点から総合的に判断して講師案を策定
する。そして「健康食品講座」及び「薬剤師健康
食品実践塾」から構成される研修プログラムを「健
康食品講座プログラム」として、日程案、講師案、
予算案を作成する。

3) 研修の事前評価体制

健康食品領域研修事業委員会において、健康食
品講座企画委員会により企画された「健康食品講
座プログラム」を審議し、その実施及び研修単位
の付与を決定する。

4) 受講者への付与単位

<単位付与基準>

- ①神戸薬科大学での「健康食品講座」の研修会
受講 90分 1単位
- ②健康食品領域に関する研修会の受講
90分 1単位
- ③薬剤師健康食品実践塾など健康食品領域に関連
する実習、実践・実技等の受講
120分 1単位
- ④学会等での健康食品領域に関連する講演等の受
講 90分 1単位
学会例：日本病態栄養学会、日本機能性食品
医用学会、日本静脈経腸栄養学会等
- ⑤健康食品領域に関する学会発表
 - ・発表者 2単位
 - ・共同発表者 1単位
- ⑥健康食品領域に関する論文発表
 - ・主著者 5単位
 - ・共同著者 2単位
- ⑦健康食品領域に関する在宅研修システム
(e-learning) 90分 1単位
(小テスト又はレポート。ただし、3単位まで認定)
- ⑧健康食品領域に関するその他の新規研修事業に
ついては、健康食品領域研修事業委員会で審議
の上、単位数を決定する。

5) 研修の事後評価体制

これまで実施してきた生涯研修事業において、毎回受講者にアンケート調査用紙を配布し、内容、レベル、理解度及び範囲等に関する評価を求めるとともに、取り上げてほしいテーマ等についても要望を集計し、以後の企画における参考資料として活用している。健康食品領域研修事業においても受講後にアンケート調査を実施し、研修会の企画・運営などの事後評価を健康食品講座企画委員会、健康食品領域研修事業委員会で行う計画である。また、年度ごとに健康食品領域研修認定薬剤師制度評価委員会により研修事業内容について審議を行い、審議結果を「健康食品領域研修認定薬剤師制度評価報告書」として、エクステンションセンター長に提出する計画である。そして健康食品領域研修事業委員会では、それらの報告を基に自己点検・評価を行

い、改善計画を立案し、実行する。その結果をエクステンションセンター事業統括委員会に報告する。

6) 受講経費

受講料は、当面、これまでの研修会の実績を踏襲し、次のとおり実施する（研修会についてはいずれもテキスト代を含んだ受講料）。

- ①健康食品講座 A (1 コマ 90 分 1 単位) 1,000 円
- ②健康食品講座 B (1 コマ 90 分 1 単位) 1,000 円
- ③薬剤師健康食品実践塾など健康食品領域に関連する実習、実践・実技等 (1 コマ 120 分 1 単位) 1,000 円

(ただし、実践的な実習形式の研修会の場合は、実費を徴収することがある)

「健康食品領域研修認定薬剤師」の認定取得には、認定証申請料として 10,000 円が必要である。

表 4-6 健康食品領域研修項目

大項目	中項目	学習の到達目標
I 健康食品と薬剤師	法・制度	保健機能食品制度を理解し、関連法規を遵守できる薬剤師となる。
	保健機能食品分類	「特定保健用食品」、「栄養機能食品」、「機能性表示食品」の相違を理解する。
II 健康食品と食生活・健康管理	(1) 保健機能食品の機能	様々な保健機能食品に関する発表内容を批判的に吟味し、保健機能食品の機能を理解する。
	(2) 健康食品による健康の維持、疾病の予防、体調リズムの調節、老化制御	様々な保健機能食品の体調調節機能による健康の維持機能、疾病予防機能、体調リズム調節機能、老化制御機能を理解する。
	(3) 食生活と健康における健康食品	疾病と食生活の関連を理解し、食生活指導における健康食品の位置づけを把握する。
III 健康食品の購入・利用時の助言・指導	薬剤師としての健康食品購入希望者への助言・指導	薬剤師として、薬物治療との関係での健康食品の位置づけ等を理解することで、健康食品購入希望者の購入希望動機を把握して、食生活・栄養状態との関連や医薬品との相互作用などについて適切な助言・指導方法を修得し、実践できるようになる。

新規申請時には、大項目Iから3単位以上、大項目IIから27単位以上、大項目IIIから3単位以上を4年以内で修得し、他機関が実施する健康食品領域に関する研修会の受講単位も10単位まで使用可能で合計40単位以上が必要である。この新規申請時の受講単位に、「薬剤師健康食品実践塾」1単位以上を含んでいることが必要である。

更新申請時には、大項目IとIIIから各3単位以上、大項目IIについては、他機関が実施する健康食品領域に関する研修会の受講単位も10単位まで使用可能で、3年間で合計30単位以上が必要である。この更新申請時の受講単位に、「薬剤師健康食品実践塾」1単位以上を含んでいることが必要である。

7) 修得度の評価

研修会ごとに、受講者アンケートを実施し、理解度や内容、業務との関連について回答を集計している。また、受講者に配布する「神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師研修履修手帳」に学習の到達目標が記載されており、この手帳に受講年月日、受講時間、研修会名、主催者、テーマ、研修会開催場所、研修成果等を記入し、研修区分、学習プログラム該当大項目を選択する。また、受講日が確認できる研修単位シールは、受講終了後に研修内容の理解度を含めたアンケート調査用紙を兼ねた引換券と交換する。「神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師研修履修手帳」の貼付欄に研修単位シールを貼付し、各自が受講管理を行う。この手帳の受講者による研修成果の自己評価を行うために、ポートフォリオとしての利用を推奨する計画である。

健康食品領域研修事業委員会では、研修認定申請者が提出した「神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師研修履修手帳」に基づき、申請者の修得度を評価することを計画している。

8) 受講方法及びプログラムの広報

研修会は、神戸薬科大学施設内（「地域連携サテライトセンター」を含む）で実施する。

広報活動については、次の方法で展開しており、基本的に今後も継承する。

- ① 本学ホームページ上で、生涯研修支援に関する事項（健康食品講座等）の開催予告を行っている。
- ② 「ファルマシア」（日本薬学会）、「日本薬剤師会雑誌」（日本薬剤師会）、「兵薬界」（兵庫県薬剤師会）、「O.H.P.NEWS」（大阪府病院薬剤師会）、「大阪府薬剤師会雑誌」（大阪府薬剤師会）などの各種薬業団体及び職能団体機関誌上で開催予告を行っている。
- ③ 本学同窓会ホームページ（<http://www.kobe-pharma-u.ac.jp/dosokai>）上で、本部及び全支部の研修会に関する事項の開催予告を行っている。
- ④ 認定薬剤師認証研修機関協議会ホームページ（<http://www.ninnteiyakuzaishi.com/index.php>）上で、開催案内を行っている。

9) 学習到達目標

表 4-6 健康食品領域研修項目にある各項目に到達目標を示し、その内容は「神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師研修履修手帳」にも記載する。

10) 受講者の意見聴取

いずれの研修会も受講者に毎回アンケート調査用紙を配布し、講義に対する満足度、理解度、レベル、範囲に関する評価・要望等を集計し、これらの結果を今後の企画に反映するための資料として活用する。

11) 健康食品領域研修認定薬剤師証の申請手順

① 論文試験受験資格

(ア) 健康食品に関する研修単位を4年以内に40単位以上修得していること。ただし、毎年5単位以上修得していること。

- ・エクステンションセンターの指定する「健康食品講座A」（必修）3単位及び「健康食品講座B」の27単位以上とする。
- ・表に示す研修プログラムの大項目Iから3単位以上、大項目IIから27単位以上、大項目IIIから3単位以上を4年以内に修得し、合計40単位以上が必要である。この新規申請時の受講単位に「薬剤師健康食品実践塾」1単位以上を含んでいることが必要である。
- ・公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構により認証された他プロバイダーや他の団体等が主催する健康食品領域に関する研修会の受講単位は10単位以下とする。
- ・4年以内に新規申請をするための必要単位を修得するには、健康食品領域に関する研修会の受講を年度始め（4月）から受講し、各年度（4月～翌年3月）において5単位以上修得すること。また、論文試験の出願のためには、その年度の12月までに40単位を満たしていることが必要である。
- (イ) 公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構により認証されたプロバイダーの生涯研修認定制度（G）の認定薬剤師あるいは、特定領域認定制度（P）の認定薬剤師であること。

② 出願関係（出願期間：毎年1月の1か月間）

受験希望者は次の書類をそろえて、所定の期日までにエクステンションセンターに郵送する。

- (ア) 神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師論文試験受験申込書
- (イ) 認定証申請料振込時に発行される利用明細書の写し [(ア) の受験申込書に貼付 (必要事項を記入) する]
- (ウ) 神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師研修履修手帳
- (エ) 公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構により認証されたプロバイダーの生涯研修認定制度 (G) の認定薬剤師証 (写し) あるいは、特定領域認定制度 (P) の認定薬剤師証 (写し)

※「健康食品講座」の受講 (出席) 状況をエクステンションセンターが確認する。

③論文試験 (毎年2月末提出締切)

- (ア) 出題課題に対して、論文様式 (約3,000字) で記述する。
- (イ) A4用紙縦型 (横書、30文字×40行) を使用。
- (ウ) 原則としてパソコンを使用し、フォントサイズ11~12ポイントで記入 (図・表の使用は可)、プリントアウトしてエクステンションセンターに郵送する。

④発表会 (3月上旬)

提出された論文に基づく健康食品領域研修認定のための発表会を公開で行う。

12) 認定の適否評価体制

健康食品領域研修事業委員会は、提出された申請書類が「神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師制度に関する規程」第12条に適合しているかを確認する。提出された論文と、それに基づく発表会での発表内容と質疑に対する応答について健康食品領域研修認定試験委員会において審査することで、論文試験の合否を判定する。論文試験合格者にはエクステンションセンターより合格通知書を3月末までに郵送する。

13) 認定条件

- ①論文試験受験資格を満たしていること。
- ②論文試験 (提出された論文と、それに基づく公開発表会での発表内容と質疑に対する応答についての評価を含む) に合格していること。

①と②の認定条件を全て満たしている者に「健康食品領域研修認定薬剤師証」を交付する。

14) 更新の規定

- ①更新時の単位認定の対象となる研修
更新時の単位認定となる研修は、<受講者への付与単位>に記載している研修会を対象とする。
- ②健康食品領域研修認定薬剤師証の更新
神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師証の有効期間は、発行日 (4月1日) から3年間とし、更新は3年ごとに行う。
- ③更新時の認定条件 (修得単位)
 - ・認定証の更新には、表に示す研修プログラムの大項目ⅠとⅢから各3単位以上、大項目Ⅱと、他機関等が実施する健康食品領域の研修単位があれば、それもあわせて3年間で合計30単位以上が必要である。また、この更新申請時の受講単位の、「薬剤師健康食品実践塾」1単位以上を含んでいることが必要である。ただし、毎年5単位以上修得しなければならない。
 - ・認定証の更新は、健康食品領域に関する研修を認定証発行日 (4月1日) から3年間で本学が実施する「健康食品講座 A、B」を受講し20単位以上修得すること。
 - ・公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構により認証された他プロバイダーや他の団体等が主催する健康食品領域に関する研修会の受講単位は、3年間で10単位以下とする。
 - ・学会発表と論文発表については、3年間で合計10単位まで認定し、在宅研修システム (e-learning) (小テスト又はレポート) による研修については3年間に3単位まで認定する。
 - ・修得総単位が3年間で30単位以上となった者は、更新申請時に3年間の活動において見出した健康食品領域に関する事例を記述した論文を含む更新申請書類をエクステンションセンターに郵送する。

15) 健康食品領域研修認定薬剤師証の更新申請

申請者は、現在の受講状況が更新時の認定条件を充足していることを確認した上で、2月末までにエクステンションセンターに認定証申請料10,000円を添えて申請しなければならない。

《更新時の認定証申請書類》

- ①神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師証更新申請書
- ②認定証申請料振込時に発行される利用明細書の写し〔①の更新申請書に貼付又は、必要事項を記入する〕
- ③神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師研修履修手帳
- ④神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師証の写し
- ⑤公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構により認証されたプロバイダーの生涯研修認定制度（G）の認定薬剤師証（写し）あるいは、特定領域認定制度（P）の認定薬剤師証（写し）
- ⑥論文
 - （ア）更新申請までの3年間での活動において見出した健康食品領域に関する事例について、論文様式（3,000字程度を目安）で記述する。
 - （イ）A4版用紙縦型（横書、30文字×40行）

を使用。

- （ウ）原則としてパソコンを使用し、フォントサイズ11～12ポイントで記入（図・表の使用は可）、プリントアウトしてエクステンションセンターに郵送する。

16) 更新時の認定の適否評価

健康食品領域研修事業委員会は、提出された申請書類が「神戸薬科大学健康食品領域研修認定薬剤師制度に関する規程」第13条に適合しているかを確認した後、提出された論文に基づく健康食品領域研修薬剤師認定更新のための発表会を公開で3月上旬に開催し、発表内容と質疑に対する応答について健康食品領域研修認定試験委員会において審査することで、論文試験の合否を判定する。論文試験合格者について、健康食品領域研修事業委員会で審議の上、認定する場合は「健康食品領域研修認定薬剤師証」を交付する。

（岩川 精吾・長嶺 幸子）

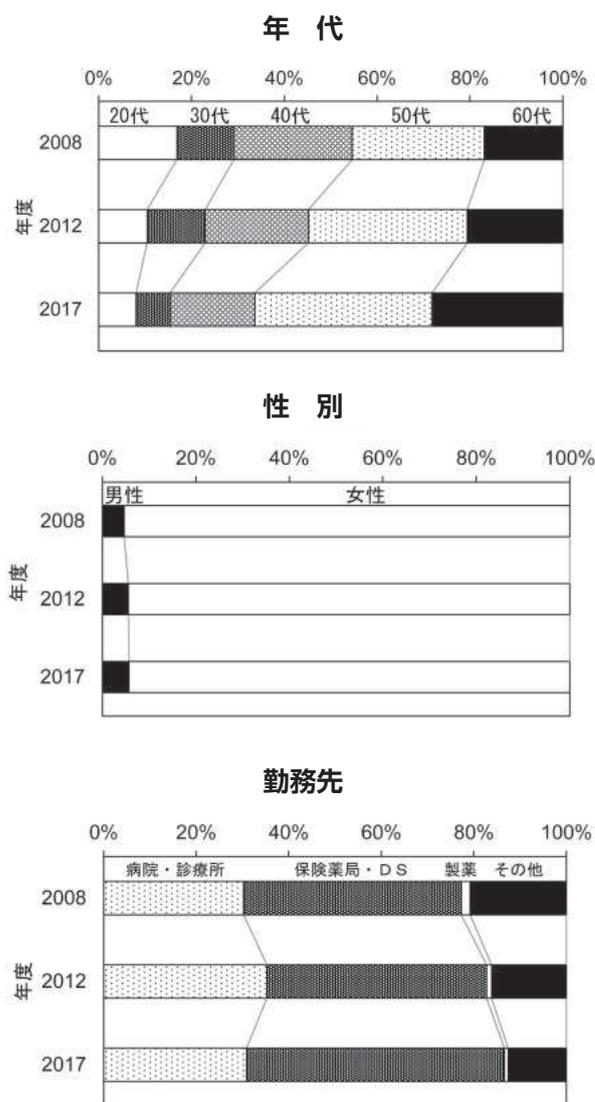
5. 事業の点検と評価

エクステンションセンターで実施している生涯研修支援事業である「卒後研修講座」、「リカレントセミナー」、「薬剤師実践塾」、「シンポジウム」および「健康食品講座」の点検と評価を行うために、各事業で実施したアンケート結果の時系列的な分析を行い、2008（平成20）年度（生涯研修認定制度認証取得1年後）、2012年度（同5年後）、2017年度（同10年後）の3時点で比較した。なお、健康食品講座については2010年度より独立した講座として実施することとなったため、2010年度（実施1年後）、2014年度（実施5年後）および2017年度（実施8年後）を比較した。

卒後研修講座：受講者の年齢層は徐々に上昇しており（図5-1）、長年継続している受講者が多いことが見て取れる。卒後研修講座の受講者数は近年漸減傾向にあり（表4-1参照）、特に若年層の受講者数が減少していることがわかる。その要因として、①若年層の専門薬剤師認定を目的とした専門領域研修への志向が高まっていること、②受講費用が他講座に比べて高額（3日間で10,000円の一括申し込み制のみ）であること、③開催日に土曜日を含むこと、が考えられる。また、受講者の性別は一貫して女性が圧倒的に多く、92.5～95.3%の間で推移している。この背景として、卒後研修講座が1975年に始まった神戸女子薬科大学卒後教育に端を発していることが挙げられ、現在でも女子薬科大学時代の卒業生が占める割合が多いためと考えられる。受講者の勤務先は病院・診療所および保険薬局・ドラッグストア（DS）が大半を占めており、2008年度から2017年度にかけて「その他」を選択した受講者の割合が減少している。「その他」には未就業者が含まれているため、近年、何らかの形で就業している受講者が増えているものと推察される。受講者の卒後研修講座に対する評価は一貫して高く、講義の内容および新しい知識を得たかについて、いずれの開催年においても90%以上の受講者が、「満足」あるいは「やや満足」と回答している。一方、業務に役立つかについては、「かなり役に立つ」あるいは「やや役に立つ」と回答した受講者の割合は70～92%の間で開催年によりばらつきがみられた。これらのことから、直接業務に役立つ内容でない場合でも、新しい

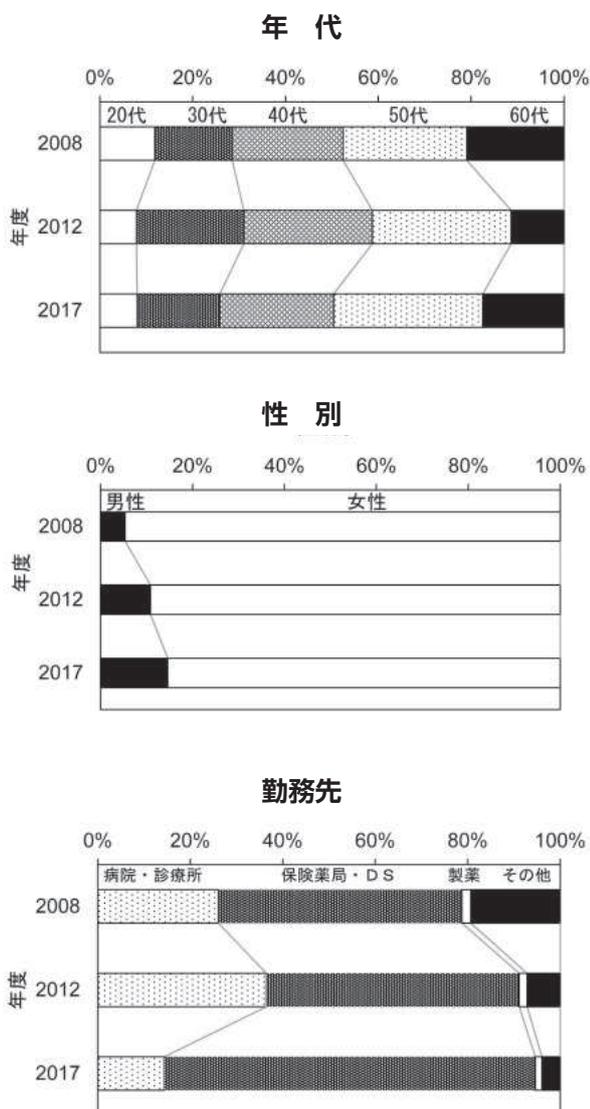
知識を得たことにより、受講者の内容に対する満足度が高くなっているものと思われる。

図5-1 卒後研修講座受講者の年代、性別および勤務先の推移



リカレントセミナー：卒後研修講座に比べて、受講者の年齢層は2008年度から2017年度を通じて臨床経験を積み、実務面で中心的な役割を担っていると考えられる30代と40代が多く（図5-2）、リカレントセミナーが卒後研修講座のアドバンスコースであるとい

図 5-2 リカレントセミナー受講者の年代、性別および勤務先の推移



う位置づけに合致した結果となっている。また、受講者の性別は男性の割合が徐々に増加する傾向を示しており、2017年度では男性の割合は約15%であった。本学における共学第1期生が2017年には40代に到達していることや、本学の共学校としてのイメージの定着が関係しているものと思われる。受講者の勤務先は、2008年度、2012年度に比べて2017年度では保険薬局・DSの割合が著しく増加している。2016年4月から開始された「かかりつけ薬剤師・薬局」制度において、研修認定の取得がかかりつけ薬剤師の要件の一つとなり、保険薬局勤務者の研修認定の取得・更新のニーズが高まったことが大きく影響していると考えられ

る。受講者のリカレントセミナーに対する評価は総じて高く、いずれの時点においても講義の内容について「満足」あるいは「やや満足」と回答した受講者は86%以上、新しい知識を得たかについて「満足」あるいは「やや満足」と回答した受講者は88%以上であった。また、業務に役立つかについても、「かなり役に立つ」あるいは「やや役に立つ」と回答した受講者は83%以上であった。

薬剤師実践塾: 受講者の年齢層は2008年度、2012年度と比較して2017年度では20代、30代の割合が大幅に増加している(図5-3)。この結果は、2017年度より若手薬剤師の研修受講者を増やす目的で、卒業後20年以内に限定した症例検討会を年2回実施した成果が如実に表れたものである。また、受講者の性別についても、2017年度の男性の割合が大きく増加している。この点についても、症例検討会の実施による影響が大きく、オーガナイザーを務めた本学卒業生の紹介による新規受講者に男性が多かったことが要因であると考えられる。勤務先については、2008年度では未就業者を含む「その他」の割合が11%程度を占めており、薬剤師実践塾の当初の目的の一つが再就職を希望する離職薬剤師・未就業薬剤師を対象とする実践的研修会の提供であったことを反映したものであると考えられる。また、2008年度、2012年度は保険薬局・DS勤務者が受講者の大半を占めているが、2008年度から実施している薬学生薬局実務実習の指導者研修、2012年度から実施している在宅医療に関連する研修は、いずれも主として保険薬局勤務者を対象としたものであったためである。一方、2017年度では病院・診療所勤務者の割合が大きく増加しており、保険薬局・DS勤務者に匹敵する人数であった。2017年度には多職種の中で薬剤師が薬学的視点を活かして主体的に活動するための考え方をトレーニングする新たな研修として、症例検討会(3回、うち2回は若手に限定したもの)を実施したが、この試みが保険薬局・DS勤務者のみならず病院・診療所勤務者のニーズにもマッチしたのではないだろうか。受講者の薬剤師実践塾に対する評価は極めて高い。2008年度から2017年度までの10年間に開催した薬剤師実践塾のうち約半数の開催年度において、内容、新しい知識を得たか、業務に役立つかの全項目について受講者全員が「満足」あるいは「やや満足」と回答している。

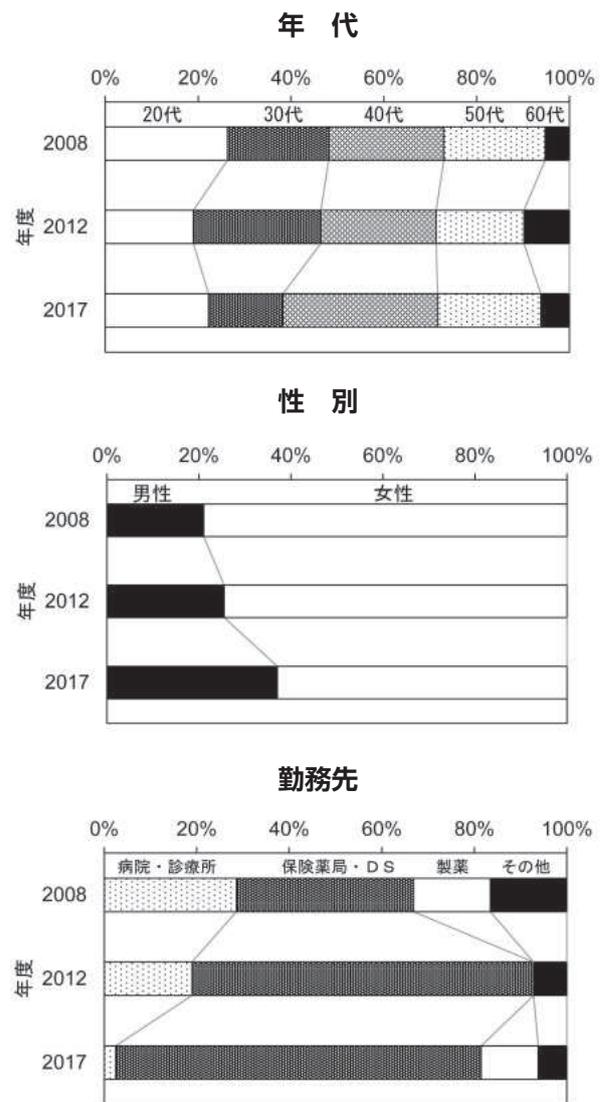
図 5-3 薬剤師実践塾受講者の年代、性別および勤務先の推移



シンポジウム：各年のテーマにより受講者の属性が大きく異なるが、全体として幅広い年齢層の薬剤師が受講しており、男性受講者の割合も比較的高いことがわかる（図 5-4）。また、受講者の勤務先はテーマを反映して大きく変化している。図中に示した 2008 年度のテーマは「ジェネリック医薬品の普及促進をめぐる薬剤師の役割」であり、製薬メーカー勤務者が 16.5% を占めているが、「在宅医療における薬剤師の役割－超高齢化社会を迎えるにあたって－」をテーマとした 2012 年度、「健康サポート薬局について－あれから 1 年 皆さんの取組みは？－」をテーマとした 2017 年度では参加者の大半が保険薬局・DS 勤務者となっている。

る。2008 年度から 2017 年度の 10 回のシンポジウム全てにおいて、内容、新しい知識が得られたかについては 90% 以上の受講者が「満足」あるいは「やや満足」と回答している。また、業務に役立つかについては 84% 以上の受講者が「満足」あるいは「やや満足」と回答しており、各年のテーマは異なるが受講者の満足度は高いことがわかった。

図 5-4 シンポジウム受講者の年代、性別および勤務先の推移



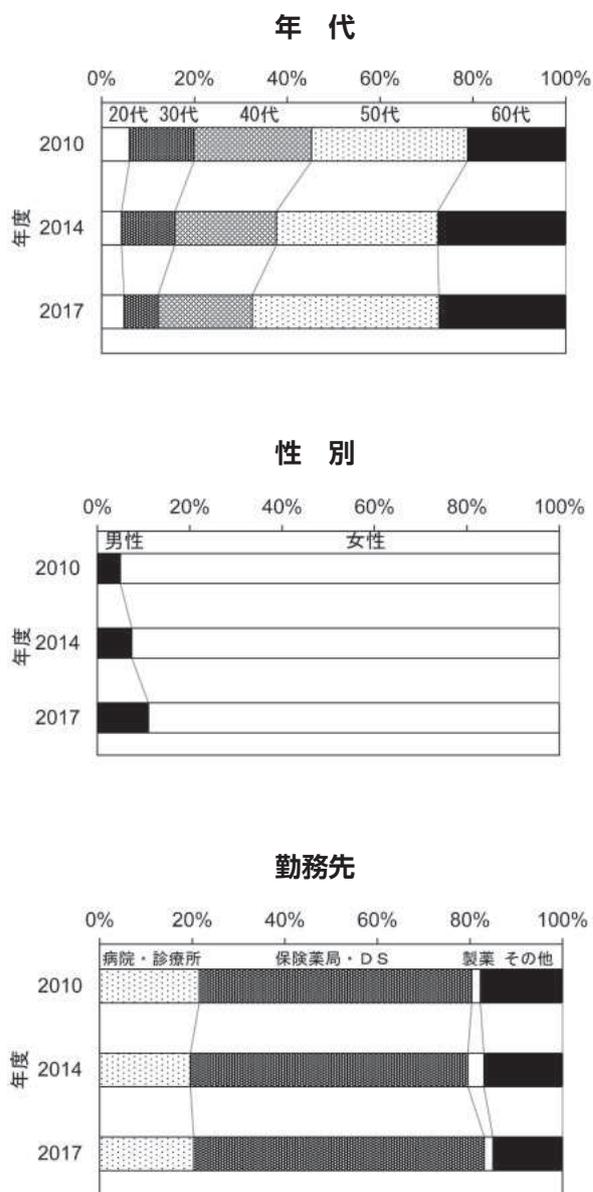
健康食品講座：卒後研修講座と同様に、50 代、60 代以上の受講者の占める割合が高くなっている（図 5-5）。比較的高い年齢層の薬剤師が健康食品に対する興味・関心が強いことが窺える。また、リカレント

セミナーと同様に近年、男性の参加者が増加する傾向が認められる。いずれの時点においても、保険薬局・DS勤務者が約60%、病院・診療所勤務者が約20%を占めており、保険薬局・DS勤務者に加えて病院・診療所勤務者についても、健康食品に関連した研修に対するニーズがあるものと思われる。受講者の健康食品講座に対する評価については、健康食品講座が始まった当初は極めて高い満足度であったが、近年、やや満足度が低下する傾向がみられている。最初の2年間において内容および業務に役立つかについて「満足」あるいは「やや満足」と回答した受講者の割合は90%以上であったが、2016年度では内容については82.0%、業務に役立つかについては74.1%と低下している。しかし、2017年度では、内容については89.1%、業務に役立つかについては85.2%の受講者が「満足」あるいは「やや満足」と回答しており、改善がみられている。(新しい知識が得られたかについては健康食品講座ではアンケート項目となっていない実施回があったため、記載していない。)このような変化が見られたはっきりとした原因は不明であるが、開始当初の健康食品に関する法律や周辺領域の知識を中心とした講義を集中的に実施するプログラムから、リピーターに配慮する形で、講義内容の重複を避け、個別の機能性成分に関する講義のウエイトを高めたプログラムに変更していったことが影響しているのかもしれない。

2018年度より全国で最初の健康食品・機能性食品分野の特定領域認定薬剤師制度である、「健康食品領域研修認定薬剤師制度」をスタートさせた。今後は、本制度の要綱に定められた研修項目に則り、系統だった講義に加え、情報検索や健康食品に関連した症例検討など、実践的な内容も含めたプログラムを提供し、受講者の評価を引き続き調査していきたい。

(鎌尾 まや・杉浦 佳子)

図 5-5 健康食品講座受講者の年代、性別および勤務先の推移



6. 今後の生涯研修支援事業の発展に向けて

今後の薬剤師のあり方を考えた場合、病院では病棟での役割がますます重要となってくる。その際、病院における看護師の地位と能力は今後ますます向上し、患者さんからの信頼はより厚くなることが考えられる。その中で病棟薬剤師が患者さんや医療スタッフからなくてはならない存在として期待されるためには、「患者さんに寄り添う薬のプロフェッショナル」としての存在感をより強く示していく必要がある。具体的には、処方提案する能力を有する薬剤師である必要がある。そのためには、学部教育と連携させながら、検査値と患者さんの病状よりの確かな薬物の投与設計を行う能力を養成することが期待される。

一方、薬局薬剤師が生き残っていくためには、今後、重きを増してくる在宅医療において、他職種と連携しながら、患者さんに対して、薬の作用を最大限に発揮し、副作用を最小限に留める服薬指導者としての役割を果たすことが必要である。さらに、薬局薬剤師には健康サポートの推進役としての役割も期待される。

これらの活動が実施できる薬剤師となるために必要な生涯研修支援事業を実施し、薬剤師の学修に対して継続した支援活動を行っていく必要がある。

そのためには、まず、検査値を含めた主要疾患に対する十分な知識が必要である。神戸薬科大学では、長年にわたって、そのときどきの医療に関する重要課題を取り上げ、「卒後研修講座」を実施してきた。特に、2017（平成 29）年度からは、新たに 2019 年度から開始される主要 8 疾患を対象とした新モデル・コアカリキュラムに基づく実務実習を念頭におき、各疾患に関係する第一人者の医師あるいは薬剤師を講師として委嘱した。主要な疾患に関する深く幅広い知識を修得し、自らの薬剤師としての活動に活かすとともに、実務実習生に対する教育指導や、将来の日本の医療を担う人材の育成に役立たせることを目的にしている。これを今後も継続したい。

第 2 に「リカレントセミナー」の見直しを行いたい。わが国の薬系大学において実施されている現在までの教育は、残念ながら、臨床現場の薬剤師の業務との繋がりを意識した形ではなされてこなかった。そのため、学生だけでなく、薬剤師も教員も大学で行われる基礎

薬学を含む薬学の専門科目の学修と臨床現場での業務との関係を理解できていない。したがって、薬剤師法第 25 条の 2 に定める「必要な薬学的知見に基づく指導」が十分にできる状況とはなっていない。そこで、リカレントセミナーを本来の意味の薬学部での教育の再教育と位置づけ、臨床現場に必要な知識、技能と関連させながら、「薬理学・薬物治療学」、「病態生化学」、「薬物動態学」、「製剤学」などを中心に学部教育の内容を学修する。その際、薬物の化学構造の示す内容の理解を基本とし、物理系薬学や生物系薬学との関係をしっかりと意識した内容のものとする必要がある。大学教員と共に薬剤師が大学で行われている教育と臨床現場で行われる業務がどのように関わっているかを理解することによって、実務実習が学部教育と本当の意味で繋がったものとなり、薬剤師と大学教員とがしっかりと連携が取れた形で、実務実習を含めた活動ができると思う。

また、若手薬剤師の育成のための活動を推進していく必要がある。そのために、最近若手の卒業生が中心となって開始した「症例検討会」を活かしたい。卒業生との緊密な関係は重要であり、本学がしっかりと同窓会組織を持っていることは、大きな強みとなる。大学と同窓会との意見交換の場をしっかりと持ちながら、症例検討会のような新規事業を充実し、「生涯研修認定薬剤師制度」（G07）のさらなる発展を図りたい。

「薬剤師実践塾」については、在宅医療を中心に、医療に携わる行政を含めた多職種連携を重視した薬剤師業務の展開を目指すものとしていく。これには、垂水区で先進的な活動を行っている特定非営利活動法人エナガの会に本学が大学として参加することで、多職種連携を卒前・卒後教育、地域連携教育に活かす場としたい。また、東灘区でも地域連携サテライトセンターを利用した多職種連携教育を学部生の教育、生涯研修支援事業および地域連携活動に活かせるようにしたい。幸い、甲南病院を中心に、本学、神戸大学、甲南大学、甲南女子大学、それに東灘区役所が連携して、地域の将来を担う人材育成事業が始められようとしている好機でもあり、それを活用したい。

これらのほかに、生涯研修支援事業としては「シン

ポジウム」があるが、これについては、今まで通り、その時々のトピックスとなる課題を取り上げて実施していきたい。

一方、新たに認証された「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)については、健康食品関連の学会、研究会および隣接する甲南女子大学に2018年4月に新設された医療栄養学部と連携しながら、エビデンスが十分でない健康食品を科学的知見に基づいて利用者に説明でき、健康サポートに貢献できる薬剤師を育成していきたい。そのため、学内に健康食品の有用性についてのエビデンスを得るための教育研究支援組織を新たに設置することを検討するとともに、実験系16研究室にも協力を呼び掛けたい。幸い、学内に

はビタミンD、K、カロテノイド、ポリフェノールの生理作用について研究を行っている教員がおり、これらの人材を活かすとともに、甲南女子大学医療栄養学部との共同研究における連携活動も推進したい。

さらに健康サポートに関係する化粧品や運動についても、化粧品企業や甲南女子大学看護リハビリテーション学部リハビリテーション学科の協力を得ながら研修に取り入れ、共同研究を進めていきたい。また、これらの活動と健康食品に関連する事業については、地域住民の健康サポート活動にも活かしていきたい。そのためには、エクステンションセンターと本学地域連携サテライトセンターとの密接な連携が必要であり、両組織のあり方も含めて検討していく必要がある。

(北河 修治)

7. おわりに

大学を取り巻く環境について若干の私見を述べる。

大学の置かれている状況は、最近、あらゆる面で厳しさを増しており、将来の生き残りを賭けた種々の方策が各大学で真剣に講じられている。このような施策の成果は2、3の公的第三者評価機関によって厳正な審査と評価がなされているが、最近、種々の評価項目の中で学外に向けた行動として、「社会への貢献を目指した活動がいかに展開されているか」ということが、きわめて重視されてきている。この点に関しては、これまで本学はいずれの評価機関からも常に高い評価結果を得てきた。

また一方では、2006（平成18）年からの薬学教育6年制を見据え、2004年5月と6月の国会審議において、それぞれ学校教育法（文部科学省）と薬剤師法（厚生労働省）の一部改正案が可決された。これに伴って、これらの法案の中に現行（当時）の4年制学部教育を履修してきた薬剤師に対して、各大学において継続教育や生涯研修の充実・改善を図ることを明記した、大学の生涯学習支援体制の確立が附帯

決議として盛り込まれた。これらの動向は極めて意義深く、我々を大いに勇気づけるものであったが、あれから10数年を経た現在でも、これらの附帯決議のもつ本質的な意義と重要性は何ら変わっていない。

本学の認証取得の経緯とその後の足跡はまさにこれらの国政方針と軌を一にするものであるが、今後も大学には旧来のように学部・大学院の教育・研究のみに留まるのではなく、社会人薬剤師も視野に含めた、斬新で抜本的な施策の具現化が強く求められるであろう。「国試に合格させれば事足り」といった、近視眼的な教育態勢に甘んじている大学や社会的ニーズに柔軟に即応できない大学は、いずれ淘汰されていくかもしれない中で、本学には生涯研修支援活動の意義と目標を十分に見定めつつ、今後も薬剤師の社会的役割の向上と職能の高度化推進に向けていささかの貢献を果たせるよう、なお一層の努力を重ねることを強く望みたい。これと共に次世代への着実なバトンタッチを見据えた、有能なスタッフと委員の発掘と育成も緊要な課題の一つであることも認識しておく必要があろう。

（松田 芳久）

神戸薬科大学エクステンションセンター
開設10周年記念誌

資料編

10th

薬剤師認定制度認証機構からの認証状



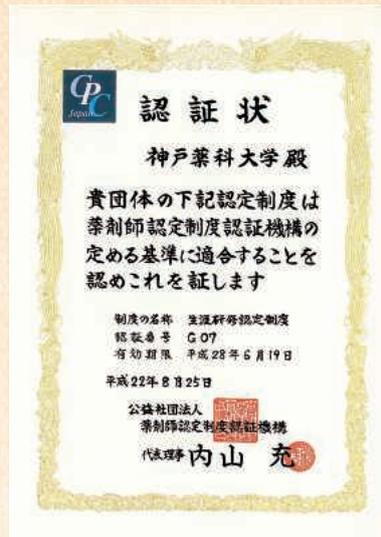
認証番号G07
認証番号P05

神戸薬科大学は「生涯研修認定制度」(G07)と「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)の2つの制度を認証されたプロバイダーです。

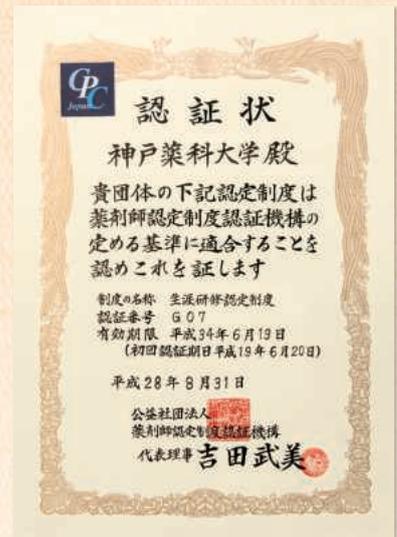
公益社団法人薬剤師認定制度認証機構(CPC)から2017(平成29)年12月15日付で「健康食品領域研修認定薬剤師制度」(P05)として新たに認証を取得しました。一つの研修機関において「生涯研修認定制度」(G)および「特定領域認定制度」(P)両方を認証されたプロバイダーは神戸薬科大学が最初です。



生涯研修認定制度
初回認定証



生涯研修認定制度
第1回更新認定証



生涯研修認定制度
第2回更新認定証



認定薬剤師証(本学発行)



健康食品領域研修認定薬剤師制度
初回認定証

生涯研修支援プログラム

エクステンションセンターでは1年間の生涯研修支援プログラムを掲載したリーフレットを作成し、配布しています。受講者が研修の年間計画を立てるにあたり、大いに活用されています。

神戸薬科大学 エクステンションセンター

平成30年度
神戸薬科大学
エクステンションセンター
生涯研修支援
プログラム

GUIDANCE FOR THE KOBE PHARMACEUTICAL UNIVERSITY CPD (Continuing Professional Development)

平成30年度 神戸薬科大学エクステンションセンター 生涯研修支援プログラム

開催日	時間	講義名	テーマ	単位数	受講料	会場	定員
4月 8日(日)	9:30~12:45	第64回リフレントセミナー	聴覚ケアにおいて薬剤師に求められる役割	2	2,000円	11号館3階 K1130	200
15日(日)	10:00~15:35	第4回経路別研修活動	薬剤師に求められるコミュニケーションスキル 薬師人としてのコミュニケーションを学ぶ。 実践エクササイズで「Motivational Interviewing(動機付け面接)」を身につける	3	3,000円	本館3階75号センター	40
5月 13日(日)	9:30~12:45	第65回リフレントセミナー	SOCによる検査後の情報(副作用)の早期発見の大切さ	2	2,000円	11号館4階 演習室	40
27日(日)	10:00~15:35			3			
6月 25日(日)	10:00~15:35	第44回卒業研修講座	「薬を学ぶ」薬師職に必要なスキル(読解力、精神、情報処理、がん)	3	9日授業で 10,000円	香島5号記念ホール 5号館4.5階	700
30日(日)	10:00~15:35			3			
10月10日(日)	13:00~17:00	第1回神戸薬科大学 エクステンションセンターの仕組み	これからの薬剤師と生涯研修 一生懸命の社会的役割の向上と職員の成長も考慮して	2	2,000円	香島5号記念ホール	200
17日(日)	13:00~17:00	第4回定例研修社会(A)	SOCによる処方情報(臨床現場での薬剤師研修年数20年以上の処方情報)	2	1,000円	本館3階75号センター	40
7月 8日(日)	10:00~15:35	第47回経路別研修活動	多職種連携と在宅医療における薬剤師の役割	3	3,000円	本館3階75号センター	100
22日(日)	10:00~15:35	第2回経路別研修活動(大塚口)	健康食品と薬師職	3	3,000円	本館3階75号センター	100
8月 11日(日)	13:00~17:00	第5回定例研修社会(B)	SOCによる処方情報(薬剤師研修年数20年以上の処方情報)	2	1,000円	本館3階75号センター	40
9月 30日(日)	10:00~15:35	第2回経路別研修活動(大塚口)	健康食品と生活 健康食品?	3	3,000円	本館3階75号センター	100
9日(日)	10:00~15:35	第2回経路別研修活動(大塚口)	健康食品と生活 健康食品?	3	3,000円	本館3階75号センター	100
30日(日)	9:30~12:45	第66回リフレントセミナー	SOCによる検査後の情報(副作用)の早期発見の大切さ	2	2,000円	11号館4階 演習室	40
10月 14日(日)	9:30~12:45	第7回リフレントセミナー	薬師職に必要なスキルを学ぶ(一)薬師業務(読解、判断、インテリジェンダー)	2	2,000円	11号館3階 K1130	200
27日(日)	10:00~15:35	第2回経路別研修活動(大塚口)	健康食品と生活 健康食品?	3	3,000円	本館3階75号センター	100
26日(日)	10:00~16:00	第7回定例研修活動(大塚口)	健康食品と生活 健康食品?	3	3,000円	本館3階75号センター	40
11月 11日(日)	13:00~17:00	第6回定例研修社会(A)	SOCによる処方情報(臨床現場での薬剤師研修年数20年以上の処方情報)	2	1,000円	本館3階75号センター	40
18日(日)	9:30~12:45	第8回リフレントセミナー	フィジカルアセスメントー基本スキルから臨床現場への応用までー	2	5,000円	11号館4階 演習室	40
1月 27日(日)	13:00~17:00	第7回定例研修社会(B)	SOCによる処方情報(薬剤師研修年数20年以上の処方情報)	2	1,000円	本館3階75号センター	40
2月 19日(日)	13:00~17:00	第4回経路別研修活動	薬師業務の更新ー薬剤師の処方管理ー	2	2,000円	11号館4階 演習室	50
17日(日)	10:00~16:00	第4回経路別研修活動	薬師業務の更新ー処方箋と薬後のモニタリングー	3	5,000円	11号館4階 演習室	20
3月 10日(日)	10:00~17:00	第5回経路別研修活動	在宅医療に必要なアセスメント	3	5,000円	11号館4階 演習室	30

●研修内容については、ホームページでご確認ください。
●研修場所については、変更になる場合もあります。ご了承ください。 ●受講料はすべて税別です。

神戸薬科大学
エクステンションセンター

平成25年度
神戸薬科大学
生涯研修支援プログラム

GUIDANCE FOR THE PHARMACEUTICAL UNIVERSITY CPD
(Continuing Professional Development)

神戸薬科大学
エクステンションセンター

平成26年度
神戸薬科大学
生涯研修支援プログラム

GUIDANCE FOR THE KOBE PHARMACEUTICAL UNIVERSITY CPD
(Continuing Professional Development)

神戸薬科大学
エクステンションセンター

平成27年度
神戸薬科大学
生涯研修支援プログラム

GUIDANCE FOR THE KOBE PHARMACEUTICAL UNIVERSITY CPD
(Continuing Professional Development)

神戸薬科大学
エクステンションセンター

平成28年度
神戸薬科大学
生涯研修支援プログラム

GUIDANCE FOR THE KOBE PHARMACEUTICAL UNIVERSITY CPD (Continuing Professional Development)

神戸薬科大学
エクステンションセンター

平成29年度
神戸薬科大学
生涯研修支援プログラム

GUIDANCE FOR THE KOBE PHARMACEUTICAL UNIVERSITY CPD (Continuing Professional Development)

卒後研修講座 (CPD)

最新の医療や医学を学べる場を提供するため、1975（昭和 50）年から開講しています。本学の卒後研修講座は全国屈指の伝統と実績、規模を誇り、最新の医学・薬学情報を総合的かつ体系的に修得できるように編成した、学術的色彩の濃いユニークな研修講座です。毎回メインテーマに基づく総論・各論と、薬剤師職能に関係する最近のトピックスで構成されています。講師陣は全国的視野に立って選定され、斯界の第一線で活躍されている研究者や臨床家に依頼し、受講者からは毎回高い評価を得ています。



2007（平成 19）年度



2012（平成 24）年度



2014（平成 26）年度 ホールに併設した別会場での受講風景

卒後研修関東地区講座

本学同窓会関東支部からの要望に応じて、2007（平成19）年度から8年間にわたり卒後研修関東地区講座を都内で開講しました。

第1回は薬学会館（渋谷）で、第2回以降はウィメンズ・ホール（同）で開催し、関東一円にわたる、他大学出身者を含む受講者が熱心に聴講しました。



2007（平成19）年度



2009（平成21）年度



2010（平成22）年

リカレントセミナー

「卒後研修講座」のアドバンスコースとして始めたセミナーで、より深く学びたいという声に応え、現場の実務に即した専門領域別・職域別に比較的少人数の受講者を対象としたセミナー形式の研修会を実施しています。各専門分野に特化したテーマを設定し、医師と薬剤師が病態の基礎や薬物治療について講義を行い、症例を交えたスモールグループディスカッションを実施しています。フィジカルアセスメントや、コーチングスキルを用いたコミュニケーションについての研修会も企画しています。



2011（平成23）年度



2014（平成26）年度



2017（平成29）年度

医療の高度化、急速な高齢化の進展に伴う医療環境の大きな変動により、医療職種間での連携の重要性が高まる中で、薬剤師も他職種と協働し、質が高く安心・安全な医療を提供することが求められています。他職種の技術を学ぶとともに、多職種の中で薬剤師としての専門性を活かした技術を発揮できるよう、どのように判断し、何ができるかを考える研修を実施しています。



2008（平成20）年度



2014（平成26）年度



2015（平成27）年度



2017（平成29）年度

シンポジウム

多くの薬剤師業務の中で直面している問題点にスポットをあて、最新的话题をテーマに、他職種を含む界の先駆的・指導的立場にある専門家を招いてさまざまな角度から意見交換を行い、相互理解を深めるとともに、今後の薬剤師業務の方向性やあるべき姿について多角的に議論します。



2009 (平成 21) 年



2016 (平成 28) 年



2017 (平成 29) 年

健康食品やサプリメントを消費者が有効かつ安心して利用するために、薬剤師が科学的根拠に基づいた適正な情報を提供できるよう、薬学・医学・栄養学・食品学の科学的知識をもとに、健康食品の一次機能（栄養機能）、二次機能（感覚機能）、三次機能（体調調節機能）に関する知識を修得できる研修プログラムとして、科学的な視点で評価・判断できる薬剤師の育成を目指し、座学と健康食品領域に関連する実習、実践・実技等の内容を含む薬剤師健康食品実践塾を実施します。



2010（平成22）年度



2015（平成27）年度



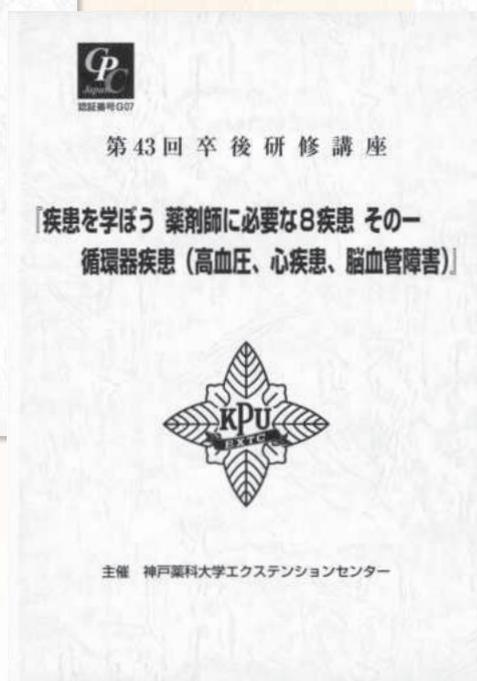
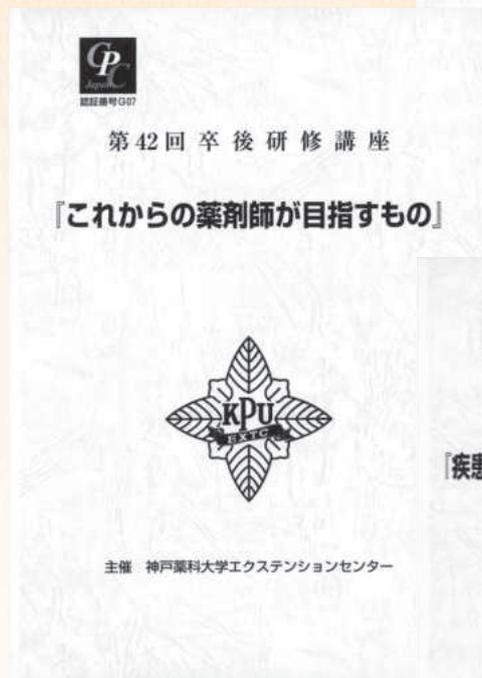
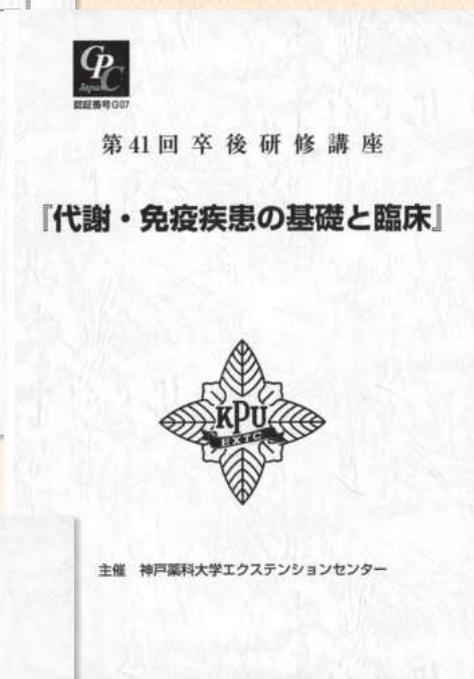
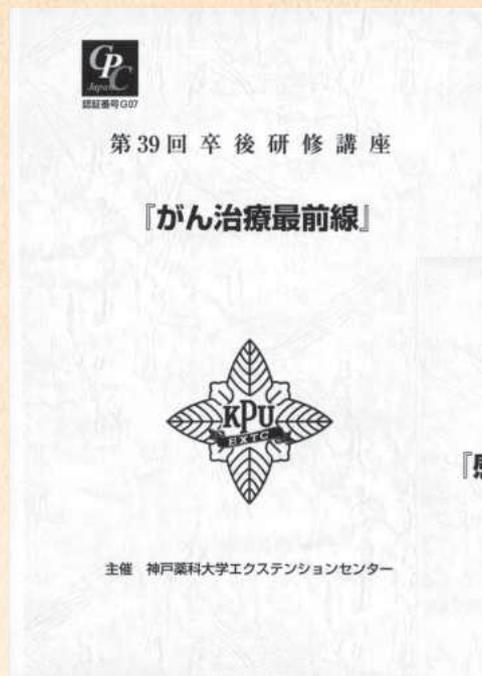
2017（平成29）年度

卒後研修講座テキスト

1975 (昭和50) 年から始まった「卒後研修講座 (CPD)」、当初の名称は「神戸女子薬大卒後教育 (CEP)」でした。

2018年度で第44回を迎える、本学で最も大規模な研修会です。

- 第 39 回 がん治療最前線 (2013 年)
- 第 40 回 感染症をどう抑えこむか—予防と治療— (2014 年)
- 第 41 回 代謝・免疫疾患の基礎と臨床 (2015 年)
- 第 42 回 これからの薬剤師が目指すもの (2016 年)
- 第 43 回 疾患を学ぼう 薬剤師に必要な 8 疾患 その一 循環器疾患 (高血圧、心疾患、脳血管障害) (2017 年)



「調剤と情報」

新任薬剤師や中堅薬剤師を対象とした、実践を伴う少人数制の参加型セミナー「神戸薬科大学薬剤師実践塾」の実績と成果を「調剤と情報」誌(じほう)に13回にわたって連載しました。

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール の連載にあたって

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール

(第1回)

連載にあたって

神戸薬科大学 エクステンションセンター 松田 芳久, 長嶺 幸子
 (副)アインフォーマーズ 医薬事業部 土居 由有子
 情報管理課 西田 英之

はじめに

日進月歩で進展する最近の医療現場において、薬剤師を取り巻く状況は大きく変動している。平成18年度から施行された6年制薬学教育の目標は、ますます高度化・多様化しつつある薬剤師業務の水準と役割に追随し、これまで以上の学識と専門的技術を修めた医療人を養成することによって、医療の質向上における薬剤師の積極的な役割の向上に貢献することにある。このため、日本薬学会によって策定された薬学教育モデル・コアカリキュラムおよび医師教育モデル・コアカリキュラムにおいては、いずれの分野においても「知識」、「技能」、「態度」の3領域に分類された、多数のエッセンス(教育項目)が明確な目標とともに編纂されており、従来の教育方針と内容が根本的に改革されている。

一方、現職の薬剤師にとっても日頃から進まない自己研鑽を積み重ねることによって職能の向上を図ることが、他の医療スタッフや社会からの期待に応えるための必須の課題であるが、このような事態への対応は、多忙な日常業務のなかでは多大の努力で達成できるものではない。したがって、これを補完するために薬学教育や大学などによって薬剤師の生涯学習支援を目的とした各種の事業活動が全国的に活発化・展開されており、効率的な研修に大きく貢献している。

このような状況のなかで、本学では早くから卒業教育の重要性と意義を認識し、種々の研修プログラムを提供してきた。これらの中で最近の保険薬局における業務内容の急速な変化に対応できるように、平成16年に全国の薬系大学の中で初めて、新任薬剤師や中堅薬剤師を対象とした、実践を伴う少人数制の参加型セミナー「神戸薬科大学薬剤師実践塾」を開講したが、幸いにも受講者から多大の好評を得て、これまでに10回の開講実績を重ね、今日に至っている。ちなみに、上記の名称は、受講者に密着しただけなく実践面からも最新の情報と技能を修得してもらうという願いから命名したものである。

本講座ではこれまでの実績と成果を踏まえて、毎月号以降6回にわたって各論を展開する予定であるが、それらに先立って、今回は本誌の読者とこれまでの成果について紹介する。

1. これまでの経緯

薬剤師国家試験受験資格に關する薬学教育の年限延長問題の議論が平成6年頃から急速に高まってきたが、これらの流れの中で日本病院薬剤師会と日本薬剤師会から実務実習の強化と充実が重要な課題としてたびたび提起され、1ヵ月間の本格的な専攻教育が大学側に求められていた。このような状況を踏まえて、本学では平成7年に学長に諮問により医療薬学検討委員会を設置され、医療薬学教育の目指すべき方向を答申することになった。議論の過程でまず最初に浮上したのが、これまでの薬学教育において絶対的に欠如しているものとして挙げられていた「臨床感」と「生命倫理」にどのように対応するかであった。議論の進展につれて、病院薬剤師に準じた環境と設備をもつ施設が学内に設置され、臨床現場と同じような状況と雰囲気のもとで専攻実習を行えば、学生に倫理感を醸成しつづけるにあたって適切な教育効果は期待できることは間違いないとの判断に達し、これに基づいて学長にプレファーマシー・トレーニングのための新しい教育施設としてモデル薬

調剤と情報 2009.10 (vol.15 No.11) 81 (1308)

「調剤と情報」 2009 (平成 21) 年 10 月 (vol.15 No.11)

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール

～ミスから学ぶ調剤実践方法～

見落とされた処方せんの記載ミス

神戸薬科大学実践調剤課(副)アインフォーマーズ医薬事業部 土居 由有子
 神戸薬科大学発 長嶺 幸子

2回目の今回のテーマは、処方せんの記載ミスとそのまますま調剤してしまい、投薬時に患者に指摘を受けて「ヒヤリ・ハット」が判明し、薬液担当を介して解決をした事例を紹介し、検討します。ここでは、実際の調剤の流れの中で、薬剤師は何を考えた「ヒヤリ・ハット」に至ったかをまず、読んでいただいで、次に、多方向からの分析を行い、解決する方法を提示したいと思います。

薬剤師が患者に説明をしている投薬カウンター

「今日は、お薬が変わっているの聞いていますか?」
 「えっ! 変わったの? 聞いていないけど」
 「朝ごはんの前に1錠飲むように変わっています」
 「あれ、朝飲むだけ? 1日3回飲む薬は変わって聞いていないけど変わるの?……」
 「あ! 少々お待ち下さい。先生に聞いてみますので一層おかけになってお待ちいただいでよろしいでしょうか?」
 「心配だからきてみてよ……」

実はこのとき薬剤師は「しまった!」と思っていました。そして、「やっぱり疑義をかければよかった!」とも思っていました。表情は強張らずにでも、内心のひやひやでした。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようになっていたのでしょうか?

【背景】
 64歳 男性
 3年前より血圧が高いと医師から指摘を受け、食事療法を受けて2年間投薬なしで維持していたが、1年前よりバインズの投薬を受けている。血圧も高く、降圧剤も服用している。

【処方処方】
 Pp1 ベイソクD020mg 1錠 1日1回服用
 Pp2 フォルバタム20mg 1錠 1日1回服用
 Pp3 ベイソクD005mg 3錠 1日3回服用
 Pp4 フォルバタム20mg 1錠 1日1回服用
 Pp5 フォルバタム20mg 1錠 1日1回服用
 Pp6 フォルバタム20mg 1錠 1日1回服用
 以下省略

なぜ、このようなヒヤリ・ハットを起こしてしまったのか? 調剤の流れの再検討をしましょう。

調剤と情報 2009.11 (vol.15 No.12) 89 (1447)

「調剤と情報」 2009 (平成 21) 年 11 月 (vol.15 No.12)

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール

～ミスから学ぶ調剤実践方法～

一包化調剤のヒヤリ・ハット①

神戸薬科大学実践調剤課(副)アインフォーマーズ医薬事業部 土居 由有子
 調剤科 長嶺 幸子

3回目の今回から、一包化調剤による「ヒヤリ・ハット」事例を取り上げます。前回同様、実際の調剤の流れのなかで、薬剤師は何を考えた「ヒヤリ・ハット」に至ったかを考え、解決する方法を提示したいと思います。

薬剤師が患者に説明をしている投薬カウンター

「今日は前回と同じお薬になっています。お薬も飲みやすいように1錠ずつ作っています」
 「あ、そう。1錠ずつは飲みやすいからね」
 「はい、朝はこのような1錠のお薬を飲むようになっています。白いお薬が3錠、薄いピンクが2錠、カプセルが1錠になっています」
 「朝は5錠だったと思うけど……。変わったの? これは、夜ごはんの後に飲んでたと思うけど、お薬と量は変わっているの?」
 「お薬は3錠、夕飯後は4錠になっています」
 「お薬は3錠、夜は5錠なんだけど、先生は何か違ってなかったわよ」
 「あ! もう一度確認しますので少々お待ちください」
 「しっかしってよ……」

実はこのとき薬剤師は「しまった!」と思い、ドキドキでした。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようになっていたのでしょうか?

【背景】
 65歳 女性
 1年前に軽い脳こうそくで入院。後遺症もなく退院。それ以来、同じ処方内容の薬を飲んでいる。症状も落ち着いているが少々もの忘れが激しくなってきた。振り暮らし。

以前はPTPヒートシートで薬を覆っていたが、飲み忘れがあったため3ヵ月前より一包化調剤を行っている。一包化になってからコンプライアンスも良好で朝、昼、夕の薬の管理はしっかりと行っている。

【処方処方】
 Pp1 セロクワン錠20mg 3錠 夜食後、
 セラバタム錠20mg 3錠 夜食後、
 1日1回服用
 Pp2 バイソクD020mg 1錠 1日1回服用
 Pp3 バイソクD020mg 1錠 1日1回服用
 Pp4 ロキソニン錠60mg 3錠 28日分
 以下省略

調剤と情報 2009.12 (vol.15 No.13) 97 (1578)

「調剤と情報」 2009 (平成 21) 年 12 月 (vol.15 No.13)

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール

～ミスから学ぶ調剤実践方法～

一包化調剤のヒヤリ・ハット②

神戸薬科大学実践調剤課(副)アインフォーマーズ医薬事業部 土居 由有子
 調剤科 長嶺 幸子

前回に引き続き、一包化調剤による「ヒヤリ・ハット」事例を取り上げます。まず、事例をおさらいしましょう。

薬剤師が患者に説明をしている投薬カウンター

「今日は前回と同じお薬になっています。お薬も飲みやすいように1錠ずつ作っています」
 「あ、そう。1錠ずつは飲みやすいからね」
 「はい、朝はこのような1錠のお薬を飲むようになっています。白いお薬が3錠、薄いピンクが2錠、カプセルが1錠になっています」
 「朝は5錠だったと思うけど……。変わったの? これは、夜ごはんの後に飲んでたと思うけど、お薬と量は変わっているの?」
 「お薬は3錠、夕飯後は4錠になっています」
 「お薬は3錠、夜は5錠なんだけど、先生は何か違ってなかったわよ」
 「あ! もう一度確認しますので少々お待ちください」
 「しっかしってよ……」

実はこのとき薬剤師は「しまった!」と思い、ドキドキでした。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようになっていたのでしょうか?

【背景】
 65歳 女性
 1年前に軽い脳梗塞で入院。後遺症もなく退院。それ以来、同じ処方内容の薬を飲んでいる。症状も落ち着いているが少々もの忘れが激しくなってきた。振り暮らし。

以前はPTPヒートシートで薬を覆っていたが、飲み忘れがあったため3ヵ月前より一包化調剤を行っている。一包化になってからコンプライアンスも良好で朝、昼、夕の薬の管理はしっかりと行っている。

【処方処方】
 Pp1 セロクワン錠20mg 3錠 夜食後、
 セラバタム錠20mg 3錠 夜食後、
 1日1回服用
 Pp2 バイソクD020mg 1錠 1日1回服用
 Pp3 バイソクD020mg 1錠 1日1回服用
 Pp4 ロキソニン錠60mg 3錠 28日分
 以下省略

調剤と情報 2010.1 (Vol.16 No.1) 79

「調剤と情報」 2010 (平成 22) 年 1 月 (vol.16 No.1)

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール
～ミスから学ぶ調剤実践方法～
一包化調剤のヒヤリ・ハット③

神戸薬科大学薬師実践講座（アインフォーメーション臨床薬学専攻） 土居 由希子
同席講師 長橋 幸子

今回は、一包化調剤の最終監査について取り上げます。
まず、事例をおさらいしましょう。

薬剤師が患者に説明をしている投薬カウンター

「今日は前日と同じお薬になっています。お薬も飲みやすいように1回ずつ作っています」
「あ、そう。1回ずつは飲みやすいからね」
「はい、朝はこのように6粒のお薬を飲むようになっていきます。白いお薬が3粒、薄いピンクが2粒、カプセルが1粒になっています」
「朝は5錠だったと思うけど、変わったの？ これは、夜ごはんの後に飲むんだと思うけど、お薬と夜は変わっているの？」
「お薬は3粒、夕食後は4粒になっています」
「お薬は3粒、夜は5粒なんだけど、先生は何も変わってなかったわよ」
「あ！ もう一度確認しますのぞ少々お待ちください」
「しっかりしてよー」

実はこのとき薬剤師は「間違っただけ」と思い、ドキドキでした。
それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようにになっていたのでしょうか？

【背景】
65歳 女性
1年前に軽い脳梗塞で入院。後遺症もなく退院。それ以来、同じ処方内容の薬を飲んでいる。
症状も落ち着いているが少々もの忘れが顕著になってきた。熱が落ちた。
以前はPPI（ヒートシール）で薬を覆っていたが、飲み忘れがあったため3ヶ月前より一包化調剤を行っている。
一包化になってからコンプライアンスも良好で、毎夕の薬の管理はしっかりと行っている。

Rpt1	セロクオール錠 20mg	2粒	夜更かし、
	アピス錠 0.5mg	3粒	【一包化調剤】
	オキサリタニド錠 20mg	3粒	
	1日3回毎食後	3粒	
Rpt2	パイアスピリン錠 100mg	1粒	
	1日1回毎食後	20日分	
Rpt3	メロキシカム錠 10mg	1粒	
	1日1回夕食後	20日分	
Rpt4	オキサリタニド錠 20mg	2粒	
	1日2回朝・夕食後	20日分	
	以下併用		

調剤と情報 2010.2 (Vol.16 No.2) 91 (2/11)

「調剤と情報」 2010（平成 22）年 2 月（vol.16 No.2）

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール
～ミスから学ぶ調剤実践方法～
散薬調剤のヒヤリ・ハット①

神戸薬科大学薬師実践講座（アインフォーメーション臨床薬学専攻） 土居 由希子
同席講師 長橋 幸子

今回は、散薬調剤によるヒヤリ・ハット事例を取り上げます。
実際の調剤の流れの中で、薬剤師が何を考えていたためにヒヤリ・ハットに至ったのかを考え、解決する方法を提示したいと思います。次の事例から考えていきましょう。

薬剤師が患者に説明をしている投薬カウンター

「今日は久しぶりですね。前に調剤がひどいときに一度出たお薬が出ています」
「ピンク色の薬は抗生剤なの？」
「はい、1日3回の薬は、抗生剤です。1日2回の薬は、鎮痛剤です」
「オオドールは何度も飲ませているわ。でも、今日のオオドールはいづれもより多いみたいだけれど、本当にオオドールなの？」
「はい、そうです」
「うちの子、もう少しで2歳だけと粉をこんなにたくさん飲めないわもー」
「あ！ 2歳ですよ。もう一度確認しますのぞ少々お待ちください」
「しっかりしてよー」

実はこのとき薬剤師は「間違っただけかもしれない！」とっていました。
先に親戚聚会をしていればよかったとっていました。そして、「お母さんの記憶が正しい」とも思っていました。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようにになっていたのでしょうか？

【背景】
1歳10か月 女の子 体重12kg
昨夜から咳がひどくなり、朝、受診。喉が赤くなって、気管支炎を何度か経験しており、当薬局から薬が出ていた。散薬は苦手なようで、お母さんが苦労して飲ませているため、今回、お母さんは薬の量にも神経質になり注意をしていた。

Rpt1	フロキソナド小児用散 100mg	1.5g	1日3回毎食後
	5日		
Rpt2	オオドール（トリスチロ）ア20%	1.0g	1日2回朝・食後
	7日		
	以下併用		

調剤と情報 2010.3 (Vol.16 No.3) 89 (2/3)

「調剤と情報」 2010（平成 22）年 3 月（vol.16 No.3）

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール
～ミスから学ぶ調剤実践方法～
散薬調剤のヒヤリ・ハット②

神戸薬科大学薬師実践講座（アインフォーメーション臨床薬学専攻） 土居 由希子
同席講師 長橋 幸子

今回は、散薬調剤による「ヒヤリ・ハット」事例を取り上げます。
前回同様、実際の調剤の流れのなかで薬剤師は何を考えた。「ヒヤリ・ハット」に至ったか考え、解決する方法を提示したいと思います。

薬剤師が患者に説明をしている投薬カウンター

「今日は久しぶりですね。前に調剤がひどいときに一度出たお薬が出ています」
「ピンク色の薬は抗生剤なの？」
「はい、1日3回の薬は、抗生剤です。1日2回の薬は、鎮痛剤です」
「オオドールは何度も飲ませているわ。でも、今日のオオドールはいづれもより多いみたいだけれど、本当にオオドールなの？」
「はい、そうです」
「うちの子、もう少しで2歳だけと粉をこんなにたくさん飲めないわもー」
「あ！ 2歳ですよ。もう一度確認しますのぞ少々お待ちください」
「しっかりしてよー」

実はこのとき薬剤師は「間違っただけかもしれない！」とっていました。
先に親戚聚会をしていればよかったとっていました。そして、「お母さんの記憶が正しい」とも思っていました。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようにになっていたのでしょうか？

【背景】
1歳10か月 女の子 体重12kg
昨夜から咳がひどくなり、朝、受診。喉が赤くなって、気管支炎を何度か経験しており、当薬局から薬が出ていた。散薬は苦手なようで、お母さんが苦労して飲ませているため、今回、お母さんは薬の量にも神経質になり注意をしていた。

Rpt1	フロキソナド小児用散 100mg	1.5g	1日3回毎食後
	5日		
Rpt2	オオドール（トリスチロ）ア20%	1.0g	1日2回朝・食後
	7日		
	以下併用		

それでは、前回は「処方照合」まで確認しましたので、いよいよ「調剤」について解説していきます。

調剤と情報 2010.4 (Vol.16 No.4) 95 (4/5)

「調剤と情報」 2010（平成 22）年 4 月（vol.16 No.4）

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール
～ミスから学ぶ調剤実践方法～
散薬調剤のヒヤリ・ハット③

神戸薬科大学薬師実践講座（アインフォーメーション臨床薬学専攻） 土居 由希子
同席講師 長橋 幸子

今回は、散薬調剤による「ヒヤリ・ハット」事例を取り上げます。
前回同様、実際の調剤の流れのなかで薬剤師は何を考えた。この「ヒヤリ・ハット」に至ったか考え、解決する方法を提示したいと思います。

薬剤師が患者に説明をしている投薬カウンター

「今日は久しぶりですね。前に調剤がひどいときに一度出たお薬が出ています」
「ピンク色の薬は抗生剤なの？」
「はい、1日3回の薬は、抗生剤です。1日2回の薬は、鎮痛剤です」
「オオドールは何度も飲ませているわ。でも、今日のオオドールはいづれもより多いみたいだけれど、本当にオオドールなの？」
「はい、そうです」
「うちの子、もう少しで2歳だけと粉をこんなにたくさん飲めないわもー」
「あ！ 2歳ですよ。もう一度確認しますのぞ少々お待ちください」
「しっかりしてよー」

実はこのとき薬剤師は「間違っただけかもしれない！」とっていました。
先に親戚聚会をしていればよかったとっていました。そして、「お母さんの記憶が正しい」とも思っていました。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようにになっていたのでしょうか？

【背景】
1歳10か月 女の子 体重12kg
昨夜から咳がひどくなり、朝、受診。喉が赤くなって、気管支炎を何度か経験しており、当薬局から薬が出ていた。散薬は苦手なようで、お母さんが苦労して飲ませているため、今回、お母さんは薬の量にも神経質になり注意をしていた。

Rpt1	フロキソナド小児用散 100mg	1.5g	1日3回毎食後
	5日		
Rpt2	オオドール（トリスチロ）ア20%	1.0g	1日2回朝・食後
	7日		
	以下併用		

調剤と情報 2010.5 (Vol.16 No.5) 103 (2/2)

「調剤と情報」 2010（平成 22）年 5 月（vol.16 No.5）

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール
～ミスから学ぶ調剤実践方法～
内用液剤のヒヤリ・ハット①

神戸薬科大学客員講師(アインフォーマシーズ医薬事業部) 土原 由有子
同室教授 長橋 幸子

今回のテーマは、内用液剤(シロップ)による「ヒヤリ・ハット」事例を取り上げます。前回は、実際の調剤の流れのなかで薬剤師は何を考えたか、「ヒヤリ・ハット」に至ったかを考え、解決する方法を提示したいと思います。

薬剤師が患者に説明している投薬カウンター
「今日はシロップが出ています。月曜日に来たときと同じお薬です」
「先生からも聞いています」
「カップに印をつけていますが、1回4mLです」
「えっ?」この量は5mLずつ飲ませていたけど、違うお薬なの?」
「あ! もう一度確認しますので少々お待ちください」
「しっかりしてよ!」

実はこのとき薬剤師は「しまった!」と思っていました。そして、「もっとよく見ればよかった」とも思っていました。表情は動揺せずに、でも、内心のやややでした。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようにになっていたのでしょうか?

【背景】
4歳 女の子 体重15kg
前病、熱があり、喉が赤く、鼻水、たんが絡んでいた。いつも通っている小児科を受診し、抗生物質、シロップ、解熱剤の処方が処方された。3日後の今日は、熱も下がり、前回と同じシロップのみ処方されていた。

【調剤の処方】 抗生物質とシロップ、外用剤処方	【今後の処方】 抗生物質とシロップ 8.5mL ペリアクワンシロップ0.04% 4mL 1日3回毎食後 4日分
----------------------------	--

以下自由

調剤と情報 2010.8 (Vol.16 No.8) 107 (104頁)

「調剤と情報」 2010 (平成 22) 年 8 月 (vol.16 No.8)

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール
～ミスから学ぶ調剤実践方法～
内用液剤のヒヤリ・ハット②

神戸薬科大学客員講師(アインフォーマシーズ医薬事業部) 土原 由有子
同室教授 長橋 幸子

今回のテーマは、前回は引き続き内用液剤(シロップ)による「ヒヤリ・ハット」事例を取り上げます。前回は、実際の調剤の流れのなかで薬剤師は何を考えたか、「ヒヤリ・ハット」に至ったかを考え、解決する方法を提示したいと思います。

薬剤師が患者に説明している投薬カウンター
「今日はシロップが出ています。月曜日に来たときと同じお薬です」
「先生からも聞いています」
「カップに印をつけていますが、1回4mLです」
「えっ?」この量は5mLずつ飲ませていたけど、違うお薬なの?」
「あ! もう一度確認しますので少々お待ちください」
「しっかりしてよ!」

実はこのとき薬剤師は「しまった!」と思っていました。そして、「もっとよく見ればよかった」とも思っていました。表情は動揺せずに、でも、内心のやややでした。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようにになっていたのでしょうか?

【背景】
4歳 女の子 体重15kg
前病、熱があり、喉が赤く、鼻水、たんが絡んでいた。いつも通っている小児科を受診し、抗生物質、シロップ、解熱剤の処方が処方された。3日後の今日は、熱も下がり、前回と同じシロップのみ処方されていた。

【調剤の処方】 抗生物質とシロップ、外用剤処方	【今後の処方】 抗生物質とシロップ 8.5mL ペリアクワンシロップ0.04% 4mL 1日3回毎食後 4日分
----------------------------	--

以下自由

調剤と情報 2010.9 (Vol.16 No.10) 103 (131頁)

「調剤と情報」 2010 (平成 22) 年 9 月 (vol.16 No.10)

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール
～ミスから学ぶ調剤実践方法～
内用液剤のヒヤリ・ハット③

神戸薬科大学客員講師(アインフォーマシーズ医薬事業部) 土原 由有子
同室教授 長橋 幸子

今回も、内用液剤による「ヒヤリ・ハット」事例を取り上げます。前回は、実際の調剤の流れのなかで薬剤師は何を考えたか、「ヒヤリ・ハット」に至ったかを考え、解決する方法を提示したいと思います。

薬剤師が患者に説明している投薬カウンター
「今日はシロップが出ています。月曜日に来たときと同じお薬です」
「先生からも聞いています」
「カップに印をつけていますが、1回4mLです」
「えっ?」この量は5mLずつ飲ませていたけど、違うお薬なの?」
「あ! もう一度確認しますので少々お待ちください」
「しっかりしてよ!」

実はこのとき薬剤師は「しまった!」と思っていました。そして、「もっとよく見ればよかった」とも思っていました。表情は動揺せずに、でも、内心のやややでした。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようにになっていたのでしょうか?

【背景】
4歳 女の子 体重15kg
前病、熱があり、喉が赤く、鼻水、たんが絡んでいた。いつも通っている小児科を受診し、抗生物質、シロップ、解熱剤の処方が処方された。3日後の今日は、熱も下がり、前回と同じシロップのみ処方されていた。

【調剤の処方】 抗生物質とシロップ、外用剤処方	【今後の処方】 抗生物質とシロップ 8.5mL ペリアクワンシロップ0.04% 4mL 1日3回毎食後 4日分
----------------------------	--

以下自由

調剤と情報 2010.10 (Vol.16 No.11) 85 (143頁)

「調剤と情報」 2010 (平成 22) 年 10 月 (vol.16 No.11)

神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール
～ミスから学ぶ調剤実践方法～
軟膏剤のヒヤリ・ハット①

神戸薬科大学客員講師(アインフォーマシーズ医薬事業部) 土原 由有子
同室教授 長橋 幸子

今回は、軟膏剤の混入の「ヒヤリ・ハット」を取り上げます。実際の調剤の流れのなかで、薬剤師は何を考えたか「ヒヤリ・ハット」に至ったかを考え、解決する方法を提示したいと思います。

薬剤師が患者に説明している投薬カウンター
「お子さんのお薬ですよ。今日の軟膏は3種類出ています。チューブのお薬が追加になりました」
「先生からも聞いています」
「どちらとも同じ30gの容器に入っています。こちらはいつも使う顔と手の薬です」
「ふたを開けた容器をじっと見てみる?」
「こちらは、かゆいとき体に塗る薬です」
「顔の薬と違うような気が…。前は、体に塗る薬がこっぴどくって思っただけ…。」
「あ! 少しお待ちください。もう一度確認します」
「しっかりしてよ!」

実はこのとき薬剤師は「しまった!」と思っていました。そして、「もっとよく見ればよかった」とも思っていました。表情は動揺せずに、でも、内心のやややでした。それでは、このときの処方内容と患者の背景はどのようにになっていたのでしょうか?

【背景】
10歳 小児、皮膚科の外用剤
小さいときから、アトピー性皮膚炎で通院し、ここ1-2年は内服薬を飲まず、軟膏剤だけでかゆみの状態は治まっていた。今年の夏休で汗をかき、かゆみがひどくなり、一層かゆくなった。少し痒いのでリンデロンVG軟膏が追加になった。

【調剤の処方】 抗生物質とシロップ、外用剤処方	【今後の処方】 抗生物質とシロップ 8.5mL ペリアクワンシロップ0.04% 4mL 1日3回毎食後 4日分
----------------------------	--

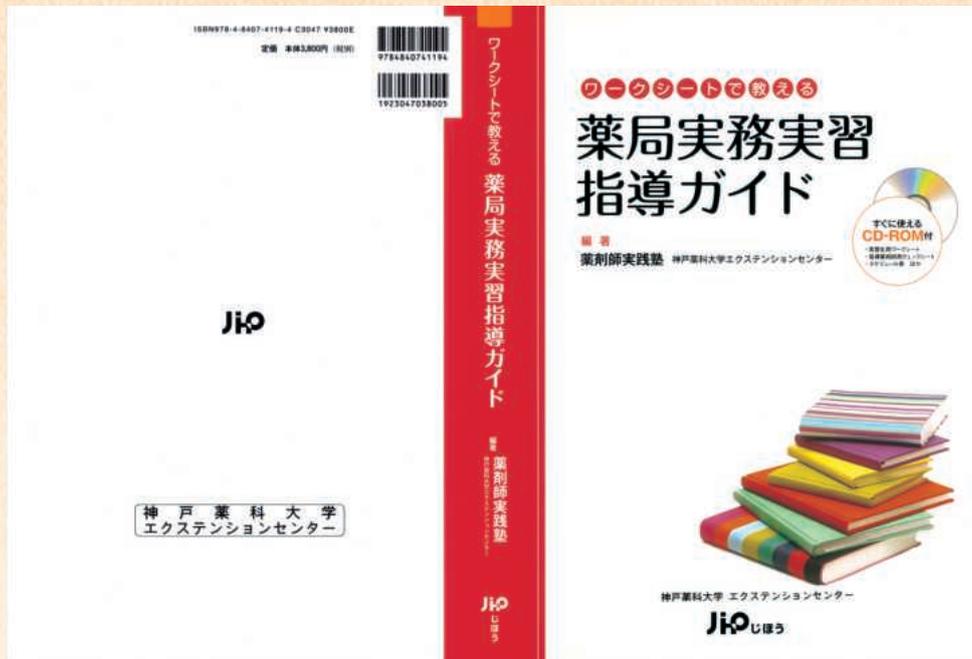
以下自由

調剤と情報 2010.11 (Vol.16 No.12) 87 (155頁)

「調剤と情報」 2010 (平成 22) 年 11 月 (vol.16 No.12)

『薬局実務実習指導ガイド』

本書は、薬学教育6年制で長期実務実習が始まり、薬局業務と実務実習モデル・コアカリキュラムにおける方略(LS)との関連性を基に編集した、学生の指導に活用できる薬剤師向けの指導書です。エクステンションセンターで中堅薬剤師を対象に開催した「薬剤師実践塾」において得たノウハウをもとに作成しました。



『薬局実務実習指導ガイド』 初版 2010（平成22）年7月31日発行



『薬局実務実習指導ガイド』 第2版 2013（平成25）年7月31日発行

「健康ガイドブック」

薬剤師会のイベントや本学開催の公開市民講座、またオープンキャンパス、入学式等で配布し、大変好評を得ています。

2009（平成 21）年に初版を発刊後、2017 年度には 90 ページに及ぶ改訂版第 2 刷を発行しました。



「健康ガイドブック」
— 日々の健康増進と
活動的な人生をめざして —
2009（平成 21）年 4 月 1 日発行



「健康ガイドブック」
— 日々の健康増進と
活動的な人生をめざして —
2009（平成 21）年 10 月 1 日発行



「健康ガイドブック」
— 毎日の健康管理と
健康長寿への豆知識 —
2017（平成 29）年 4 月 1 日発行

「薬事日報」・「教育學術新聞」

エクステンションセンターが取り組んでいる研修会や生涯研修事業について「薬事日報」及び「教育學術新聞」に掲載いただき、学外への発信を行っています。

神戸薬科大学の生涯教育(中級教育課程、薬剤師教育)事業 CPGが生涯研修認定制度を認証

西日本の大学で初の生涯研修提供機関に

大学と同窓会が共同歩調

神戸薬科大学は、生涯教育(中級教育課程、薬剤師教育)事業の推進を図るため、生涯教育推進委員会(CPG)を組織し、生涯研修認定制度を認証しました。これは、西日本の大学で初の取り組みです。

CPGは、大学と同窓会が共同歩調で活動し、生涯教育の推進を図ります。同窓会も積極的に参加し、生涯教育の推進に貢献しています。

文科省特色G1の選定理由で推奨

CPGの活動は、文科省特色G1の選定理由で推奨されています。これは、CPGの活動が、生涯教育の推進に大きく貢献しているためです。

健康指導薬剤師証を交付

神戸薬科大学は、健康指導薬剤師証を交付しました。これは、健康指導薬剤師の養成を図るためです。

健康指導薬剤師証は、健康指導薬剤師の養成を図るための資格です。神戸薬科大学は、健康指導薬剤師の養成に力を入れています。

「薬事日報」 第10750号(3)
2009(平成21)年10月28日発行

「薬事日報」 第10401号(5)
2007(平成19)年7月9日発行

バイタルサインチェック モデル使って講義実践

神戸薬科大学は、バイタルサインチェックの講義実践を行いました。これは、バイタルサインチェックの重要性を伝えるためです。

バイタルサインチェックは、バイタルサインチェックの重要性を伝えるための講義実践です。神戸薬科大学は、バイタルサインチェックの講義実践に力を入れています。

「薬事日報」 第10771号(3)
2009(平成21)年
12月18日発行

全国屈指の業績と相俟って守るべき

神戸薬科大学エクステンションセンター

神戸薬科大学エクステンションセンターは、全国屈指の業績と相俟って守るべきです。これは、神戸薬科大学エクステンションセンターの重要性を伝えるためです。

神戸薬科大学エクステンションセンターは、全国屈指の業績と相俟って守るべきです。これは、神戸薬科大学エクステンションセンターの重要性を伝えるためです。

「薬事日報」 第11453号(6)
2014(平成26)年7月23日発行

薬剤師のスキルアップと生涯学習

薬剤師生涯研修のあり方、今後への期待

望まれる生涯学習の義務化

質向上へ新たな取り組みも

神戸薬科大学は、薬剤師のスキルアップと生涯学習の推進を図ります。これは、薬剤師のスキルアップと生涯学習の重要性を伝えるためです。

神戸薬科大学は、薬剤師のスキルアップと生涯学習の推進を図ります。これは、薬剤師のスキルアップと生涯学習の重要性を伝えるためです。

神戸薬科大学は、薬剤師のスキルアップと生涯学習の推進を図ります。これは、薬剤師のスキルアップと生涯学習の重要性を伝えるためです。

「薬事日報」 第11453号(3) 2014(平成26)年7月23日発行

薬学生・薬剤師向けの情報誌です。海外の薬局情報や薬学生対象の行事等が掲載され、本学の取組む研修等についても紹介しています。

神戸薬科大学が「第2回神戸薬科大学シンポジウム」を開催

神戸薬科大学は「生涯研修プロバイダー」として、薬剤師に対し卒業教育を行っている。今回は、「薬剤師はバイタルサインを薬物治療にどのように活かすか」というテーマでシンポジウムを行った。バイタルサイン(呼吸、脈拍、血圧、体温など)については、現在、薬剤師の中で注目されているテーマとあって、シンポジウムは500人余りの参加者があった。

シンポジウムに先立って、午前の部では、神戸薬科大学教授の江本憲昭氏がバイタルサインシミュレーターやポランディアを用いて、バイタルサインチェックの手法を実演した。

基調講演の中で、(社)日本病院薬剤師会会長の堀内龍也氏は、「薬剤師は患者に触ってはいけない」という誤った考えが払拭されつつある」と述べたうえで、薬剤師がフィジカルアセスメント(身体所見)を行う効果として、①薬剤師が患者の状態を確認するスキルを持つことで副作用の発見が的確に早くなる②フィジカルアセスメントで得る患者情報は、他職種との共通言語になり、チーム医療の質の向上につながる③薬剤師による臨床知識のさらなる修得の必要性を実感できる、などを挙げた。

シンポジウムの講演の中で、東北薬科大学教授の大野勲氏は、「バイタルサインの把握は、すべての医療従事者にとって必要な手法」と指摘しつつ、「薬剤師は医薬品の専門家としての立場からバイタルサインを活用し、治療後の副作用を把握することで、処方提案ができるのではないかと提言した。

亀田メディカルセンターの佐々木志徳氏は、同センターで実施している薬剤師のための患者アセスメントプログラムを紹介するとともに、「効果的なファームシューテュイカルケアを実践するには、フィジカルアセスメントを含めた情報を医療スタッフ間で共有することによって、安全かつ有効な薬物療法が提供できるのではないかと語った。

九州保健福祉大学教授の高村徳人氏は、臨床能力を有する薬剤師を育成するためには、①薬剤投与技術②バイタルサインのチェック・フィジカルアセスメント技術など③薬学的研究成果が投入された薬剤師技能を修得しなければならない、と指摘した。これらを修得させるために、万能型実習人形やシミュレーターを用いた、同大学の実習を紹介した。

ファルメディコ(株)代表取締役社長の坂間研至氏は、「在宅医療は薬物治療であり、薬剤師が深くかかわらなければならない領域である」と述べた。さらに、在宅医療においてバイタルサインの重要性を挙げつつ、「薬剤師は測定することに満足するのではなく、連続性を持たせた数値を、必ず医師や看護師にフィードバックすることが重要である」と強調した。

最後に、兵庫県病院薬剤師会会長の西田英之氏と神戸大学医学部附属病院薬剤師部長の平井みどり氏が総合司会を務めたパネルディスカッションでは、バイタルサインの情報の活用法などについて、会場も交えて活発な意見交換が行われた。



パネルディスカッションでは活発な意見交換が行われた。



バイタルサインチェックの実演の様子

「MIL (ミル)」 vol.36 2009 (平成 21) 年 9 月 20 日発行

神戸薬科大学が第30回リカレントセミナーを開催

病態変化を理解するには、体温、脈拍、血圧、呼吸といった基本的なバイタルサインのとり方や生理機能を十分に理解したうえで、バイタルサインの測定意義について十分な知識を習得することが大切になってくる。さらに、心電図や動脈血酸素飽和度といった基本的なバイタルサインモニターを理解することも重要になっている。このためには、最近ではこれらの知識・技能を習得できる教育システムとしてフィジカルアセスメントモデルを用いた研修が非常に有効な手段となることが認められている。

こういった背景から神戸薬科大学(兵庫県神戸市)では2009年12月6日(日)に「バイタルサインチェックに関する講義と実践」というテーマでセミナーを開催した。

同セミナーのフィジカルアセスメントモデルを用いた研修では、種々の基本的事項について手法を含めて理解を深めた。なお、参加希望者が多数に及んだことに加え、症例検討に関する講義と実践についてはシリーズ化を望む声も多かったことから、さらに内容と水準を高めた続編を2010年5月と11月に開催する予定だ。



フィジカルアセスメントモデルを用いた研修の様子

「MIL (ミル)」 vol.38
2010 (平成 22) 年 1 月 20 日発行

教育現場から

これからの薬局・薬剤師に期待される役割

神戸薬科大学 エクステンションセンター 臨床教授 長嶺幸子

医療施設の整備を主な目的とした医療法は1985年以降数度にわたって改正されました。その中で薬局・薬剤師にとって、特筆すべきは、第2次医療法改正(1992年)で、薬剤師が医療の担い手として明記されたこと、第5次医療法改正(2006年)で「調剤を行う薬局」を医療提供施設として位置づけることが明記されたことです。これらの改正により薬局薬剤師は①薬物療法の提供、②健康の維持・増進のためのセルフメディケーションの提供、③栄養相談、健康相談、介護、医療相談窓口といった役割を担うことが求められました。また、第6次医療法改正では、在宅医療・連携の推進、医療従事者間の役割分担とチーム医療の推

進により医療提供体制の機能強化に向けた改革が行われようとしています。地域の医療提供施設として位置づけられた薬局は、在宅医療の推進、多職種での連携・協働を進めていかなければなりません。

FIP(国際薬剤師・薬学連合)のミシェル・ブマン前会長は東京での講演(2014年5月)で、これからの薬剤師業務は「調剤から患者ケアに」シフトしていかなければならないとしました。販売業者ではなく、健康を提供できる薬剤師になることが期待されています。



「MIL (ミル)」 vol.66 2016 (平成 28) 年 1 月 20 日発行

平成20年度上期におけるエクステンション事業活動

エクステンションセンター長 岡田 功

昨年秋刊に当大学の憲法大学では初めて誌上で行った本学のエクステンション(社会教育)事業は、順調に進捗して、夏学期の開始から1年間の活動が概観され、エクステンションセンターの事業は、東京圏の生涯学習事業の中で重要な位置を、順次占めていくことが、この1年間の活動から、改めて明らかになりました。また、東京圏の生涯学習事業の中で重要な位置を、順次占めていくことが、この1年間の活動から、改めて明らかになりました。

6月 8日(日) 第1回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

7月 6日(日) 第2回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

7月 12日(土) 第3回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

8月 21日(日) 第4回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

10月 18日(土) 第5回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

平成20年度上期におけるエクステンション事業活動

エクステンションセンターの平成21年度事業展開

エクステンション事業委員長 松田 芳久 特教部長

2009年度上期、事業展開が順調に進捗していることが、この1年間の活動から、改めて明らかになりました。また、東京圏の生涯学習事業の中で重要な位置を、順次占めていくことが、この1年間の活動から、改めて明らかになりました。

6月 8日(日) 第1回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

7月 6日(日) 第2回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

7月 12日(土) 第3回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

8月 21日(日) 第4回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

10月 18日(土) 第5回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

平成21年度上期におけるエクステンション事業活動

「ききょう通信」 147号 2008(平成20)年11月1日発行

「ききょう通信」 148号 2009(平成21)年5月1日発行

平成21年度上期におけるエクステンションセンター事業報告

エクステンションセンター長 岡田 功

今年度上期の事業報告

シンポジウム

1975年に開講された卒業後教育講座(全体的な素養を身に付けるための「呼吸器疾患の治療前線」をメインテーマに、9月5日(土)、6日(日)、13日(日)の3日間に開かれた。この講座で発表されるのは、受講者のうち他大学出身者が23.1%も占めたことである。これは卒業後の生涯学習支援を幅広く行ってきた本学ならではの実績です。また、リピーターが多くなることも特徴のひとつです。

今日から、時代の流れに合わせて対応するために、本講座を従来の卒業後教育講座から「卒業後修習講座」に改称しました。この名称に関しては国際専門士(IPP)によって2002年からCPD(Continuing Professional Development)という仕組みが導入されており、最新の専門知識、専門技術としての能力を常に維持するために、生涯を通じて知識、技術、

平成21年度上期における研究発表事業

心構えが計画的に維持、発展、拡充するという責任行為と実装されています。したがって、本学がそのコアリーダーは、生涯学習事業を通してこれらの行為を積極的に支援するというスタンスを持ち続けることがきわめて重要であると考えています。

なお、本年度は、「施設訪問者の鑑賞の話題」をテーマに、関係する予定で、学生の皆さんも奮ってご参加ください。(本学学生は特別招待)

6月 8日(日) 第1回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

7月 6日(日) 第2回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

7月 12日(土) 第3回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

8月 21日(日) 第4回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

10月 18日(土) 第5回国際会議 一橋大学(東京) 1,000名参加

平成21年度上期におけるエクステンションセンター事業報告

「ききょう通信」 149号 2009(平成21)年11月1日発行

在学生も卒業生も、薬剤師を徹底サポート

「薬剤師」を鍛える

生涯学習支援が充実 エクステンションセンター

生涯研修プログラムに

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラムをいち早く取り入れた背景

医療の高度化、急速な高齢化の進展に伴う医療現場の大きな変化により、患者生活における指導薬剤師の役割はますます重要になってい

ます。薬剤師チームの一員として多職種と協働し、専門性を生かした、質の高い安心・安全な医療を提供することが求められています。その教育プ

ログラムは進んでいます。

そこで、薬剤師の知識を深め、専門的知識や技術を高め、薬物治療のリスクマネージャーとしての実力を養成するため、地域医療現場で在宅

医療（在宅医療）に関する指導薬剤師養成プログラムをいち早く取り入れた。生涯学習支援が充実 エクステンションセンター

実習中の「輸液調整」研修のポイント

2014年4月の開校後、研修施設が充実した環境の中で研修が、地域医療現場で行われる実習を通じて、その実習が可能なことから、薬剤師の研修施設に不可欠な研修施設が充実しています。

●薬物の調製や輸液調整など、在宅医療現場で必要となる実践的スキルを身に付け、在宅医療現場で活躍できるようにします。

●在宅医療現場で必要となる実践的スキルを身に付け、在宅医療現場で活躍できるようにします。

在学生も卒業生も、薬剤師を徹底サポート

「薬剤師」を鍛える

生涯学習支援が充実 エクステンションセンター

薬剤師のアドバイスが求められている「サプリメント選び」

生涯研修の一つとして「健康食品講座」を実施しています

「健康食品講座」とは

本学では、複数の生涯研修プログラムの一つとして「健康食品講座」を開講しています。

「健康食品講座」は「健康食品」がテーマに2008（平成20）年度からリカレントセミナーの一環として開講し、今年度までには

超高齢社会を迎える中、生活習慣病予防に不可欠な特定健康診査・特定保健指導制度が始まり、国民の健康への関心が高

まるにつれて、ヘルシアのためのサプリメントは身近なものになりつつあります。医療現場から処方される薬に加えて、健康食品の利用は増

大です。一方で、健康食品などの販売も増え、今後安全面に対して薬剤師の知識が大いに生かされることと期待されています。

健康食品に関する法律から、健康食品の適切な利用法を定め、薬剤師の立場から正しい情報を提供できるように研修を重ねて

います。

神戸薬科大学では「健康食品指導薬剤師」を認定しています

「健康食品指導薬剤師」とは

健康食品に期待される3次機能（生活習慣病予防、健康の維持、病後の予防、体調リズムの調

理、老化の抑制など）に関する専門知識を有し、これらの食品を消費者が利用しようとするときに、

有害かつ安全に摂取できるよう適切な情報を提供できる薬剤師を健康食品指導薬剤師と称し、神

戸薬科大学がこれを認定します。

「神戸薬科大学健康食品指導薬剤師認定」を取得するには

薬剤師であることが条件です。さらに、エクステンションセンターの指定する

「健康食品基礎講座」の課程を修了し、論文試験に合格された方を健康食品

指導薬剤師として認定しています。

今年度、6月1日の「健康食品指導薬剤師認定試験」を実施し、合計266

名が合格しています。

「健康食品講座」は4・5年次の

専門教育科目（選択科目）にもなっています

選択科目として単位を希望する場合は、必要条件を満たせば専門教育科目（健康

食品）単位として単位認定を行います。

エクステンションセンターで実施している研修プログラムは、常に学部学生に参加を

呼びかけています。単位に関係なく、先輩薬剤師と一緒に各プログラムを受講すること

は、医療へのこだわりや志について多くを理解し、自身の健康増進を促す機会

にもなるので、大いに活用してください。

健康食品やサプリメントの適切な利用法は、健康の維持、病後の予防、体調リズムの調

理、老化の抑制など、医療現場から処方される薬に加えて、健康食品の利用は増

大です。一方で、健康食品などの販売も増え、今後安全面に対して薬剤師の知識が大いに

生かされることと期待されています。健康食品に関する法律から、健康食品の適切な

利用法を定め、薬剤師の立場から正しい情報を提供できるように研修を重ねて

います。

神戸薬科大学では「健康食品指導薬剤師」を認定しています

「健康食品指導薬剤師」とは

健康食品に期待される3次機能（生活習慣病予防、健康の維持、病後の予防、体調

リズムの調理、老化の抑制など）に関する専門知識を有し、これらの食品を消費者が

利用しようとするときに、有害かつ安全に摂取できるよう適切な情報を提供でき

る薬剤師を健康食品指導薬剤師と称し、神戸薬科大学がこれを認定します。

「神戸薬科大学健康食品指導薬剤師認定」を取得するには

薬剤師であることが条件です。さらに、エクステンションセンターの指定する

「健康食品基礎講座」の課程を修了し、論文試験に合格された方を健康食品

指導薬剤師として認定しています。

今年度、6月1日の「健康食品指導薬剤師認定試験」を実施し、合計266

名が合格しています。

「健康食品講座」は4・5年次の

専門教育科目（選択科目）にもなっています

選択科目として単位を希望する場合は、必要条件を満たせば専門教育科目（健康

食品）単位として単位認定を行います。

在学生も卒業生も、薬剤師を徹底サポート

「薬剤師」を鍛える

生涯学習支援が充実 エクステンションセンター

本学は、公益法人薬剤師認定制度認証機関から

西日本の薬系大学では初めて「生涯研修プロ」(イター)として認定(G07)されました。

医療の高度化と社会情勢の変化に伴って、

薬剤師は、チーム医療の専門家として、今後ますます活躍が期待されています。

日進月歩の医療分野では、卒業生社会で働く薬剤師は、

時代に即応した医療レベルに継続的に応えていく必要があります。

このような社会的要請に応えるために、本学ではエクステンションセンターを設立しています。

エクステンション（公開教育）事業の実施

主な研修講座

◇ 卒後研修講座 ◇ リカレントセミナー ◇ 健康食品講座 ◇ 薬剤師実践塾

卒後研修講座

リカレントセミナー

本学の研修事業は多岐にわたりますが、上記の

4つの事業を主な柱として毎年テーマを変えて

行っています。それに合わせて先進的な話題を取り

上げたシンポジウムも開催しています。

学部学生も

受講可能です

エクステンションセンターで実施している研修プログラムは学生も受講できます。

学年に関係なく、興味のあるテーマであれば遠慮なく参加してください。又、4年次～6年次を対象に専門

教育科目（選択科目）として単位を認定します。

エクステンションセンターでは、常に学部学生に研修会への参加を呼びかけています。単位取得にかか

らず、先輩薬剤師と一緒に各プログラムを受講することは、医療へのこだわりや志についてなど、少しでも

理解を深めることにつながり、自身の健康増進を促す機会にもなります。

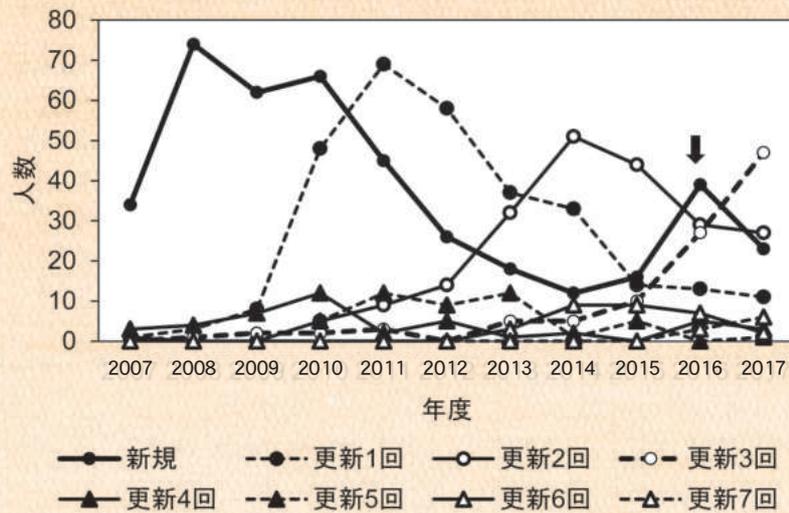
NOTICE

2015年度前半 主な生涯研修支援プログラム

講座名	開催日	テーマ
第8回 シンポジウム	6/14(日)	呼吸器系における個人医療について - 呼吸器科と呼吸器科ナース
第40回 リカレントセミナー	6/28(日)	「在宅医療」の現状 - 在宅医療の現状
第31回 薬剤師実践塾	6/14(土)・15(日)	「在宅医療」の現状 - 在宅医療の現状
第14回 健康食品講座	7/9(日)	健康食品の正しい利用法と健康増進
第49回 リカレントセミナー	8/27(日)	健康増進
第70回 リカレントセミナー	10/14(日)	健康増進

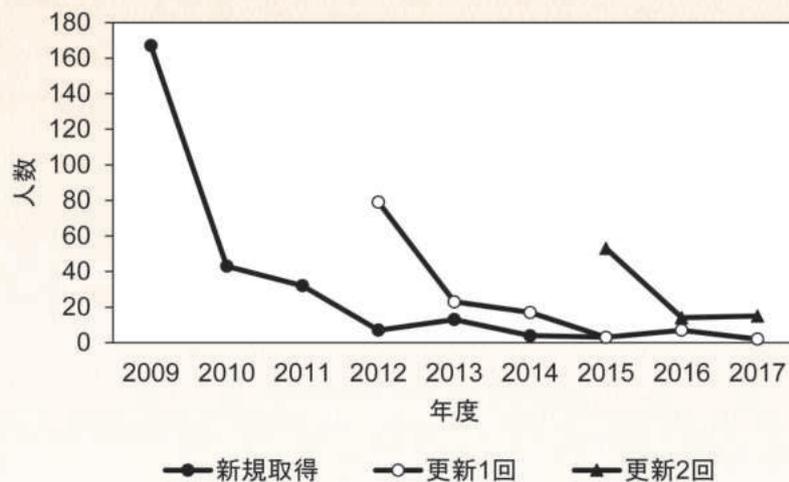
プログラム詳細は本学「エクステンションセンター」ホームページをご覧ください。

生涯研修認定薬剤師認定者数の推移



研修認定薬剤師の新規認定者数は2008（平成20）年度が最も多く、以後、少しずつ減少していたが、2016年度に再び増加がみられた（図中矢印）。2016年4月から開始された「かかりつけ薬剤師・薬局」制度において、研修認定取得がかかりつけ薬剤師の要件となったため、増加したものと考えられる。

健康食品指導薬剤師取得者数の推移



健康食品指導薬剤師の新規取得者のうち、1回目の更新を行った者は約半数であることがわかる。また、1回目の更新を行った者のほとんどが2回目も更新していることがわかる。

卒後研修講座

【2007（平成19）年度】

第33回 9月2日（日）、9月8日（土）、9月9日（日）

性差医学—からだと薬に関する男女の違い—

1. 「性差医学と漢方」
～民間病院と大学病院の臨床を通して～
近畿大学東洋医学研究所 教授 新谷 卓弘 氏
2. 「性機能障害（こころとからだ）」
大阪市立大学医学部附属病院総合診療センター
講師 森村 美奈 氏
3. 「婦人科の悪性腫瘍（卵巣がん・子宮がん）」
兵庫県立がんセンター婦人科 部長 西村 隆一郎 氏
4. 「男性の更年期障害」
関西医科大学泌尿器科学講座 教授 松田 公志 氏
5. 「患者満足ของทีม医療 ～ケアマインドとコーチング～」
和歌山県立医科大学麻酔科学教室 教授 畑埜 義雄 氏
6. 「女性の性周期と心身症」
神戸大学医学部保健学科 教授 松尾 博哉 氏
7. 「乳癌診療のup-to-date」
兵庫県立がんセンター乳腺科 部長 高尾 信太郎 氏
8. 「睡眠調節機構と性差」
早稲田大学先端バイオ研究所 教授 江口 直美 氏
9. 「前立腺癌の診断と治療」
兵庫医科大学泌尿器科 准教授 山本 新吾 氏

【2008（平成20）年度】

第34回 8月31日（日）、9月6日（土）、9月7日（日）

神経変性疾患治療の最前線

—パーキンソン病とアルツハイマー病を中心として—

1. 「アルツハイマー病治療薬の現代と今後の展望」
京都大学大学院薬学研究科創薬神経科学講座
客員教授 杉本 八郎 氏
2. 「パーキンソン病治療の最前線：薬物治療と機能的外科手術療法の最近の進歩」
順天堂大学医学部脳神経内科 教授 服部 信孝 氏
3. 「トピックス① 医薬品評価における薬剤師の役割」
東京大学大学院情報学環・薬学系研究科 教授 澤田 康文 氏
4. 「トピックス② みんなで取り組もうがん対応医療」
社会福祉法人京都社会事業財団京都桂病院医務部薬剤科
科長 中西 弘和 氏

5. 「神経内科領域における薬剤師の役割 —病院薬剤師の立場から—」
財団法人田附興風会医学研究所北野病院薬剤部
主任薬剤師 矢船 仁美 氏

6. 「神経内科領域における薬剤師の役割 —開局薬剤師の立場から—」
薬局セブンファーマシー 薬局長 七海 陽子 氏

7. 「トピックス③ 最近話題の消化器疾患と治療」
神戸薬科大学医療薬学研究室 教授 水野 成人 氏

8. 「ES細胞を用いたパーキンソン病治療の開発（再生医療の今と未来）」
京都大学再生医科学研究所生体修復応用分野
准教授 高橋 淳 氏

9. 「パーキンソン病の病態と最新の治療法」
国立精神・神経センター病院 副院長 久野 貞子 氏

10. 「認知症のとらえ方・対応の仕方」
松下電器健康保険組合松下記念病院神経内科 部長 森 敏 氏

【2009（平成21）年度】

第35回 9月5日（土）、6日（日）、13日（日）

呼吸器疾患の治療最前線

1. 「COPD 診療の最前線」
京都大学大学院医学研究科呼吸器内科学 教授 三嶋 理晃 氏
2. 「肺結核の診断と治療」
国立病院機構刀根山病院 副院長 前倉 亮治 氏
3. 「インフルエンザに関する最近の話題」
国立感染症研究所感染症情報センター第三室
室長 多屋 馨子 氏
4. 「気管支喘息：鑑別診断とガイドラインに基づく最新治療」
東京大学大学院医学系研究科呼吸器内科学 教授 長瀬 隆英 氏
5. 「トピックス① 腎障害と薬物治療」
昭和大学医学部内科学講座腎臓内科学部門 教授 秋澤 忠男 氏
6. 「肺がん —薬効から見えて来た人種差と遺伝子—」
九州大学胸部疾患研究施設 教授 中西 洋一 氏
7. 「肺炎診療—感染症専門薬剤師によるサポートへの期待—」
大阪大学医学部附属病院感染制御部 教授 朝野 和典 氏
8. 「トピックス② 禁煙支援の新しい潮流 —禁煙保険診療と禁煙治療薬 OTC 化—」
奈良女子大学保健管理センター 教授 高橋 裕子 氏

9. 「呼吸器疾患における吸入指導の役割ーフィジカルアセスメントの試みー」

医療法人徳洲会八尾徳洲会総合病院薬剤部
薬局長 大里 恭章 氏

【2010 (平成 22) 年度】

第 36 回 6 月 5 日 (土)、6 日 (日)、13 日 (日)
糖尿病診療の最近の話題

1. 「今、糖尿病をどう捉えていますか?」

順天堂大学大学院スポーツロジックセンター
センター長 河盛 隆造 氏

2. 「トピックス① EBMの考え方と実践ー糖尿病の Quality Indicatorー」

聖路加国際病院 院長 福井 次矢 氏

3. 「糖尿病の食事療法ー事例・症例で学ぶー」

川崎医療福祉大学 教授 寺本 房子 氏

4. 「トピックス② フィジカルアセスメントの実践教育から生まれる薬術への期待」

九州保健福祉大学薬学部薬学科臨床薬学第二講座
教授 高村 徳人 氏

5. 「糖尿病食事療法におけるカーボカウントー炭水化物量による血糖管理法ー」

大阪市立大学大学院医学研究科発達小児医学教室
講師 川村 智行 氏

6. 「糖尿病性腎症の診断と治療」

金沢医科大学内分泌代謝制御学 教授 古家 大祐 氏

7. 「メタボリックシンドロームと糖尿病ー分子メカニズムから地域予防対策までー」

大阪大学大学院医学系研究科内分泌代謝内科
准教授 船橋 徹 氏

8. 「糖尿病網膜症とその治療」

三井記念病院内科糖尿病代謝内科 部長 柴 輝男 氏

9. 「糖尿病治療薬と療養指導」

新潟薬科大学薬学部 准教授 朝倉 俊成 氏

【2011 (平成 23) 年度】

第 37 回 5 月 29 日 (日)、6 月 4 日 (土)、5 日 (日)
循環器疾患の最新治療

1. 「ガイドラインに基づいた高血圧治療の考え方ー降圧薬をどう選択するのか?ー」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

2. 「トピックス① 精神神経疾患の薬の使い方 睡眠薬」

医療法人北斗会ほくとクリニック病院 薬剤部長 天正 雅美 氏

3. 「抗血小板療法の重要性」

医療法人沖繩徳洲会湘南鎌倉総合病院 副院長
心臓センター 循環器内科部長 齋藤 滋 氏

4. 「トピックス② ますます高まる「在宅医療における薬剤師の役割」」

有限会社ハートフルケア 代表取締役 三宅 圭一 氏

5. 「重症心不全治療の現状と展望」

大阪大学大学院医学系研究科外科学講座心臓血管外科学
教授 澤 芳樹 氏

6. 「脂質異常の薬物療法ーLDLコレステロールはどこまで下げるのかー」

東邦大学医学部内科学講座糖尿病代謝内分泌科
教授 芳野 原 氏

7. 「不整脈治療の進歩ー薬物治療と非薬物治療ー」

国立循環器病研究センター心臓血管内科部門不整脈科
部長 鎌倉 史郎 氏

8. 「ES 細胞 / iPS 細胞を用いた再生医療ー心血管再生を中心にー」

京都大学再生医科学研究所幹細胞分化制御研究領域
准教授 山下 潤 氏

9. 「トピックス③ 医薬品適正使用のための薬剤師によるフィジカルアセスメント」

群馬大学医学部附属病院薬剤部 主任 大林 恭子 氏

【2012 (平成 24) 年度】

第 38 回 5 月 27 日 (日)、6 月 2 日 (土)、3 日 (日)
感覚器疾患 (眼科・耳鼻科・皮膚科) と口腔歯科の治療最前線

1. 「アトピー性皮膚炎と乾癬: 解明されてきた病態生理とそれに基づく治療の最前線」

神戸大学医学部附属病院皮膚科 講師 永井 宏 氏

2. 「メニエール病・突発性難聴ー難聴・耳鳴・めまいを克服する」

慶応義塾大学医学部耳鼻咽喉科 教授 小川 郁 氏

3. 「トピックス① 健康と若さの秘訣ー見た目のアンチエイジングーの理論と実践」

再生未来クリニック神戸 院長

同志社大学 客員教授 市橋 正光 氏

4. 「トピックス② 在宅療養における薬剤師の役割と今後の課題ー薬剤師だからできる支援事例を交えてー」

株式会社タカサ在宅療養支援連携室 室長 高崎 潔子 氏

5. 「歯を失った場合の治療法ー歯科インプラント治療の光と影」

東京医科歯科大学大学院歯学総合研究科

インプラント・口腔再生医学分野 教授 春日井 昇平 氏

6. 「眼科点眼薬アップデート: ここまで進歩した薬物治療」

兵庫医科大学眼科学教室 眼科主任・教授 三村 治 氏

7. 「褥瘡の治療と感染対策ーラップ療法を中心に解説ー」

大崎市民病院鹿島台分院内科診療 部長 鳥谷部 俊一 氏

8. 「アレルギー性鼻炎・花粉症の薬物療法 - Evidence Bases Medicine (EBM) の観点から -」

京都第二赤十字病院耳鼻咽喉科 部長 出島 健司 氏

9. 「トピックス③ どんな薬疹に注意すればいいの?」

東京通信病院薬剤部 副薬剤部長 大谷 道輝 氏

【2013 (平成 25) 年度】

第 39 回 5 月 25 日 (土)、26 日 (日)、6 月 2 日 (日)
がん治療最前線

1. 「肺癌内科治療のパラダイムシフト」

大阪府立成人病センター呼吸器内科 主任部長 今村 文生 氏

2. 「トピックス① 抗がん剤のTDM実例メトトレキサート、分子標的薬」

筑波大学附属病院薬剤部 薬剤師 鈴木 嘉治 氏

3. 「知ってください!肝臓がんの薬物治療」

独立行政法人国立がん研究センター中央病院肝臓内科
科長 奥坂 拓志 氏

4. 「乳がん治療の最新情報」

神戸大学大学院医学研究科腫瘍・血液内科 教授 南 博信 氏

5. 「トピックス② 新しい放射線治療 - 粒子線治療 -」

兵庫県立粒子線医療センター 院長 不破 信和 氏

6. 「外来化学療法におけるチーム医療: 薬剤師の役割」

聖マリアンナ医科大学臨床腫瘍学講座 教授 朴 成和 氏

7. 「婦人科癌 (子宮がん・卵巣がん) の治療最前線」

兵庫県立がんセンター婦人科 部長 山口 聡 氏

8. 「トピックス③ iPS 細胞を用いたパーキンソン病の細胞移植治療」

京都大学 iPS 細胞研究所臨床応用研究部門神経再生研究分野
教授 高橋 淳 氏

9. 「革新的な進歩をみせる血液がんの治療: 分子標的療法と同種造血細胞移植療法」

大阪府立成人病センター血液・化学療法科
主任部長 石川 淳 氏

【2014 (平成 26) 年度】

第 40 回 5 月 25 日 (日)、31 日 (土)、6 月 1 日 (日)
感染症をどう抑えこむか - 予防と治療 -

1. 「薬剤師として知っておきたい抗菌薬の使い方」

東京女子医科大学病院薬剤部 薬剤部長 木村 利美 氏

2. 「快適で衛生的な生活環境を保つために」

山口大学医学部附属病院薬剤部 准教授 尾家 重治 氏

3. 「トピックス① 薬剤師に必要な栄養療法の知識 - 病棟から在宅まで -」

尾道市公立みつぎ総合病院地域医療部
NST 専従 増田 修三 氏

4. 「感染制御部専従薬剤師の役割と抗 MRSA 薬の使い分け」

兵庫医科大学病院感染制御部 植田 貴史 氏

5. 「感染症診療の基本的考え方と抗菌薬適正使用 - 肺炎を中心に -」

奈良県立医科大学感染症センター
センター長・教授 三笠 桂一 氏

6. 「トピックス② 健康と医療の情報を読み解く Evidence-based Practice のために」

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野
教授 中山 健夫 氏

7. 「ワクチン開発研究の最前線 安全安心なワクチンを目指して」

独立行政法人医薬基盤研究所アジュバント開発プロジェクト
プロジェクトリーダー 石井 健氏

8. 「トピックス③ 薬剤師の、薬剤師による、薬剤師のための摂食・嚥下リハ」

大阪大学歯学部附属病院 助教 野原 幹司 氏

9. 「ここまで進歩したB型肝炎、C型肝炎治療 問題点と今後の展望」

吹田医療福祉センター 総長 岡上 武 氏

【2015 (平成 27) 年度】

第 41 回 5 月 24 日 (日)、30 日 (土)、31 日 (日)
代謝・免疫疾患の基礎と臨床

1. 「肥満症の診断と治療 - 最近の進歩から今後の展開も含めて -」

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系
副専攻長・教授 細田 公則 氏

2. 「超高齢社会における糖尿病治療戦略」

北播磨総合医療センター 病院長 横野 浩一 氏

3. 「トピックス① セルフケア・セルフチェックの支援における薬局の役割」

慶應義塾大学薬学部 薬学部長・教授 望月 眞弓 氏

4. 「健康寿命延伸のための骨粗鬆症診療に関する最新の話」

近畿大学医学部奈良病院整形外科・リウマチ科
教授 宗圓 聡 氏

5. 「トピックス② 糖尿病早期発見のためにこれから何をすべきか? 「糖尿病診断アクセス革命」から「検体測定室」の誕生へ」

筑波大学内分泌代謝・糖尿病内科 准教授 矢作 直也 氏

6. 「男性に多い痛風と女性に多い関節リウマチ」

東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センター
教授・所長 山中 寿 氏

7. 「脂質異常症の成因・診断・治療の最前線」
大阪大学大学院医学系研究科総合地域医療学寄附講座
循環器内科学講座 教授 山下 静也 氏
8. 「膠原病とはどんな病気か 一病態・診断・治療の最前線」
京都大学大学院医学研究科内科学講座臨床免疫学
教授 三森 経世 氏
9. 「トピックス③ ジェネリック医薬品に関わる環境変化と使用促進 ー諸外国の取り組み、バイオシミラーやオソライズドジェネリックも踏まえてー」
東京理科大学経営学部 教授 坂巻 弘之 氏

【2016 (平成 28) 年度】

- 第42回** 5月22日(日)、28日(土)、29日(日)
これからの薬剤師が目指すもの
1. 「栄養療法の基礎知識 ー栄養管理とNutrition Support Teamー」
赤穂市民病院 薬剤部長 室井 延之 氏
2. 「感染制御からみた薬剤師の役割 ー地域中核病院の立場からー」
置賜広域病院組合公立置賜総合病院薬剤部
副薬局長 金子 俊幸 氏
3. 「スポーツファーマシストとしての経験談」
一般社団法人日本社会人アメリカンフットボール協会
安全対策副委員長
スポーツファーマシスト 渡邊 恵理奈 氏
4. 「トピックス① これからの薬剤師が目指すもの」
一般社団法人大阪府薬剤師会 会長 藤垣 哲彦 氏
5. 「多職種連携でポリファーマシーに対処しよう」
国立病院機構名古屋医療センター
卒後教育研修センター長(医長)・総合内科医長 宮田 靖志 氏
6. 「在宅緩和ケアの充実をめざした緩和薬物療法認定薬剤師として取り組み」
一般社団法人福井県薬剤師会教育研修室 室長
薬剤師会理事
水仙薬局 管理薬剤師 木村 嘉明 氏
7. 「未来を創る小児薬物療法と小児専門薬剤師」
国立研究開発法人国立成育医療研究センター
薬剤部長 石川 洋一 氏
8. 「トピックス② どのように日本版共同薬物治療管理(CDTM/J)を実践するか ー現状と未来ー」
東京薬科大学情報教育研究センター
センター長・教授 土橋 朗 氏
9. 「がん薬物療法の変遷 ーがん患者に薬剤師としてできることー」
兵庫医科大学病院薬剤部 がん専門薬剤師 藤澤 浩美 氏

10. 「チーム医療における薬剤師の役割 ー患者の安全と安心のためにー」
国家公務員共済組合連合会虎の門病院 薬剤部長 林 昌洋 氏
11. 「これからの精神科専門薬剤師が目指すもの」
東邦大学薬学部臨床薬学研究室 教授 吉尾 隆 氏
12. 「トピックス③ 行きつけ薬局の国 ドイツ ーオールラウンド学問、薬学を楽しむ薬剤師ー」
Central Apotheke 開設者・局長
日本コミュニティファーマシー協会
理事 アッセンハイマー 慶子 氏

【2017 (平成 29) 年度】

- 第43回** 5月28日(日)、6月3日(土)、4日(日)
疾患を学ぼう 薬剤師に必要な8疾患 その一
循環器疾患(高血圧、心疾患、脳血管障害)
1. 「虚血性心疾患予防の最新の話 食事から腸内細菌まで」
神戸大学大学院医学研究科内科学講座循環器内科学分野
教授 平田 健一 氏
2. 「薬剤師のための高血圧治療 ガイドラインと最新治療」
大阪大学大学院医学系研究科内科学講座老年・総合内科学
教授 楽木 宏実 氏
3. 「トピックス① 心血管系の老化と再生」
新潟大学医学部循環器内科 教授 南野 徹 氏
4. 「不整脈診療 病態と発生メカニズムを考慮した最新の薬物・非薬物治療」
国立循環器病研究センター心臓血管内科部門不整脈科
部長 草野 研吾 氏
5. 「疾患を学ぼう 薬剤師に必要な脳血管障害の基礎知識」
山王病院・山王メディカルセンター脳血管センター
センター長 内山 真一郎 氏
6. 「トピックス② 地域包括ケアにおける薬局薬剤師の役割 在宅チーム医療の実例をふまえて」
株式会社ファーマシー医療連携部 部長 孫 尚孝 氏
7. 「脳動脈瘤とくも膜下出血の診断と治療」
神戸市立医療センター中央市民病院脳神経外科
部長 坂井 信幸 氏
8. 「主な循環器疾患に関する薬物ケアの実際 ー薬剤師としてみるべきポイントー」
国立循環器病研究センター薬剤部
特任副薬師部長 和田 恭一 氏
9. 「心不全の病態と最近の治療」
国立循環器病研究センター心臓血管内科部門
部長 安齊 俊久 氏

リカレントセミナー

【2007 (平成 19) 年度】

第 21 回 7 月 8 日 (日)

服薬指導—薬歴簿の基本的な書き方—

1. 「薬歴簿の基本的な書き方」
2. 「症例に基づく演習」

株式会社阪神調剤薬局教育研修部 長野 恭久 氏
株式会社阪神調剤薬局教育研修部 道上 敬 氏

【2008 (平成 20) 年度】

第 22 回 7 月 6 日 (日)

各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ①

—大腸がん—

1. 「講演会」
2. 「SGD」

神戸薬科大学医療薬学研究室 講師 三木 生也 氏
京都桂病院薬剤科 科長 中西 弘和 氏

第 23 回 11 月 16 日 (日)

服薬指導シリーズ (応用編)

—高齢者ケアにおける薬の管理と服薬指導—

1. 「利用者・家族・介護職が薬剤師に求めること
—グループ・ホームなど介護現場からの切なる声—」

ファーマ・ケア研究所 所長 播本 高志 氏

2. 「高齢者医療制度を担う薬剤師スキルを考える」

薬局セブンファーマシー 薬局長 七海 陽子 氏

第 24 回 2 月 8 日 (日)、15 日 (日)、22 日 (日)、 3 月 1 日 (日)

健康食品シリーズ①

2 月 8 日 (日)

1. 「健康食品とは (科学の側から) リスク・アナリーシス
による食品の安全性確保」
財団法人日本健康・栄養食品協会 理事長 林 祐造 氏
2. 「リスクコミュニケーションの理論」
「リスクコミュニケーションと実際」
中国・河南省新郷医学院 名誉教授
日本食品保健指導士会 会長 関本 邦敏 氏
3. 「健康食品とは (法規制の側から) 消費者基本法、
消費者契約法、特定商取引法、不当景品類及び不
当表示防止法、JAS 法」
兵庫県立生活科学総合センター 相談指導部長 岩浅 敬由 氏

4. 「食品衛生法、薬事法、健康増進法、PL 法、食品
衛生管理、製造・品質管理、食中毒発生防止」

神戸薬科大学エクステンションセンター 准教授 長嶺 幸子 氏

2 月 15 日 (日)

1. 「食品成分の機能性・有用性」
甲子園大学 学長 田中 平三 氏
2. 「健康増進、免疫能の獲得と健康食品の活用」
神戸薬科大学 名誉教授 難波 宏彰 氏
3. 「栄養状態の評価、判定 (健康及び疾病時)」
神戸薬科大学 副学長
病態生化学研究室 教授 太田 光熙 氏

4. 「栄養パラメーターによる評価、判定 食事摂取基準
と栄養補給」
甲子園大学栄養学部 教授 山本 国夫 氏
5. 「栄養の質的評価 (利用効率、代謝)」
甲子園大学栄養学部 教授 中野 長久 氏

5. 「栄養の質的評価 (利用効率、代謝)」

2 月 22 日 (日)

1. 「臨床栄養学・病態栄養学 (生活習慣病を中心に)」
甲子園大学栄養学部 教授 渡曾 隆夫 氏
2. 「食品保健の概念と健康増進への健康食品の活用」
3. 「生活習慣病予備群における栄養補給と健康補助食品
の活用」
神戸大学医学部附属病院薬剤部
薬剤部長・教授 平井 みどり 氏

4. 「保健機能食品の活用 (特定保健用食品 栄養機能
食品 特別用途食品)」
日本食品保健指導士会 副会長
神戸薬科大学エクステンションセンター生涯教育事業委員会
事業委員 池田 千恵子 氏

3 月 1 日 (日)

1. 「健康食品の主要な成分と安全性 (相互作用)」
日本食品保健指導士会 副会長
神戸薬科大学エクステンションセンター生涯教育事業委員会
事業委員 池田 千恵子 氏
2. 「健康食品の企画、開発、コミュニケーション」
株式会社カネカヘルスケアプロダクツ事業本部
安全・品証統括 福富 直樹 氏

3. 「食品の健康強調表示と科学的論拠」
4. 「加工食品の表示、栄養成分の表示」
5. 「健康食品の製造プロセス・管理」
赤穂化成株式会社 開発企画部長 能美 茂 氏

【2009（平成 21）年度】—————

第 25 回 4 月 12 日（日）

服薬指導シリーズ —眼科領域—

1. 「日常診療で多く見かける眼科疾患とその治療」
医療法人徳洲会八尾徳洲会総合病院眼科
部長 福原 雅之 氏
2. 「アドヒアランス向上のための適切な点眼指導と情報提供」
大阪医科大学附属病院薬剤部 上田 倫子 氏

第 26 回 6 月 21 日（日）

各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ②

—糖尿病—

1. 「講義」
神戸大学医学部附属病院糖尿病・内分泌内科 廣田 勇士 氏
医療法人徳洲会岸和田徳洲会病院 薬剤部長 藤原 琴 氏
2. 「SGD」

第 27 回 8 月 9 日（日）

改正薬事法後の OTC 薬への薬剤師の係わり方

1. 「改正薬事法への対応」
佐藤製薬株式会社学術部学術課 課長代理 福原 章一 氏
2. 「実践!カウンターでの業務」
社団法人兵庫県薬剤師会 常務理事 三宅 圭一 氏
3. 「SGD」

第 28 回 11 月 1 日（日）

服薬指導シリーズ —小児科領域—

1. 「小児急性疾患と薬物治療について」
財団法人神戸市地域医療振興財団西神戸医療センター小児科
医長 上村 克徳 氏
2. 「小児専門病院における服薬指導」
兵庫県立こども病院薬剤部 課長補佐 上田 里恵 氏

第 29 回 11 月 15 日（日）

各種疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ③

—気管支喘息—

1. 「講義」
神戸市立医療センター西市民病院呼吸器内科 医長 藤井 宏 氏
名古屋大学医学部附属病院薬剤部 薬剤主任 長谷川 雅哉 氏
2. 「SGD」

第 30 回 12 月 6 日（日）

バイタルサインチェックに関する講義と実践

1. 「講義」
2. 「バイタルサインチェックの実践」

3. 「フィジカルアセスメントモデルを用いた症例検討」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第 31 回 2 月 27 日（土）

健康食品に関する最近の話題と製品情報

1. 「紫外線障害に対する機能性食品因子の影響」
京都府立医科大学医学部消化器内科・生体機能分析医学講座
准教授 内藤 裕二 氏
2. 「健康食品における科学的エビデンス —（株）ファンケルにおける取得事例—」
株式会社ファンケル総合研究所学術研究室
室長 鳴島 真人 氏

第 32 回 2 月 27 日（土）、28 日（日）、3 月 6 日（土）、7 日（日）

健康食品シリーズ②

2 月 27 日（土）

1. 「健康食品とは」
2. 「リスク・アナリシスによる食品の安全性確保」
財団法人日本健康・栄養食品協会健康食品部
部長 加藤 博 氏
3. 「健康食品の法規制 消費者基本法、消費者契約法、特定商取引法、不当景品類及び不当表示防止法、JAS 法、PL 法」
赤穂化成株式会社 前開発企画部長 能美 茂 氏
4. 「薬事法、健康増進法」
神戸薬科大学エクステンションセンター 准教授 長嶺 幸子 氏

5. 「食品衛生法、食品衛生管理、食中毒発生防止」
神戸薬科大学衛生化学研究室 教授 岡野 登志夫 氏

2 月 28 日（日）

1. 「食品成分の機能性、有用性、免疫能の獲得」
神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 徳山 尚吾 氏
2. 「栄養状態の評価、判定（健康及び疾病時）」
神戸薬科大学 副学長
病態生化学研究室 教授 太田 光熙 氏
3. 「栄養パラメーターによる評価、判定 食事摂取基準と栄養補給」
4. 「栄養の質的評価（利用効率、代謝）」
武庫川女子大学生活環境学部食物栄養学科
教授 雨海 照祥 氏

3 月 6 日（土）

1. 「食品保健の概念と健康増進への健康食品の活用」
神戸大学医学部附属病院薬剤部
薬剤部長・教授 平井 みどり 氏

2. 「保健機能食品（栄養機能食品・特定保健用食品）
特別用途食品について」

日本食品指導士会 副会長
神戸薬科大学エクステンションセンター生涯教育事業委員会
委員 池田 千恵子 氏

3. 「臨床栄養学・病態栄養学（生活習慣病・生活習慣
病予備軍を中心に）」

甲子園大学栄養学部 前教授 渡曾 隆夫 氏

3月7日（日）

1. 「健康食品の企画・開発、製造プロセス・管理」

サントリーウエルネス株式会社健康科学センター
品質部長 柴田 浩志 氏

2. 「食品の健康強調表示と科学的根拠 加工食品の表
示、栄養成分の表示」

株式会社 TTC 試験企画コーディネーター 石田 幸久 氏

3. 「健康食品の安全性・相互作用」

日本食品指導士会 副会長
神戸薬科大学エクステンションセンター生涯教育事業委員会
委員 池田 千恵子 氏

【2010（平成22）年度】

第33回 4月11日（日）

服薬指導シリーズ -皮膚科領域-

1. 「知っておきたい皮膚疾患の基礎知識 -アトピー性皮
膚炎・乾癬を含めて-」

神戸大学大学院医学研究科内科系講座皮膚科学
助教 永井 宏 氏

2. 「今日から使えるアトピー性皮膚炎の服薬説明」

東京通信病院薬剤部 副薬剤部長 大谷 道輝 氏

第34回 5月16日（日）

フィジカルアセスメントに関する講義と実践

1. 「講義」
2. 「フィジカルアセスメントの実践」
3. 「フィジカルアセスメントモデルを用いた症例検討」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第35回 6月27日（日）

疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ④

-睡眠障害-

1. 「講義」

大阪回生病院睡眠医療センター 部長 谷 充孝 氏
大阪回生病院薬剤部 部長 楽 真澄 氏

2. 「グループワーク」

第36回 10月17日（日）

服薬指導シリーズ -慢性関節リウマチ-

1. 「関節リウマチの病態・診断と最新の薬物治療」

神戸大学医学部附属病院リウマチセンター 准教授 柱本 照 氏

2. 「関節リウマチ治療薬の指導のポイント」

関西労災病院 薬剤部長 韓 秀妃 氏

第37回 10月31日（日）

疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ⑤

-高血圧症-

1. 「講義」

医療法人社団勝谷医院 院長 勝谷 友宏 氏

大阪大学大学院薬学研究科附属実践薬学教育研究センター
教授 上島 悦子 氏

2. 「グループワーク」

第38回 11月28日（日）

フィジカルアセスメントに関する講義と実践

1. 「講義」
2. 「フィジカルアセスメントの実践」
3. 「フィジカルアセスメントモデルを用いた症例検討」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

【2011（平成23）年度】

第39回 4月10日（日）

服薬指導シリーズ -感染症と抗菌薬 PK/PD-

1. 「感染症と抗菌薬 PK/PD」

神戸市立医療センター中央市民病院感染症科
部長 春田 恒和 氏

2. 「PK/PDを考慮した抗菌薬適正使用」

神戸薬科大学薬学臨床教育センター 准教授 長谷川 豊 氏

第40回 5月15日（日）

フィジカルアセスメント

-薬剤の作用・副作用を身体所見から読み取る-

1. 「講義」
2. 「フィジカルアセスメントの実践」
3. 「フィジカルアセスメントモデルを用いた症例検討」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第41回 6月19日（日）

疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ⑥

-排尿障害-

1. 「排尿障害 -病態から学ぶ薬物治療-」

神戸大学大学院医学研究科外科系講座腎泌尿器科学分野
特命准教授 田中 一志 氏

2. 「排尿障害を見える化する」

前神戸大学医学部附属病院薬剤部 薬剤師 刈谷 美里 氏

3. 「グループワーク」

第42回 10月16日(日)

服薬指導シリーズーインフルエンザと新しいワクチンー

1. 「感染症 最近のトピックス」

独立行政法人労働者健康福祉機構関西労災病院小児科
副部長 指原 淳志 氏

2. 「抗インフルエンザウイルス薬の特徴」

神戸薬科大学薬剤学研究室 教授 岩川 精吾 氏

第43回 10月30日(日)

医薬品情報の活用の仕方ー病態と安全性を考慮した妊婦への薬物治療を考えるー

1. 「非臨床試験情報の解釈と活用」

第一三共株式会社安全性研究所 第6グループ 下村 和裕 氏

2. 「病態と安全性を考慮した妊婦への薬物治療ー疫学情報の解釈と活用ー」

虎ノ門病院薬剤部 薬剤部長 林 昌洋 氏

3. 「妊婦への医薬品の情報提供とカウンセリングー汎用薬での症例からー」

国立成育医療研究センター妊婦と薬情報センター
副センター長 渡邊 央美 氏

4. 「妊婦への薬物投与ー母体の安全 vs 胎児の安全: 抗凝固療法を中心としてー」

国立循環器病研究センター周産期・婦人科
医師 神谷 千津子 氏

第44回 11月27日(日)

フィジカルアセスメント

ー薬剤の作用・副作用を身体所見から読み取るー

1. 「講義」

2. 「フィジカルアセスメントの実践」

3. 「フィジカルアセスメントモデルを用いた症例検討」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

【2012(平成24)年度】

第45回 4月8日(日)

病態別の栄養管理の実際

1. 「がん患者の栄養管理とNST活動」

神戸大学大学院保健学研究科病態解析学領域病態代謝学 教授
神戸大学医学部附属病院栄養管理部 部長 宇佐美 眞 氏

2. 「糖尿病とCKD(慢性腎臓病)の栄養療法をマスターする」

神戸大学医学部附属病院栄養管理部 副部長 戸田 明代 氏

3. 「NSTにおける薬剤師の役割」

神戸薬科大学臨床教育センター 准教授 長谷川 豊 氏

4. 「メーカーから見た在宅における経口栄養」

イーエヌ大塚製薬株式会社マーケティング部 田中 大典 氏

第46回 5月13日(日)

ビギナーのためのバイタルサイン

ー聴診器の使い方から血圧・脈拍の測定までー

1. 「講義」

2. 「実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第47回 6月24日(日)

疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ⑦

ー最新の糖尿病治療ー

1. 「糖尿病はなぜ悪いのか?原因を知り対応を考える」

医療法人社団勝谷医院 院長 勝谷 友宏 氏

2. 「糖尿病における健康食品との付き合い方」

神戸薬科大学 非常勤講師 田中 良子 氏

3. 「グループワーク」

第48回 10月14日(日)

服薬指導シリーズー認知症の診断ー

1. 「認知症の診断と治療」

公益財団法人浅香山病院精神科認知症疾患医療センター
センター長 釜江 和恵 氏

2. 「認知症の薬物治療と薬学的管理」

医療法人北斗会ほくとクリニック病院 薬剤部長 天正 雅美 氏

第49回 10月21日(日)

医薬品情報の活用の仕方②ーコンピュータを用いた医薬品情報検索と症例検討ー

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学エクステンションセンター
特任准教授 長嶺 幸子 氏

第50回 11月25日(日)

中級者のためのフィジカルアセスメント

ー呼吸音・腸音から薬の副作用を知るー

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

【2013 (平成 25) 年度】

第51回 4月7日(日)

褥瘡

1. 「褥瘡がわかる ー診断と治療の基本を学ぼうー」

群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学 准教授 永井 弥生 氏

2. 「薬剤師の視点を活かして褥瘡を早く治す薬物治療」

独立行政法人国立長寿医療研究センター臨床研究推進部
高齢者薬物治療研究室 室長 古田 勝経 氏

第52回 5月12日(日)

ビギナーのためのフィジカルアセスメント

ー聴診器の使い方から血圧・脈拍の測定までー

1. 「講義」

2. 「実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第53回 5月19日(日)

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム「在宅療養における薬剤師の役割 ー薬剤師だからできる支援事例を交えてー」

1. 「介護保険上の位置づけ・ケアマネとの連携・支援事例 等」

株式会社タカサ在宅療養連携支援室 室長 高崎 潔子 氏

第54回 6月9日(日)

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム 「在宅薬剤師のためのメンタルヘルス」

1. 「ストレスのないコミュニケーション術・メンタルヘルセルフケア」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香 氏

第55回 6月16日(日)

疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ⑧

ー COPD (慢性閉塞性肺炎) ー

1. 「COPD の病態、診断・治療」・「吸入指導ネットワークの立ち上げ」

公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院呼吸器センター
センター長・呼吸器内科部長 福井 基成 氏

2. 「吸入手技の解説・実習」

公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院薬剤部
主任 三井 克巳 氏

3. 「グループワーク」

第56回 10月13日(日)

医薬品情報の活用の仕方 ーコンピュータを用いた医薬品情報検索と症例検討ー

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学エクステンションセンター 臨床教授 長嶺 幸子 氏

第57回 10月27日(日)

服薬指導シリーズ OTC について学ぼう

1. 「世界の薬剤師 OTC 医薬品の供給と軽医療への関わり」

名城大学薬学部臨床経済学 教授 坂巻 弘之 氏

2. 「OTC 販売における POS 的思考」

ウエルシア関西株式会社 執行役員
調剤介護部 部長 清水 一郎 氏

第58回 11月24日(日)

中級者のためのフィジカルアセスメント

ー身体所見から見た処方検討ー

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第59回 2月16日(日)

在宅医療

1. 「輸液調製の基礎と実践 演習問題・注射剤の混合・症例検討 他」

神戸薬科大学薬学臨床教育センター 准教授 長谷川 豊 氏

【2014 (平成 26) 年度】

第60回 4月6日(日)

服薬指導シリーズ ー骨粗鬆症についてー

1. 「骨粗鬆症治療における各薬剤の役割と効果」

兵庫医科大学ささやま医療センター整形外科 楊 鴻生 氏

2. 「毎日・週1回・月1回? それとも注射? 使いやすいのはどれ?」

兵庫医科大学ささやま医療センター薬剤室
主任薬剤師 鈴木 寛 氏

第61回 5月11日(日)

ビギナーのためのフィジカルアセスメント

ー聴診器の使い方から血圧・脈拍の測定までー

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第62回 6月22日(日)

疾患別病態・薬物治療と症例検討シリーズ⑨

「腎障害時の薬物治療」

1. 「症例から考える腎機能低下患者への薬物適正使用」

熊本大学薬学部附属育薬フロンティアセンター センター長
臨床薬理学分野 教授 平田 純生 氏

2. 「グループワーク」

第63回 10月12日(日)

医薬品情報の活用の仕方

—添付文書から読み取れる情報—

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学エクステンションセンター 臨床教授 長嶺 幸子 氏

第64回 10月26日(日)

服薬指導シリーズ 在宅における緩和ケアについて

1. 「泣いたり笑ったり、在宅を支える薬剤師、頑張ってますよ!」

なかむらクリニック 院長 中村 治正 氏

2. 「在宅緩和ケアにおける薬剤師の役割」

県立広島病院薬剤科 笠原 庸子 氏

3. 「調剤薬局でできることは何か?~がん・非がん性緩和ケアに係わったらどうする?~」

有限会社ヘルス企画 副社長
かりん薬局 管理薬剤師 吉川 知子 氏

第65回 11月23日(日)

中級者のためのフィジカルアセスメント

—身体所見から見た処方検討—

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

【2015(平成27)年度】 _____

第66回 4月5日(日)

抗血栓療法について

1. 「循環器領域における抗血栓薬治療の現状」

神戸市立医療センター中央市民病院循環器内科
部長 古川 裕 氏

2. 「抗血栓薬について」

公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院薬剤部
薬剤部長 尾上 雅英 氏

第67回 5月10日(日)

ビギナーのためのフィジカルアセスメント

—聴診器の使い方から血圧・脈拍の測定まで—

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第68回 6月28日(日)

痛みの治療

1. 「痛みへのアプローチと地域包括ケアにおける薬剤師への期待」

なかむらクリニック 院長 中村 治正 氏

2. 「『痛み』に対する薬物治療」

医療法人社団董会名谷病院 薬局長 宮崎 智子 氏

第69回 9月27日(日)

睡眠障害

1. 「睡眠障害治療の最前線」

日本大学医学部精神医学系 教授 内山 真 氏

2. 「睡眠薬の適正使用を考える ~減量・中止をどうするか~」

東邦大学薬学部臨床薬学研究室 教授 吉尾 隆 氏

第70回 10月18日(日)

薬剤師のためのコーチング

—コーチングスキルを用いて患者さんとのコミュニケーション力をアップしよう—

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学 講師 中島 園美 氏

第71回 11月15日(日)

中級者のためのフィジカルアセスメント

—身体所見から見た処方検討—

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

【2016(平成28)年度】 _____

第72回 4月3日(日)

「健康づくり支援のための薬剤師講座」

高齢者糖尿病

1. 「高齢者糖尿病患者をめぐる話題 —明日のあなたの姿?—」

神戸大学大学院医学研究科糖尿病・内分泌・総合内科学分野
講師 坂口 一彦 氏

2. 「高齢者糖尿病患者のケア —生活を支えるためにできること—」

兵庫県立尼崎総合医療センター 看護師長補佐
糖尿病看護認定看護師 恒吉 慶子 氏

3. 「薬剤師による高齢者糖尿病患者への関わりを再考する」

神戸市立医療センター中央市民病院薬剤部
副部長代行 奥貞 智 氏

4. 「高齢者糖尿病患者の運動について —転ばぬ先の運動?!—」

市立伊丹病院医療技術部医療技術室
リハビリテーション担当 副技師長 永嶋 道浩 氏

5. 「高齢者糖尿病患者の栄養管理」

神戸掖済会病院栄養管理部 主任管理栄養士 岡本 貴子 氏

第73回 5月8日(日)

ビギナーのためのフィジカルアセスメント

—聴診器の使い方から血圧・脈拍の測定まで—

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第74回 6月26日(日)

「健康づくり支援のための薬剤師講座」

骨粗鬆症

1. 「骨粗鬆症治療の現状と今後の展望」

近畿大学医学部奈良病院整形外科・リウマチ科
教授 宗圓 聡 氏

2. 「骨粗鬆による骨折防止、サルコペニア・フレイル防止のために ～地域薬局薬剤師が明日からできる取り組み～」

株式会社ジェンダーメディカルリサーチ
代表取締役 宮原 富士子 氏

3. 「運動器の視点から見た骨粗鬆症リエゾンサービス」

埼玉医科大学保健医療学部理学療法学科 教授 藤田 博暁 氏

第75回 9月25日(日)

「健康づくり支援のための薬剤師講座」

セルフメディケーション

1. 「健康サポート薬局の理念と今後の薬局のあり方～セルフメディケーションと受診勧奨について～」

一般社団法人兵庫県薬剤師会 常務理事 吉田 昌弘 氏

2. 「健康サポート薬局における OTC の位置づけと薬剤師の求められる役割・対応について」

第一三共ヘルスケア株式会社営業統括部情報グループ
主幹(薬剤師) 増田 基史 氏

第76回 10月16日(日)

「健康づくり支援のための薬剤師講座」

認知症

1. 「認知症の理解と当事者への対応について」

社会医療法人北斗会さわか院認知症疾患医療センター
山本 誉磨 氏

2. 「認知症の周辺症状(BPSD)に対する薬物治療」

社会医療法人北斗会さわか院 薬剤部長 天正 雅美 氏

第77回 11月13日(日)

中級者のためのフィジカルアセスメント

－呼吸音・腸音から薬の副作用を知る－

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

【2017(平成29)年度】 _____

第78回 4月9日(日)

ジェネリック医薬品についての選択の基準

1. 「ジェネリック医薬品の品質の科学的な検証」

一般財団法人医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス財団
大阪事業所 所長 四方田 千佳子 氏

2. 「バイオ医薬品とバイオシミラー –バイオシミラーはジェネリック医薬品と何が違うのか–」

一般財団法人医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス財団
大阪事業所標準品事業部 生物薬品課長 中川 ゆかり 氏

第79回 5月14日(日)

ビギナーのためのフィジカルアセスメント

－聴診器の使い方から血圧・脈拍の測定まで－

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

第80回 9月10日(日)

SGDによる服薬指導に必要な検査値の理解

<生活習慣病編>

1. 「講義とグループワーク」

神戸薬科大学医療薬学研究室 教授 力武 良行 氏

第81回 9月24日(日)

アトピー性皮膚炎の薬物治療と光線療法

1. 「皮膚炎症性疾患への光線治療の実際とその作用メカニズム」

神戸大学大学院医学研究科皮膚科学 教授 錦織 千佳子 氏

2. 「アトピー性皮膚炎治療における薬物療法の意義と方法 –適切な服薬指導が治療成功の鍵–」

地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪はびきの医療センター
皮膚科主任部長

アトピー・アレルギーセンター長 片岡 葉子 氏

第82回 10月15日(日)

喘息・COPDの最新治療と吸入指導のポイント

1. 「喘息・COPDの最新治療」

公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院
副院長・呼吸器センター長 福井 基成 氏

2. 「吸入薬(MDIとDPI)の解説と実践」

公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院薬剤部
主任 三井 克巳 氏

公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院薬剤部
主任 井戸 雅子 氏

第83回 11月19日(日)

中級者のためのフィジカルアセスメント

－呼吸音・腸音から薬の副作用を知る－

1. 「講義と実習」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

薬剤師実践塾

【2007（平成19）年度】

第6回 7月21日（土）、22日（日）、10月13日（土） 服薬指導と薬歴記載、薬歴とプロブレムリスト

7月21日（土）

講義

1. 「薬剤師倫理」
2. 「リスクマネージメント」

調剤実務研修

3. 「処方内容の把握」
4. 「疑義照会」
5. 「調剤の流れ」
6. 「調剤過誤防止」
7. 「グループディスカッション」

7月22日（日）

服薬指導研修

1. 「患者インタビュー」
2. 「服薬指導」
3. 「薬歴の取り方」

10月13日（土）

フォローアップセミナー

石川島播磨重工業健康保険組合播磨病院

薬剤長 西田 英之 氏

株式会社アインファーマシーズ 取締役

研修部 部長 土居 由有子 氏

神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

第7回 2月9日（土）

薬学生実務実習のカリキュラム作成と指導法の検討

1. 「実務実習モデルコアカリキュラム教育目標」

株式会社アインファーマシーズ 取締役

研修部 部長 土居 由有子 氏

【2008（平成20）年度】

第8回 6月8日（日）

保険調剤業務と安全対策、一般用医薬品

1. 「モデル・コアカリキュラムに基づいた実習の洗い出し（現状分析）」
2. 「モデル・コアカリキュラムに対応した薬局業務の検討」
3. 「実習対応業務の抽出と研修方法の作成」
4. 「研修ツールの作成」

5. 「グループ発表」

株式会社アインファーマシーズ 取締役

研修部 部長 土居 由有子 氏

第9回 7月12日（土）、7月13日（日）、11月1日（土）

「調剤」、「最終鑑査」、「疑義照会」、「服薬指導と薬歴記載」、「薬歴とプロブレムリスト」

7月12日（土）

講義

1. 「薬剤師倫理」
2. 「リスクマネージメント」

調剤実務研修

3. 「処方内容の把握」
4. 「疑義照会」
5. 「調剤の流れ」
6. 「調剤過誤防止」
7. 「グループディスカッション」

株式会社アインファーマシーズ 取締役

研修部 部長 土居 由有子 氏

石川島播磨重工業健康保険組合播磨病院

薬剤長 西田 英之 氏

神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

7月13日（日）

服薬指導

1. 「患者インタビュー」
2. 「SP（模擬患者）の協力による服薬指導研修」
3. 「薬歴の取り方」

株式会社アインファーマシーズ 取締役

研修部 部長 土居 由有子 氏

神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

11月1日（土）

1. 「フォローアップセミナー」

株式会社アインファーマシーズ 取締役

研修部 部長 土居 由有子 氏

神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

第10回 2月1日(日)

実務実習モデル・コアカリキュラム教育目標 一薬学生実務実習のカリキュラム作成と指導法の検討

1. 「モデル・コアカリキュラムに基づいた実習の洗い出し(現状分析)」
2. 「モデル・コアカリキュラムに対応した薬局業務の検討」
3. 「実習対応業務の抽出と研修方法の作成」
4. 「研修ツールの作成」
5. 「グループ発表」

株式会社アインファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子 氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

【2009(平成21)年度】

第11回 6月7日(日)

実務実習モデルコアカリキュラム教育目標 一薬学生実務実習のカリキュラム作成と指導法の検討

1. 「モデル・コアカリキュラムに基づいた実習の洗い出し(現状分析)」
2. 「モデル・コアカリキュラムに対応した薬局業務の検討」
3. 「実習対応業務の抽出と研修方法の作成」
4. 「研修ツールの作成」
5. 「グループ発表」

株式会社アインファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子 氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

第12回 7月11日(土)、7月12日(日)、9月27日(日)

新任者研修 薬剤師倫理、リスクマネジメント、調剤実務実習、服薬指導

患者インタビュー、SP(模擬患者)の協力による服薬指導研修、薬歴の取り方

7月11日(土)

講義

1. 「薬剤師倫理」
2. 「リスクマネジメント」

調剤実務研修

3. 「処方内容の把握」
4. 「疑義照会」
5. 「調剤の流れ」
6. 「調剤過誤防止」
7. 「グループディスカッション」

株式会社アインファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子 氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

7月12日(日)

1. 「患者インタビュー」
2. 「服薬指導研修」
3. 「薬歴の取り方」

株式会社アインファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子 氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

9月27日(日)

1. 「フォローアップセミナー SP(模擬患者)の協力による服薬指導」

株式会社アインファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子 氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

第13回 1月31日(日)

中堅者研修 実務実習モデルコアカリキュラム教育目標 一薬学生実務実習のカリキュラム作成と指導法の検討

1. 「モデル・コアカリキュラムに基づいた実習の洗い出し(現状分析)」
2. 「モデル・コアカリキュラムに対応した薬局業務の検討」
3. 「実習対応業務の抽出と研修方法の作成」
4. 「研修ツールの作成」
5. 「グループ発表」

株式会社アインファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子 氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

【2010(平成22)年度】

第14回 6月20日(日)

実務実習モデルコアカリキュラム教育目標 一薬学生実務実習のカリキュラム作成と指導法の検討

1. 「モデル・コアカリキュラムに基づいた実習の洗い出し(現状分析)」
2. 「モデル・コアカリキュラムに対応した薬局業務の検討」
3. 「実習対応業務の抽出と研修方法の作成」
4. 「研修ツールの作成」
5. 「グループ発表」

株式会社アインファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子 氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

第15回 7月10日(土)、11日(日)、9月26日(日)
新任者研修 薬剤師倫理、リスクマネジメント、調剤
実務実習、服薬指導

患者インタビュー、SP(模擬患者)の協力による服薬指
導研修、薬歴の取り方

7月10日(土)

1. 「薬剤師倫理」
2. 「リスクマネジメント」
3. 「調剤実務研修」

株式会社インファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

7月11日(日)

1. 「患者インタビュー」
2. 「服薬指導研修」
3. 「薬歴の取り方」

株式会社インファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

9月26日(日)

1. 「フォローアップセミナー SP(模擬患者)の協力による服薬指導」

株式会社インファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子氏
神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

第16回 2月6日(日)

中堅者研修 実務実習モデルコアカリキュラム教育目標
—薬学生実務実習のカリキュラム作成と指導法の検討—

1. 「参加者の聞き取り(第1期・第2期の内容)」
2. 「大学からのアンケート報告」
3. 「「薬局実務実習指導ガイド」を活用した実習」
4. 「教えにくいLSについて」
5. 「カウンター実習—一般用医薬品、健康食品等—」
6. 「地域における薬局の役割」

株式会社インファーマシーズ 取締役
研修部 部長 土居 由有子氏
神戸薬科大学薬学臨床教育センター 教授 濱口 常男氏

【2011(平成23)年度】

第17回 7月9日(土)、10日(日)、9月18日(日)
スキルアップ研修

7月9日(土)

1. 「薬剤師倫理・調剤過誤」
2. 「処方せん鑑査と調剤過誤対策」
3. 「調剤実技」

石川島播磨重工業健康保険組合播磨病院
薬剤長 西田 英之氏
株式会社インファーマシーズ医薬事業部
副事業部長 土居 由有子氏

7月10日(日)

1. 「薬剤師によるバイタルサインの基礎」
2. 「最終鑑査方法」
3. 「薬剤師の役割」

神戸薬科大学 非常勤講師 田中 良子氏
株式会社インファーマシーズ医薬事業部
副事業部長 土居 由有子氏

9月18日(日)

1. 「SP(模擬患者)の協力による服薬指導、患者情報の収集と薬歴の記載」

株式会社インファーマシーズ医薬事業部
副事業部長 土居 由有子氏

第18回 1月22日(日)

実務指導方法の検討

- ・地域における薬局の役割(主に在宅医療)
- ・長期実務実習での指導の問題点

1. 「参加者の聞き取り(1年目・2年目の経験)」
2. 「「薬局実務実習指導ガイド」を活用した実習」
3. 「教えにくいLSについて」
4. 「OTC」
5. 「地域における薬局の役割」
6. 「在宅医療」

株式会社インファーマシーズ医薬事業部
副事業部長 土居 由有子氏
株式会社インファーマシーズ薬局運営部
在宅医療課 山口 俊司氏
ウイズ・グロー 代表 山中 智香氏
株式会社J. みらいメディカル 取締役副社長 南 恵理子氏

【2012 (平成 24) 年度】

第19回 7月14日(土)、15日(日)

スキルアップ研修

7月14日(土)

1. 「薬剤師倫理と薬剤師の役割」
2. 「添付文書と処方せん鑑査」
3. 「調剤実技(錠剤、散剤、軟膏、シロップ剤)」

株式会社アインファーマシーズ医薬事業部
副事業部長 土居 由有子 氏

石川島播磨重工業健康保険組合播磨病院

薬剤長 西田 英之 氏

株式会社J. みらいメディカル 取締役副社長 南 恵理子 氏

7月15日(日)

1. 「薬剤師のメンタルケアと患者心理」
2. 「服薬指導」
3. 「服薬指導実践と薬歴記載」

株式会社アインファーマシーズ医薬事業部
副事業部長 土居 由有子 氏

ウイズ・グロー 代表 山中 智香 氏

第20回 11月4日(日)(台風17号の影響により、 9月30日から振替実施)

「在宅医療」

－初めての在宅訪問をするための基礎知識－

1. 「基礎解説(在宅医療の仕組みと保険算定)」
2. 「医師、ケアマネとの連携から報告書の作成」
3. 「高齢者の身体的特徴に合わせた服薬工夫(残薬管理、嚥下指導)」
4. 「症例検討」

株式会社アインファーマシーズ医薬事業部
副事業部長 土居 由有子 氏

株式会社J. みらいメディカル 取締役副社長 南 恵理子 氏

神戸薬科大学教員、その他指導薬剤師

第21回 1月27日(日)

「在宅医療」－バイタルサインに基づく症例検討－

1. 「高齢者の身体的特徴 認知症患者に対するケアと服薬指導」
2. 「シミュレーションボディーを用いたバイタルサインのとらえ方 検査値、呼吸音、心音、腹音等の基礎」
3. 「症例検討:服薬指導のロールプレイングフィジカルアセスメントを用いた症例検討」

株式会社アインファーマシーズ医薬事業部
副事業部長 土居 由有子 氏

株式会社アインファーマシーズ 金谷 法好 氏

神戸薬科大学 非常勤講師 田中 良子 氏

【2013 (平成 25) 年度】

第22回 7月13日(土)、14日(日)(受講応募者 少数のため中止)

スキルアップ研修

7月13日(土)

1. 「薬剤師倫理と薬剤師の役割」
2. 「薬剤師のメンタルケアと患者心理」
3. 「高齢者体験と服薬指導」

株式会社アインファーマシーズ医薬事業部

副事業部長 土居 由有子 氏

7月14日(日)

1. 「調剤実技(錠剤、散剤、軟膏剤、シロップ剤)」
2. 「服薬指導の説明と課題」
3. 「服薬指導実践と薬歴記載」

株式会社アインファーマシーズ医薬事業部

副事業部長 土居 由有子 氏

第23回 10月20日(日)

「在宅医療」

－初めての在宅訪問をするための基礎知識－

1. 「在宅医療の仕組みや介護保険制度」
2. 「高齢者の身体的特徴に合わせた服薬工夫」
3. 「在宅に必要な基礎知識の解説、および症例をもとにしたグループワーク」

株式会社J. みらいメディカル 取締役副社長 南 恵理子 氏

神戸薬科大学 非常勤講師 中尾 幸代 氏

ウイズ・グロー 代表 山中 智香 氏

神戸薬科大学 非常勤講師 松田 裕子 氏

神戸薬科大学 非常勤講師 村田 明子 氏

第24回 12月15日(日)(受講応募者少数のため 中止)

中堅者研修 教育スタッフ養成

1. 「新人教育のプログラムの開発と指導のポイント」

株式会社アインファーマシーズ医薬事業部

副事業部長 土居 由有子 氏

第25回 1月26日(日)

「在宅医療」

－実践的スキルアップ・フィジカルアセスメント研修－

1. 「脈拍、上肢の血圧測定、聴診器の使用法、ピークフローメーター」
2. 「自己血糖測定、吸入器操作、BLS基本説明」
3. 「高機能シミュレーター(生体反応及び薬物投与反応)」

4. 「輸液・栄養ルート、音叉・ハンマー（打腱器）検査」
 神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 白川 晶一 氏
 神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 講師 中本 賀寿夫 氏
 神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 講師 大道 真由美 氏

【2014（平成26）年度】 _____

第26回 5月18日（日）

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム
 在宅療養における薬剤師の役割 -薬剤師だからできる支援事例を交えて-

1. 「在宅支援における薬剤師の役割」
2. 「介護保険請求のしくみ」
3. 「主治医との対応」
4. 「事例紹介（患者宅訪問例）」
5. 「他職種との連携」
6. 「簡易懸濁法の実習」

株式会社タカサ在宅療養連携支援室 室長 高崎 潔子 氏

第27回 7月12日（土）、13日（日）

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム
 患者・多職種とのストレスフリーなコミュニケーション術
 ~タイプ別効果的な関わり方で仕事をスムーズに!~

7月12日（土）～基礎編～

1. 「私の中の5つの私と相手の中の5つのあなたの分析」
2. 「スムーズに続く会話と何故か途切れる会話」
3. 「伝わり易さと伝わりにくさの理由」
4. 「信頼関係のベースのエッセンス」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香 氏

7月13日（日）～実践編～

1. 「言いにくいことを伝える12の手法」
2. 「タイプ別コミュニケーションワーク」
3. 「折れない心を作る薬剤師のメンタルヘルスケア」
4. 「実際に現場で起こっていることの問題解決ワーク」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香 氏

第28回 1月25日（日）

「在宅医療」 -実践的スキルアップ-

1. 「講義：加齢にともなうからだの変化（特に感覚器）脈拍、上肢の血圧測定、聴診器の使用法、ピークフロメーター」
2. 「自己血糖測定、吸入器操作、BLS基本説明」
3. 「高機能シミュレーター（生体反応及び薬物投与反応）」
4. 「輸液・栄養ルート、音叉・ハンマー（打腱器）検査」

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 白川 晶一 氏
 神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 講師 中本 賀寿夫 氏
 神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 講師 大道 真由美 氏

第29回 2月15日（日）

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム
 「輸液調製の基礎と実践」

1. 「輸液の目的」
2. 「栄養補給を目的とする輸液」
3. 「TPNに必要な製剤 シングルバック製剤・ダブルバック製剤・脂肪乳剤配合ダブルバック製剤・ビタミン剤配合トリプル等」
4. 「演習問題」
5. 「検討症例」
6. 「注射薬混合実習」

神鋼病院診療技術部薬剤室 室長代行 長谷川 豊 氏

【2015（平成27）年度】 _____

第30回 4月26日（日）

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム
 在宅療養における薬剤師の役割 -薬剤師だからできる支援事例を交えて-

1. 「在宅支援における薬剤師の役割」
2. 「介護保険請求のしくみ」
3. 「事例紹介（患者宅訪問例）」
4. 「簡易懸濁法の実習」

株式会社タカサ在宅療養連携支援室 室長 高崎 潔子 氏

第31回 7月11日（土）、12日（日）

「在宅医療」を支援する指導薬剤師養成プログラム
 患者さんとの関わり・他職種との連携・協働のための問題解決ワークショップ ~現場の問題を心理的&論理的に解決してみましょう~

7月11日（土）

1. 「心理的解決法」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香 氏

7月12日（日）

1. 「明日からの業務改善 実践ワークショップ」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香 氏

第32回 1月24日（日）

「在宅医療」 -実践的スキルアップ-

1. 「講義：加齢にともなうからだの変化（特に感覚器）脈拍、上肢の血圧測定、聴診器の使用法、ピークフロメーター」
2. 「自己血糖測定、吸入器操作、BLS基本説明」
3. 「高機能シミュレーター（生体反応及び薬物投与反応）」
4. 「輸液・栄養ルート、音叉・ハンマー（打腱器）検査」

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 白川 晶一 氏
 神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 講師 内海 美保 氏
 神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 講師 中本 賀寿夫 氏

第33回 2月14日(日)

「在宅医療」研修「輸液調製の基礎と実践」

1. 「輸液の目的」
2. 「栄養補給を目的とする輸液」
3. 「TPNに必要な製剤 シングルバック製剤・ダブルバック製剤・脂肪乳剤配合ダブルバック製剤・ビタミン剤配合トリプル等」
4. 「演習問題」
5. 「検討症例」
6. 「注射薬混合実習」

社会医療法人神鋼記念会神鋼記念病院診療技術部薬剤室
室長 長谷川 豊 氏

【2016(平成28)年度】

第34回 4月24日(日)

「在宅医療」研修「これを聞けば安心!在宅訪問知恵袋」
【講義と実習】

1. 「在宅医療の基礎知識」
「介護保険の基礎」
「在宅医療を始める準備」
「訪問薬剤管理指導の流れ(請求関係・書類関係) etc」
2. 「在宅における薬剤師業務(SGD)」
「チーム医療の推進について」
「薬剤師による服薬支援を考える」
「嚥下障害について etc」
3. 「Let's try!簡易懸濁法」
「粉碎・脱カプセル調剤時のメリット」
「簡易懸濁法のメリット」
「簡易懸濁法を体験する etc.」

株式会社「みらいメディカル」取締役副社長
神戸薬科大学 非常勤講師 南 恵理子 氏
株式会社エビラファーマシー
神戸薬科大学 非常勤講師 中尾 幸代 氏
神戸薬科大学 臨床特任教授 韓 秀妃 氏

第35回 7月9日(土)、10日(日)

「在宅医療」研修 職場で役立つ3つのチカラ

—観察力・会話力・問題解決力—

7月9日(土) 理論編

1. 「心理的&倫理的手法」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香 氏

7月10日(日) 実践編

1. 「実際の問題を解決してみましょう」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香 氏

第36回 1月22日(日)

「在宅医療」—実践的スキルアップ—

1. 「講義:加齢にともなうからだの変化(特に感覚器)脈拍、上肢の血圧測定、聴診器の使用法、ピークフローメーター」
2. 「自己血糖測定、吸入器操作、BLS基本説明」
3. 「高機能シミュレーター(生体反応及び薬物投与反応)」
4. 「輸液・栄養ルート、音叉・ハンマー(打撃器)検査」

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 白川 晶一 氏
神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 講師 中本 賀寿夫 氏
神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 実習助手 鳥井 栄貴 氏

第37回 2月12日(日)

「在宅医療」研修「輸液調製の基礎と実践」

1. 「輸液の目的」
2. 「栄養補給を目的とする輸液」
3. 「TPNに必要な製剤 シングルバック製剤・ダブルバック製剤・脂肪乳剤配合ダブルバック製剤・ビタミン剤配合トリプル等」
4. 「演習問題」
5. 「検討症例」
6. 「注射薬混合実習」

社会福祉法人恩賜財団済生会奈良病院 薬剤部長 長谷川 豊 氏

【2017(平成29)年度】

第38回 4月23日(日)

薬局を飛び出そう!

在宅訪問届出から求められる薬剤師業務まで

【講義と実習】

1. 「在宅医療の基礎知識」
株式会社「みらいメディカル」取締役副社長
神戸薬科大学 非常勤講師 南 恵理子 氏
2. 「在宅における薬剤師業務 まずは服薬支援から医療・生活を支える」
株式会社エビラファーマシー
神戸薬科大学 非常勤講師 中尾 幸代 氏
3. 「嚥下障害のある患者さんに薬を飲んでいただくために Let's try!簡易懸濁法」
神戸薬科大学 臨床特任教授 韓 秀妃 氏

第39回 7月8日(土)、9日(日)

職場で役立つ3つのチカラ

—観察力・会話力・問題解決力—

7月8日(土) 理論編

1. 「人と人の違いからくるコミュニケーションロスの防ぎかた」
2. 「信頼されるベース作り 観察力の重要性 共感マップ」

3. 「相反する行動・思考ジレンマからの脱出法」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香氏

7月9日(日) 実践編

1. 「交流分析 エゴグラムによる対応パターン」
2. 「実際の皆さまの困った問題をグループで解決策を考える」

ウィズ・グロー 代表 山中 智香氏

第40回 8月11日(金・祝)

第1回症例検討会

1. 「薬剤師による患者個々の課題リストの設定と関連学術情報の検索・解析」

神戸薬科大学 副学長

薬剤学研究室 教授 岩川 精吾氏

2. 「臨床介入に必要な職種間チーム医療」

神戸市立西神戸医療センター薬剤部 吉野 新太郎氏

3. 「他職種からの質問に答えるだけでは不十分!患者の問題点は自分で見つけに行こう!

医師から抗菌薬の質問を受けた1症例を通して」

医療法人橘会東住吉森本病院薬剤科 主任 佐古 守人氏

4. 「在宅ターミナル症例における多職種連携」

幸生堂薬局 宮武 真也氏

5. 「情報交換会」

第41回 10月1日(日)

第2回症例検討会

1. 「糖尿病の急性代謝失調やシックデイへの服薬指導を考えよう!」

医療法人橘会東住吉森本病院薬剤科 主任 佐古 守人氏

2. 「症例から学ぶ!オピオイド鎮痛薬と薬剤師のミカタ」

淀川キリスト教病院薬剤部 係長 榎原 克也氏

3. 「情報交換会」

第42回 1月21日(日)

「在宅医療」一実践的スキルアップ

1. 「講義:加齢にともなうからだの変化(特に感覚器) 脈拍、上肢の血圧測定、聴診器の使用法、ピークフロメーター」
2. 「自己血糖測定、吸入器操作、BLS基本説明」
3. 「高機能シミュレーター(生体反応及び薬物投与反応)」
4. 「輸液・栄養ルート、音叉・ハンマー(打腱器)検査」

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 白川 晶一氏

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 講師 中本 賀寿夫

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 実習助手 鳥井 栄貴氏

第43回 1月28日(日)

第3回症例検討会

一薬剤師の職能向上を目指して

1. 「症例に基づき、薬学的管理を行う上での介入ポイントについて検討」

2. 「降圧薬の種類と特徴、使い分けについて検討」

神戸薬科大学エクステンションセンター生涯研修事業委員会

委員 長嶺 幸子氏

第44回 2月17日(土)

「輸液療法の実践」中級者対象

社会福祉法人恩賜財団済生会奈良病院 薬剤部長 長谷川 豊氏

第45回 2月18日(日)

「輸液療法の初歩」

社会福祉法人恩賜財団済生会奈良病院 薬剤部長 長谷川 豊氏

シンポジウム

【2008(平成20)年度】

第1回 11月8日(土)

「ジェネリック医薬品シンポジウム」一ジェネリック医薬品の普及促進をめぐる薬剤師の役割一

1. 「変貌するジェネリック医薬品が、日本の医療と薬剤師の運命を変えた」

新潟大学歯学部総合病院薬剤部 薬剤部長・教授

日本ジェネリック医薬品学会 副代表理事 佐藤 博氏

2. 「ジェネリック医薬品普及策と今後の展望一日本と欧米との制度的差異を視野に入れて一」

沢井製薬株式会社研究開発本部 企画・海外担当理事

明治薬科大学医療経済学教室 客員教授 陸 寿一氏

3. 「薬局薬剤師にとってのジェネリック医薬品一患者様にお勧めしようと思うけど…??一」

社団法人兵庫県薬剤師会 理事 藤澤 貴之氏

4. 「箕面市立病院におけるジェネリック医薬品 ー導入から現状についてー」

箕面市立病院薬剤部 主任 今井 秀樹 氏

5. 「ジェネリック医薬品の PTP 包装品及び開封後の保管方法はすべて同じで良いのか?」

神戸薬科大学製剤学研究室 講師 寺岡 麗子 氏

6. 「パネルディスカッション」

総合司会:

社団法人兵庫県薬剤師会 会長 東 和夫 氏
株式会社メディホープ 代表取締役 田中 良子 氏

【2009 (平成 21) 年度】

第 2 回 7 月 26 日 (日)

ー薬剤師はバイタルサインを薬物治療にどのように活かすかー

1. 「バイタルサインシミュレータによる実演」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 教授 江本 憲昭 氏

2. 「これからの薬剤師に求められること」

社団法人日本病院薬剤師会 会長 堀内 龍也 氏

3. 「バイタルサインと薬剤師業務 ー薬学における医師の立場からー」

東北薬科大学病態生理学教室 教授 大野 勲 氏

4. 「患者が安心して薬物療法を受けるために ー今、薬剤師に求められる新しい業務展開ー」

亀田メディカルセンター薬剤管理部・薬剤部
クリニック部長・治験管理センター長 佐々木 忠徳 氏

5. 「臨床能力を有する実践型薬剤師養成を目指した攻めのベッドサイド実習」

九州保健福祉大学薬学部薬学科臨床薬学第二講座
教授 高村 徳人 氏

6. 「バイタルサインは薬剤師の在宅医療参画へのパスポートになるー薬剤師のための give and receive strategy ー」

一般社団法人薬剤師あゆみの会 理事長 狭間 研至 氏

7. 「パネルディスカッション」

総合司会:

社団法人兵庫県病院薬剤師会 会長 西田 英之 氏
神戸大学医学部附属病院 教授・薬剤部長 平井 みどり 氏

【2010 (平成 22) 年度】

第 3 回 7 月 25 日 (日)

ープライマリ・ケアにおける薬剤師の役割ー

1. 「プライマリ・ケアで期待される薬剤師の役割」

明治薬科大学 特任客員教授
日本プライマリ・ケア連合学会 理事 矢澤 一博 氏

2. 「地域での医療のために診療所医師と地域の薬剤師との連携のあり方を考える」

社団法人兵庫県医師会 副会長
兵庫県プライマリ・ケア協議会 代表幹事 谷澤 義弘 氏

3. 「地域の薬剤師に伝えたいこと ー退院調整看護師の立場からー」

群馬大学医学部附属病院患者支援センター
看護師長 須川 美枝子 氏

4. 「地域を支える薬剤師に果たして欲しい役割 ーケアマネジャーの立場からー」

株式会社ファークロス薬局成城ファーマシー祖師谷店
主任介護専門員 丸山 節子 氏

5. 「地域を支える薬剤師の情熱と役割 ー患者さんのためにやるぜよ!ー」

有限会社くろしお薬局 代表取締役副社長
社団法人高知県薬剤師会 常務理事
社団法人日本薬剤師会高齢者・介護保険等検討会 委員
川添 哲嗣 氏

6. 「パネルディスカッション」

総合司会:

社団法人兵庫県薬剤師会 会長 東 和夫 氏
医療法人社団実幸会石橋クリニック 院長
日本プライマリ・ケア連合学会 副理事長 石橋 幸滋 氏

【2011 (平成 23) 年度】

第 4 回 7 月 24 日 (日)

ー臨床思考能力を持った薬剤師の育成に向けてー

1. 「臨床思考能力を現場で育てる 成人教育における指導法」

財団法人倉敷中央病院総合診療科・医師教育研修部
主任部長 福岡 敏雄 氏

2. 「臨床思考 --- 心と心を紡ぐもの」

昭和大学 客員教授
東京女子医科大学 診療教授 中島 宏昭 氏

3. 「倉敷中央病院における臨床看護実践能力を高める取り組みについて」

財団法人倉敷中央病院看護管理室 副看護部長 高村 洋子 氏

4. 「薬物治療モニタリングに必要なスキルとは」

昭和大学横浜市北部病院薬局 薬剤師 伊野 陽子 氏

5. 「抗菌薬適正使用における薬剤師の役割と今後の展望」

神戸大学医学部附属病院薬剤部
感染制御部薬品研究室 室長 山下 和彦 氏

6. 「パネルディスカッション」

総合司会:

社団法人兵庫県薬剤師会 会長 東 和夫 氏
神戸薬科大学医療薬学研究室 教授 水野 成人 氏

【2012 (平成 24) 年度】

第5回 7月22日(日)

在宅医療における薬剤師の役割

—超高齢化社会を迎えるにあたって—

1. 「医師の目から見た薬剤師の役割」
医療法人財団夕張希望の杜 理事長
夕張医療センター センター長 村上 智彦 氏
2. 「夕張モデル 薬剤師が実践する在宅医療」
株式会社アインファーマシーズ薬局運営部在宅医療課
課長 山口 俊司 氏
3. 「在宅緩和ケアでの薬局薬剤師の使命を果たすために退院時共同指導カンファレンスを有効に活用しましょう!」
水仙薬局 薬局長・管理薬剤師
薬事情報センター センター長 木村 嘉明 氏
4. 「在宅医療における薬剤師展望—診療報酬改定を受けて—」
東京女子医科大学病院薬剤部臨床薬剤管理室 伊東 俊雅 氏
5. 「在宅支援のための多職種連携 —神戸市垂水区での取り組みと薬剤師への期待—」
なかむらクリニック 院長 中村 治正 氏
6. 「在宅医療チームが薬剤師に期待すること —訪問看護師の立場から—」
西部しあわせ訪問看護ステーション 訪問看護師 金田 永子 氏
7. 「大学教育での在宅医療の取組」
神戸薬科大学薬学臨床教育センター 教授 濱口 常男 氏
8. 「パネルディスカッション」
総合司会：
有限会社アズマ薬局
社団法人兵庫県薬剤師会 前会長 東 和夫 氏
神戸薬科大学薬剤学研究室 教授 岩川 精吾 氏

【2013 (平成 25) 年度】

第6回 7月21日(日)

緩和ケアにおける今後の薬剤師のかかわり

1. 「緩和ケアの真髄と実践」
大阪大学大学院医学系研究科緩和医療学寄附講座
教授 恒藤 暁 氏
2. 「緩和ケアにおける最新の薬物療法」
市立芦屋病院薬剤科 部長
緩和薬物療法認定薬剤師 岡本 禎晃 氏
3. 「在宅での緩和ケア」
医療法人松尾クリニック 院長 松尾 美由起 氏
4. 「在宅緩和ケアにおける訪問看護の役割」
医療法人松尾クリニック訪問看護ステーション来夢・
ケアプランセンター 統括所長 矢田 みゆき 氏

5. 「在宅緩和ケアにおける薬剤師の役割 (薬薬連携を含めて)」
県立広島病院薬剤科 笠原 庸子 氏

6. 「パネルディスカッション」

総合司会：

株式会社メディ・ホープ 代表取締役
神戸薬科大学 非常勤講師 田中 良子 氏
神戸薬科大学薬剤学研究室 教授 岩川 精吾 氏

【2014 (平成 26) 年度】

第7回 6月29日(日)

がんのチーム医療

1. 「大腸癌の抗がん剤治療および副作用マネージメント」
京都府立医科大学附属病院化学療法部 講師 吉田 直久 氏
2. 「がん治療における薬剤師の役割 (化学療法・支持療法・緩和ケア)」
京都府立医科大学附属病院薬剤部・疼痛緩和医療部
がん専門薬剤師 神林 祐子 氏
3. 「外来および入院化学療法における看護ケア」
京都府立医科大学附属病院看護部
がん化学療法看護認定看護師 菅谷 和子 氏
4. 「化学療法時の種々の疼痛に対する治療」
京都府立医科大学附属病院疼痛緩和医療部
副部長 上野 博司 氏
5. 「化学療法中の患者の不安と看護師の役割」
京都府立医科大学看護学科 准教授 光木 幸子 氏
6. 「パネルディスカッション 症例提示 stage IV 大腸癌の一例」
総合司会：

株式会社メディ・ホープ 代表取締役
神戸薬科大学 非常勤講師 田中 良子 氏
神戸薬科大学医療薬学研究室 教授 水野 成人 氏

【2015 (平成 27) 年度】

第8回 6月14日(日)

呼吸器疾患における吸入指導について

—地域における呼吸器ネットワーク—

1. 「吸入療法の現状と課題、そして吸入指導ネットワークの立ち上げへ」
公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院
副院長・呼吸器センター長 福井 基成 氏
2. 「吸入指導ネットワーク—病院薬剤師の立場から—」
公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院薬剤部
主任 三井 克巳 氏

3. 「実際に吸入手技を体験してみよう」

公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院薬剤部
主任 井戸 雅子 氏

4. 「吸入指導ネットワーク－薬剤師会の立場から－」

北区北薬剤師会 常務理事
岡部薬局 岡部 まさえ 氏

5. 「吸入指導ネットワーク－保険薬局の立場から－」

北区北薬剤師会 常務理事
コヤマ薬局 小山 美鈴 氏

6. 「大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター喘息チームの取り組み」

大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター薬局 嶋津 史恵 氏

7. 「パネルディスカッション」

総合司会：

公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院薬剤部
薬剤部長 尾上 雅英 氏
神戸薬科大学薬剤学研究室 教授 岩川 精吾 氏

【2016 (平成 28) 年度】

第9回 6月12日(日)

在宅における摂食嚥下障害と多職種連携

1. 「地域における嚥下障害への取り組みと課題－10数年の関わりから見えてきたもの－」

柴耳鼻咽喉科 柴 裕子 氏

2. 「咀嚼と口腔ケアの重要性」

東灘区歯科医師会地域医療委員会 理事 登利 佳央 氏

3. 「摂食・嚥下と「薬」 在宅療養支援への薬剤師の関わり」

有限会社メディックス白石 けや木薬局
代表取締役・管理薬剤師 白石 丈也 氏

4. 「誤嚥性肺炎に対する呼吸リハビリテーション」

神戸大学大学院保健学研究科地域保健学領域
教授 石川 朗 氏

5. 「在宅での誤嚥性肺炎の現状と連携」

訪問看護ステーションひより 訪問看護師 岩瀬 紀子 氏

6. 「美味しくなくっちゃ!－訪問栄養士の挑戦－」

地域栄養ケアセンターとよだ 管理栄養士 豊田 綾子 氏

7. 「パネルディスカッション」

総合司会：

一般社団法人兵庫県薬剤師会 会長 赤松 路子 氏
神戸薬科大学 副学長
薬剤学研究室 教授 岩川 精吾 氏

【2017 (平成 29) 年度】

第10回 6月25日(日)

健康サポート薬局について

－あれから1年、皆さんの取り組みは?－

1. 「地域包括ケアと期待される薬剤師像－健康サポート薬局の目指すところ－」

厚生労働省医薬情報室 室長 紀平 哲也 氏

2. 「健康サポート薬局構想、今なぜ?と未来」

フタツカ薬局グループ 代表取締役社長 二塚 安子 氏

3. 「“健康サポート薬局”に教えてもらったこと」

クオール株式会社健康サポート薬局推進本部
健康サポート薬局推進部 部長 中村 貴之 氏

4. 「健康サポート活動 いろいろチャレンジしてみました」

総合メディカル株式会社薬局事業本部薬局企画部
部長 下新原 統志 氏

5. 「健康サポート薬局：地域住民と行政・医療・介護機関との架け橋」

株式会社アインファーマシーズ大阪支店 支店長 藤原 武 氏

6. 「一個人薬局の地域へのかかわり 病診薬連携システムを含めて」

みどり薬局 管理薬剤師 篠原 裕子 氏

7. 「神戸薬科大学における健康サポート活動の取り組み」

神戸薬科大学 学長 北河 修治 氏

8. 「パネルディスカッション」

総合司会：

神戸薬科大学 副学長
薬剤学研究室 教授 岩川 精吾 氏
株式会社メディ・ホープ 代表取締役 田中 良子 氏

健康食品講座

【2010（平成22）年度】

第1回 8月22日（日）

健康食品に関する最近の話題と製品情報

1. 「ヒアルロン酸やコンドロイチンなどの糖鎖の機能ー若さと健康を保つには必須だけど……」

神戸薬科大学学生化学研究室 教授 北川 裕之 氏

2. 「食酢の健康機能エビデンス」

株式会社ミツカングループ本社中央研究所機能素材チーム
チームリーダー 岸 幹也 氏

第2回 11月7日（日）

健康食品に関する最近の話題と製品情報

1. 「シロタ株のプロバイオティクス機能」

株式会社ヤクルト本社広報室 主事 河見 浩司郎 氏

2. 「最近の健康食品関連情報について」

財団法人日本健康栄養食品協会健康食品部 部長 加藤 博 氏

第3回 2月26日（土）、27日（日）、3月5日（土）、6日（日）、

健康食品に関する最近の話題と製品情報

2月26日（土）

1. 「健康食品とは」
2. 「リスク・アナリーシスによる食品の安全性確保」
財団法人日本健康・栄養食品協会健康食品部 部長 加藤 博 氏
3. 「健康食品の法規制 消費者基本法、消費者契約法、特定商取引法、不当景品類及び不当表示防止法、JAS法、PL法」

ヤエガキ株式会社機能性食品研究開発部
食品機能研究室 石 知史 氏

4. 「薬事法、健康増進法」

神戸薬科大学エクステンションセンター 准教授 長嶺 幸子 氏

5. 「食品衛生法、食品衛生管理、食中毒発生防止」

神戸薬科大学衛生化学研究室 准教授 津川 尚子 氏

2月27日（日）

1. 「食品成分の機能性、有用性、免疫能の獲得」
神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 徳山 尚吾 氏
2. 「栄養状態の評価、判定（健康及び疾病時）」

神戸薬科大学 副学長
病態生化学研究室 教授 太田 光熙 氏

3. 「栄養パラメーターによる評価、判定 食事摂取基準と栄養補給」

滋賀県立大学人間文化学部 教授 柴田 克己 氏

3月5日（土）

1. 「食品保健の概念と健康増進への健康食品の活用（生活習慣病予備群における栄養補給）」

神戸大学医学部附属病院薬剤部
薬剤部長・教授 平井 みどり 氏

2. 「保健機能食品（栄養機能食品・特定保健用食品）特別用途食品について」

財団法人日本健康・栄養食品協会特定保健用食品部
部長 橘川 俊明 氏

3. 「臨床栄養学・病態栄養学（生活習慣病・生活習慣病予備群を中心に）」

京都女子大学家政学部食物栄養学科 教授 田中 清 氏

3月6日（日）

1. 「健康食品の企画・開発、製造プロセス・管理」

日本サプリメント株式会社

京都学園大学バイオ環境学部産学連携研究室 藤田 裕之 氏

2. 「食品の健康強調表示と科学的根拠 加工食品の表示、栄養成分の表示」

株式会社王健 代表取締役

鈴鹿医療科学大学保健衛生部 非常勤講師 柴田 勝 氏

3. 「健康食品の安全性・相互作用」

東京大学薬学部 講師

神戸薬科大学エクステンションセンター生涯教育企画委員会 委員

三木 晶子 氏

【2011（平成23）年度】

第4回 8月21日（日）

健康食品講座

1. 「素材成分の有効性のエビデンスーデータベースの活用法ー」

独立行政法人国立健康・栄養研究所情報センター
センター長 梅垣 敬三 氏

2. 「健康食品とメタボリックシンドローム」

神戸薬科大学 副学長
病態生化学研究室 教授 太田 光熙 氏

第5回 11月13日(日)

健康食品講座

1. 「高齢者の栄養状態の評価と判定」

兵庫県立こども病院総務部栄養指導課
主任・管理栄養士 鳥井 隆志 氏

2. 「小児の食物アレルギー対処方法」

神戸薬科大学臨床薬学研究室 講師 八木 敬子 氏

第6回 2月25日(土)、26日(日)、3月3日(土)、
4日(日)

健康食品講座

2月25日(土)

1. 「健康食品とは」

「リスク・アナリーシスによる食品の安全性確保」

公益財団法人日本健康・栄養食品協会 事務局長 青山 充 氏

2. 「食品衛生法、食品衛生管理、食中毒発生防止」

神戸薬科大学衛生化学研究室 准教授 津川 尚子 氏

3. 「ガン予防と機能性食品」

愛知学院大学心身科学部 部長・教授 大澤 俊彦 氏

2月26日(日)

1. 「食品成分の機能性、有用性とそれらに対するエビデ
ンスについて」

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 徳山 尚吾 氏

2. 「臨床栄養学・病態栄養学（生活習慣病・生活習慣
病予備群を中心に）」

京都女子大学家政学部食物栄養学科 教授 田中 清 氏

3. 「イチヨウ葉エキスとの相互作用から見た健康食品の実
態」

武庫川女子大学薬学部健康生命薬科学科薬理学講座2
学科長・教授 篠塚 和正 氏

4. 「食品保健の概念と健康増進への健康食品の活用(生
活習慣病予備群における栄養補給)」

神戸大学医学部附属病院薬剤部
薬剤部長・教授 平井 みどり 氏

3月3日(土)

1. 「骨粗鬆症・骨折予防のための機能性食品」

京都光華女子大学健康科学部健康栄養学科
教授 廣田 孝子 氏

2. 「栄養状態の評価、判定（健康及び疾病時）」

神戸薬科大学 副学長
病態生化学研究室 教授 太田 光熙 氏

3. 「サプリメントに含まれるハーブ類の副作用とその健康
被害」

千葉科学大学健康管理センター所長・薬学部教授 安田 一郎 氏

4. 「サプリメントと疫学情報」

日本バプテスト病院内科 医長 高垣 伸匡 氏

3月4日(日)

1. 「皮膚老化と機能性食品：ポリフェノールの吸収と皮膚
老化防御その他の生理作用」

神戸薬科大学製剤学研究室 教授 北河 修治 氏

2. 「カロテノイド類の発ガン抑制作用」

立命館大学 教授 西野 輔翼 氏

3. 「ワルファリンと健康食品、サプリメント、食品との相互
作用」

東京大学大学院薬学系研究科医薬品情報学講座
特任講師 三木 晶子 氏

4. 「健康食品の企画・開発、製造プロセス・管理」

富士フィルム株式会社医薬品・ヘルスケア研究所
主任研究員 植田 文教 氏

【2012（平成24）年度】

第7回 8月19日(日)

**健康食品講座「糖尿病、肥満、メタボリックシンドローム
と機能性食品について」**

1. 「糖尿病と健康食品：飲んでいるのかいないのか、効
いているのかいないのか」

広島大学病院内分泌・糖尿病内科 診療講師 中西 修平 氏

2. 「ポリフェノールの機能性とヒトに対する有効性」

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
教授 寺尾 純二 氏

3. 「肥満・エネルギー代謝と食品機能」

京都大学大学院農学研究科食品生物科学専攻
教授 河田 照雄 氏

第8回 11月11日(日)

健康食品講座

(1) 歯周病、ドライマウス予防のための機能性食品

(2) ヘリコバクターピロリ感染症予防のための機能性食品

1. 「ピロリ菌と機能性食品」

東京警察病院消化器科 副部長 鈴木 剛 氏

2. 「抗加齢医療における機能性食品のドライマウス改善
の試み」

鶴見大学歯学部口腔病理学講座 講師 梁 洪淵 氏

3. 「歯周病予防のための機能性食品」

大阪大学大学院歯学研究科予防歯科学教室
准教授 永田 英樹 氏

第9回 2月23日(土)、24日(日)、3月2日(土)、
3日(日)

健康食品講座

2月23日(土)

1. 「健康食品とは」
2. 「食品の安全性確保 (リスクアナリシス・衛生管理・食中毒)」

公益財団法人日本健康・栄養食品協会 事務局長 青山 充 氏

3. 「健康食品の法的関わり」

神戸薬科大学エクステンションセンター
特任准教授 長嶺 幸子 氏

2月24日(日)

1. 「健康食品の基礎研究とその応用」

神戸大学医学部附属病院薬剤部
薬剤部長・教授 平井 みどり 氏

2. 「食品成分の機能性、有用性とそれらに対するエビデンスについて」

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 徳山 尚吾 氏

3. 「エビデンスに基づく機能性食品の有効性と薬・食相互作用」

静岡県立大学 理事兼副学長・薬学部 教授 山田 静雄 氏

3月2日(土)

1. 「眼科領域で有用な機能性食品について」

宝塚第一病院 眼科部長 川崎 佳巳 氏

2. 「シクロデキストリンによる栄養補助成分・スキンケア成分の化学・生化学特性の改善」

株式会社シクロケム 代表取締役社長
神戸大学大学院医学研究科 客員教授

神戸女子大学健康福祉学部 客員教授 寺尾 啓二 氏

3. 「糖尿病 代謝疾患 最近の話題」

わたらい医院 院長 渡會 隆夫 氏

3月3日(日)

1. 「健康食品の開発と品質保証」

サントリーウエルネス株式会社健康科学センター
品質部長 児玉 亨 氏

2. 「栄養状態の評価と判定」

神戸薬科大学 副学長
病態生化学研究室 教授 太田 光熙 氏

3. 「蜂産品 (ローヤルゼリーとプロポリス) の脳神経系への作用」

岐阜薬科大学分子生物学研究室 教授 古川 昭栄 氏

【2013 (平成 25) 年度】

第10回 8月4日(日)

健康食品に関する最近の話題と製品情報

1. 「無承認無許可医薬品にあたる健康食品について」

東京都健康安全研究センター薬事環境科学部医薬品研究科
科長 守安 貴子 氏

2. 「世界が注目する栄養バランスが優れた日本型食生活～食事バランスガイドを活用して実践～」

福岡女子大学大学院人間環境学研究所国際文理学部食・健康学科
教授 早瀬 仁美 氏

第11回 2月22日(土)、23日(日)、3月1日(土)、
2日(日)

健康食品講座

2月22日(土)

1. 「健康食品にかかわる法律 その1」
2. 「健康食品にかかわる法律 その2」

神戸常盤大学保健科学部医療検査学科 客員教授
神戸学院大学栄養学部 客員教授 永尾 暢夫 氏

3. 「健康食品 無承認無許可医薬品の取締について」

神戸薬科大学エクステンションセンター 臨床教授 長嶺 幸子 氏

2月23日(日)

1. 「特定保健用食品と美容食品の研究開発」

株式会社資生堂新領域研究センター食品開発グループ
副主任研究員 中島 優哉 氏

2. 「栄養・食品の健康増進に対する効果とリスク」

神戸大学医学部附属病院薬剤部
薬剤部長・教授 平井 みどり 氏

3. 「カロテノイドと健康」

一般財団法人生産開発科学研究所食物機能研究室
室長・主任研究員 眞岡 孝至 氏

3月1日(土)

1. 「がん医療領域における補完代替医療としてのサプリメント・健康食品の現状と今後の展望」

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 徳山 尚吾 氏

2. 「微量の血液で病気の診断 メタボロミクスの医療応用」

神戸大学大学院医学研究科病因病態解析学分野
分野長・准教授 吉田 優 氏

3. 「薬と健康食品の飲み合わせ、薬と薬の飲み合わせどちらが怖い？」

東北薬科大学環境衛生学教室 教授 永田 清 氏

3月2日(日)

1. 「スポーツにおける健康食品・サプリメントー 2020年東京オリンピックに向けてー」

一般社団法人日本社会人アメリカンフットボール協会
強化部安全対策副委員長 スポーツファーマシスト
特定非営利活動法人西宮フットボールクラブ
西宮ブルーインズ トレーナー 渡邊 恵理奈氏

2. 「食物アレルギーの基礎知識と対応の実際」

同志社女子大学生活科学部食物栄養科学科
教授 伊藤 節子氏

3. 「最適な2型糖尿病治療を目指してー食事療法から薬物療法までー」

京都府立医科大学内分・代謝内科学 講師 福井 道明氏

【2014(平成26)年度】 _____

第12回 7月27日(日)

健康食品に関する最近の話題と製品情報

1. 「難消化性デキストリンの糖尿病予防効果」

松谷化学工業株式会社研究所第一部2グループ
課長 岸本 由香氏

2. 「栄養状態の評価、判定(健康及び疾病時)」

神戸薬科大学 特任教授 太田 光熙氏

第13回 2月21日(土)、22日(日)、28日(土)、
3月1日(日)

健康食品講座

2月21日(土)

1. 「健康食品にかかわる法律 その1」

2. 「健康食品にかかわる法律 その2」

神戸常盤大学保健科学部医療検査学科 客員教授
神戸学院大学栄養学部 客員教授 永尾 暢夫氏

3. 「健康食品 無承認無許可医薬品の取締について」

神戸薬科大学エクステンションセンター 臨床教授 長嶺 幸子氏

2月22日(日)

1. 「なぜアスタキサンチンか。抗酸化剤の注目される理由。
基礎、臨床のデータから」

中村麻布十番クリニック 院長 中村 光康氏

2. 「緑茶の効能:茶カテキンの認知症に対する効果を中心」

静岡県立大学薬学部医薬品情報解析学分野 教授 山田 浩氏

3. 「『野菜がなぜ体に良いのか?』~新しい視点で考える~」

京都大学大学院農学研究科食品生物科学専攻
助教 村上 明氏

2月28日(土)

1. 「睡眠改善機能食品の開発研究:現状と展望」

筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構 教授 裏出 良博氏

2. 「新世代栄養学に基づく食品の機能性研究と応用開発」

早稲田大学ナノ理工学研究機構規範科学総合研究所
ヘルスフード科学部門研究院 教授 矢澤 一良氏

3. 「健康食品とポリフェノール」

神戸薬科大学病態生化学研究室 講師 藤波 綾氏

3月1日(日)

1. 「がん医療領域における補完代替医療としてのサプリメント・健康食品の現状と今後の展望」

神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 徳山 尚吾氏

2. 「食品の新たな機能性表示制度の概要と国際比較(主に米国のダイエタリーサプリメント健康教育法との比較)」

株式会社グローバルニュートリショングループ
代表取締役 武田 猛氏

3. 「中高年の方の運動による疲労回復のためのサプリメントの内容と摂取のタイミング」

名古屋経済大学人間生活科学部管理栄養学科
教授 堀尾 拓之氏

【2015(平成27)年度】 _____

第14回 7月26日(日)

健康食品に関する最近の話題と製品情報

1. 「女性の健康とエクオールー大豆イソフラボンと腸内フローラ」

大塚製薬株式会社ニュートラシューティカルズ事業部
消費者製品事業企画室 ディレクター 堀尾 健氏

2. 「食生活で変わる美容と健康ーエクオールについてー」

株式会社ヘルスケアシステムズ営業企画部
課長 細谷 吉勝氏

3. 「薬品分析の現場よりー健康食品中の医薬品成分から危険ドラッグまでー」

大阪府立公衆衛生研究所衛生化学部薬事指導課
主任研究員 土井 崇広氏

第15回 2月20日(土)、21日(日)、27日(土)、
28日(日)

健康食品講座

2月20日(土)

1. 「健康食品にかかわる法律 その1」

2. 「健康食品にかかわる法律 その2」

大阪府藤井寺保健所生活衛生室 室長 中田 裕紀氏

3. 「健康食品 無承認無許可医薬品の取締りに関して」

神戸薬科大学エクステンションセンター 臨床教授 長嶺 幸子氏

2月21日(日)

1. 「男性にも女性にもマカ~ MACAXS® (マカ・エキスパウダー) の食品機能性と安全性エビデンスの紹介~」
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科先端病態解析学講座
獣医繁殖学教室 教授 玉田 尋通 氏
2. 「カレー (ターメリック) は万能薬?食品の無限の可能性を探る」
京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
准教授 上久保 靖彦 氏
3. 「健康寿命を延伸する野菜のチカラ」
デザイナーフーズ株式会社 代表取締役社長
デリカフーズ株式会社 代表取締役社長 丹羽 真清 氏

2月27日(土)

1. 「脂肪酸の新たなる健康食品としての可能性」
神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 徳山 尚吾 氏
2. 「現代病の王様 メタボ から肝臓を守るための秘策とは?」
地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪府立成人病センター
副院長 片山 和宏 氏
3. 「メディカルハーブの機能性と統合医療における臨床応用の可能性」
東邦大学薬学部生薬学教室 客員講師
グリーンプラスコ株式会社 代表取締役 林 真一郎 氏

2月28日(日)

1. 「食品機能性から副作用研究への展開~ネガティブデータを見つめ、拾い、育てる~」
兵庫県立大学環境人間学部食環境栄養課程フードホルミシス研究室
教授 村上 明 氏
2. 「健康食品・サプリメントと医薬品との相互作用」
静岡県立大学薬学部薬学科 准教授 内田 信也 氏
3. 「地場野菜の健康機能性の探索と応用」
金沢大学大学院医薬保健学総合研究科環境健康科学講座
特任教授 太田 富久 氏

【2016 (平成 28) 年度】

第16回 7月24日(日)

健康食品に関する最近の話題と製品情報

1. 「薬剤師による健康食品の価値創造」
神戸大学医学部附属病院臨床研究推進センター TR・RS 部門
特命准教授 保多 隆裕 氏
2. 「薬食同源 一薬用食品にメタボ予防物質を探る」
京都薬科大学 名誉教授 吉川 雅之 氏

第17回 2月18日(土)、19日(日)、25日(土)、
26日(日)

健康食品講座

2月18日(土)

1. 「健康食品にかかわる法律 その1」
2. 「健康食品にかかわる法律 その2」
大阪樟蔭女子大学健康栄養学部健康栄養学科公衆衛生学研究室
教授 津川 尚子 氏
3. 「健康食品 無承認無許可医薬品の取締りについて」
兵庫県健康福祉部健康局 薬務課長 稲田 忠明 氏

2月19日(日)

1. 「健康のために望ましい食事とは ~食事摂取基準および食事バランスガイドから探る~」
大阪樟蔭女子大学健康栄養学部健康栄養学科応用栄養学研究室
准教授 栗原 晶子 氏
2. 「発酵食品の持つ新しい機能の魅力」
愛知学院大学心身科学部健康栄養学科 教授 大澤 俊彦 氏
3. 「ミカンを食べる健康維持 ~柑橘成分の保健機能について~」
国立大学法人愛媛大学大学院農学研究科生命機能学専攻
健康機能栄養科学特別コース 教授 菅原 卓也 氏

2月25日(土)

1. 「健康食品成分の生体への吸収と利用性 -とくにポリフェノールについて-」
甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科
教授 寺尾 純二 氏
2. 「健やかで美しい肌をいつまでもたもつために」
株式会社 CIEL 岡野 由利 氏
3. 「食品、生薬の分析を真剣にやってみると? (意外?だった分析結果)」
兵庫医療大学薬学部医療薬学科 教授 青木 俊二 氏

2月26日(日)

1. 「EPA・DHA の健康作用の多様性と将来展望」
神戸学院大学薬学部臨床薬学部門 教授 徳山 尚吾 氏
2. 「健康食品と微量元素~生命はなぜ元素を必要としてきたか?~」
京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘 氏
3. 「ホスピタルアロマセラピー:病院薬剤師による精油の活用事例報告 ~患者の QOL 向上のための精油の活用 不眠対策編~」
医療法人長谷川会湘南ホスピタル薬剤科
薬剤科長 佐藤 玲子 氏

【2017 (平成 29) 年度】—————

第 18 回 7 月 23 日 (日)

「健康食品に関する最近の話題と製品情報」

健康食品領域研修項目：大項目II

1. 「腸から病気を予防できる? —腸内細菌と生活習慣病の関係—」

神戸薬科大学医療薬学研究室 准教授 佐々木 直人 氏

2. 「ポリフェノールの多彩な魅力—ポリフェノールの王様アスタバカルコンを通して—」

神戸薬科大学病態生化学研究室 講師 藤波 綾 氏

3. 「機能性表示食品制度と海外のサプリメント制度」

一般社団法人日本健康食品規格協会 理事長 池田 秀子 氏

第 19 回 9 月 2 日 (土)

「健康食品に関する最近の話題と製品情報」

健康食品領域研修項目：大項目I

1. 「健康食品にかかわる法律 その 1・その 2」

大阪樟蔭女子大学健康栄養学部健康栄養学科公衆衛生学研究室
教授 津川 尚子 氏

2. 「健康食品 無承認無許可医薬品の取締りについて」

兵庫県立健康生活科学研究所健康科学研究センター
副研究所長 稲田 忠明 氏

第 20 回 9 月 3 日 (日)

「健康食品に関する最近の話題と製品情報」

健康食品領域研修項目：大項目II

1. 「腸内環境とプロバイオティクス —古くて新しい乳酸菌のお話—」

ピオフェルミン製薬株式会社営業推進部
学術支援グループ・製品情報グループ 高田 千秋 氏

2. 「癌補完治療の試み —マイタケ含有成分の免疫細胞活性化による癌治療の基礎と人臨床試験の現状—」

神戸薬科大学 名誉教授
鹿児島大学大学院医歯学研究所 客員教授 難波 宏彰 氏

3. 「時間栄養学 食事のタイミングと健康」

名古屋大学大学院生命農学研究科応用分子生命科学専攻
栄養生化学研究分野 准教授 小田 裕昭 氏

第 21 回 10 月 28 日 (土)

「健康食品に関する最近の話題と製品情報」

健康食品領域研修項目：大項目II・III

1. 「ケミカルトレーニングの視点で野菜の健康効果を考える」(大項目III)

兵庫県立大学環境人間学部食環境栄養課程フードホルミシス研究室
教授 村上 明 氏

2. 「今から始めるアミノ酸の活用術 —美肌からアンチエイジングまで—」(大項目II)

神戸女学院大学人間科学部環境・バイオサイエンス学科
食品基礎科学研究室 教授 高岡 素子 氏

3. 「人は血管とともに老いる —血管と老化と栄養—」(大項目II)

日本医療栄養センター 所長 井上 正子 氏

第 22 回 10 月 29 日 (日)

「健康食品に関する最近の話題と製品情報」

健康食品領域研修項目：大項目II

1. 「健康寿命の鍵を握るビタミン D とビタミン K」

神戸薬科大学衛生化学研究室 准教授 中川 公恵 氏

2. 「スパイスの辛味系成分の健康効果」

HSU 未来産業学部 プロフェッサー 渡辺 達夫 氏

3. 「老化危険因子としての糖化ストレスとその対策」

同志社大学生命医科学部アンチエイジングリサーチセンター
糖化ストレス研究センター 教授 米井 嘉一 氏

1. 原著論文

- (1) 長嶺幸子, *LIBRA*, 2009, **9**, 1-27
「神戸薬科大学1年生の意識調査—薬学教育制度変革期における薬学生の意識変化—」

2. 総説、トピックス、プロシーディング等

- (1) 松田芳久, 長嶺幸子, 土居由有子, 西田英之, 調剤と情報, 2009, **15(11)**, 1309-1312
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第1回「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール」連載にあたって」
- (2) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2009, **15(12)**, 1441-1449
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第2回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 見落とされた処方せんの記載ミス」
- (3) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2009, **15(13)**, 1575-1579
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第3回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 一包化調剤のヒヤリ・ハット①」
- (4) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(1)**, 79-84
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第4回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 一包化調剤のヒヤリ・ハット②」
- (5) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(2)**, 211-218
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第5回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 一包化調剤のヒヤリ・ハット③」
- (6) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(3)**, 339-346
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第6回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 散薬調剤のヒヤリ・ハット①」
- (7) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(4)**, 481-488
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第7回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 散薬調剤のヒヤリ・ハット②」
- (8) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(5)**, 629-636
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第8回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 散薬調剤のヒヤリ・ハット③」

- (9) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(8)**, 1049-1053
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第9回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 内用液剤のヒヤリ・ハット①」
- (10) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(10)**, 1315-1319
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第10回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 内用液剤のヒヤリ・ハット②」
- (11) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(11)**, 1435-1442
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第11回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 内用液剤のヒヤリ・ハット③」
- (12) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(12)**, 1557-1562
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第12回～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 軟膏剤のヒヤリ・ハット①」
- (13) 土居由有子, 長嶺幸子, 調剤と情報, 2010, **16(13)**, 1677-1684
「神戸薬科大学発 実践調剤ゼミナール 第13回～完～ミスから学ぶ調剤実践方法～ 軟膏剤のヒヤリ・ハット②」
- (14) 長嶺幸子, 薬学雑誌, 2012, **132(1)**, 7-9
「神戸薬科大学エクステンションセンター事業の展開と薬学教育との連携」

3. 著書

- (1) 長嶺幸子 編
『社会薬学への招待』, 法律文化社, 2008.3 発行
- (2) 長嶺幸子, 土居由有子 編
『ワークシートで教える 薬局実務実習指導ガイド』, じほう, 2013.4 発行
- (3) 神戸薬科大学エクステンションセンター 編著
『薬剤師 在宅へ行く』, 南山堂, 2018.9 発行
予定

4. 学会報告

- (1) 長嶺幸子, 池内小百合, 高田照子, 伊藤久美子, 村川美和子, 大塚邦子, 真野一恵, 堀田家代子, 岩川精吾, 第40回日本薬剤師会学術大会, 2007.10 (神戸)
「地域住民が求める薬剤師の役割—お薬相談

コーナーの事例から」

- (2) 坂巻えみ, 赤穂栄一, 中川左理, 上町亜希子, 東 和夫, 赤松路子, 岡野吉秀, 中山雅夫, 堀朝子, 長嶺幸子, 高橋幸一, 梅澤智左江, 第40回日本薬剤師会学術大会, 2007.10 (神戸) 「学術フロンティアプロジェクト「阪神・淡路大震災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究」の活動」
- (3) Sachiko Nagamine, Jiro Matsuya, Momoyo Ichimaru, Seigo Iwakawa, Takao Tanahashi, 第68回国際薬剤師・薬学会議 (FIP), 2008.8 (スイス、バーゼル) “An Attitude Survey on first-year students at Kobe Pharmaceutical university -Effectiveness of Early Exposure-”
- (4) 中尾幸代, 赤木佐千子, 長野恭久, 沼田千賀子, 松田裕子, 三木仁美, 道上 敬, 南 恵理子, 村田明子, 矢羽田和哉, 山中智香, 長嶺幸子, 土居由有子, 第41回日本薬剤師会学術大会, 2008.10 (宮崎) 「神戸薬科大学「薬剤師実践塾」における取り組み～6年制薬局実習カリキュラム作成と指導法の検討～」
- (5) 中尾幸代, 赤木佐千子, 沼田千賀子, 松田裕子, 三木仁美, 道上 敬, 南 恵理子, 村田明子, 山中智香, 長嶺幸子, 土居由有子, 第42回日本薬剤師会学術大会, 2009.10 (大津) 「神戸薬科大学「薬剤師実践塾」における取り組み (第2報)～6年制薬局実習カリキュラム作成と指導法の検討～」
- (6) 中尾幸代, 赤木佐千子, 沼田千賀子, 松田裕子, 道上 敬, 南 恵理子, 村田明子, 山中智香, 長嶺幸子, 土居由有子, 第19回日本医療薬学会年会, 2009.10 (長崎) 「神戸薬科大学「薬剤師実践塾」における取り組み～薬局実務実習時の学生・薬局スタッフのメンタルケアについて～」
- (7) 中尾幸代, 佐藤忠史, 長野恭久, 沼田千賀子, 松田裕子, 道上 敬, 南 恵理子, 村田明子, 山中智香, 長嶺幸子, 土居由有子, 第20回日本医療薬学会年会, 2010.11 (千葉) 「神戸薬科大学「薬剤師実践塾」における取り組み (第3報)～6年制薬局実習カリキュラム作成と指導法の検討～」
- (8) 松村暢子, 安達理絵, 紙本佳奈, 奥貞紘平, 長嶺幸子, 第43回日本薬剤師会学術大会, 2010.10 (長野) 「日本の患者さんが求める服薬説明から見えてくること」
- (9) 奥貞紘平, 坂巻えみ, 西山由美, 長嶺幸子, 日本薬学会第133年会, 2013.3 (横浜) 「薬学生のカナダでの薬局見学実習」
- (10) 韓 秀妃, 長嶺幸子, 田中良子, 足立昌子, 第46回日本薬剤師会学術大会, 2013.9 (大阪) 「Facebook を利用した健康食品指導薬剤師のスキルアップ研修」
- (11) 長嶺幸子, 中村治正, 百道敏久, 太田光熙, 第24回日本医療薬学会年会, 2014.9 (名古屋) 「在宅医療を担う薬剤師の臨床能力育成プログラムの構築と実践」
- (12) 長嶺幸子, 杉浦佳子, 太田光熙, 日本薬学会第136年会, 2016.3 (横浜) 「神戸薬科大学エクステンションセンター事業の展開と薬学教育との連携」
- (13) 鎌尾まや, 長嶺幸子, 岩川精吾, 北河修治, 日本薬学会第138年会, 2018.3 (金沢) 「神戸薬科大学薬剤師生涯研修支援事業であるシンポジウムにおける10年間の受講者調査」

認証取得プロバイダー一覧 (2018年3月現在)

認証制度 (G)	プロバイダー	取得年月日	認証制度 (P)	プロバイダー	取得年月日
G01	公益財団法人 日本薬剤師研修センター	2005. 6.20	P01	NPO 法人医薬品 ライフタイムマネジメントセンター	2007. 3.14
G02	東邦大学薬学部	2006. 3.13	P02	一般社団法人 日本プライマリ・ケア連合学会	2011. 2.21
G03	一般社団法人 薬剤師あゆみの会	2006. 6.18	P03	一般社団法人 日本在宅薬学会	2014. 6.20
G04	慶応義塾大学薬学部	2006. 8.25	P04	一般社団法人 日本病院薬剤師会	2014. 9.19
G05	一般社団法人 イオン・ハピコム 人材総合研修機構	2007. 2.15	P05	神戸薬科大学	2017. 12.15
G06	明治薬科大学	2007. 3.14	認証 制度 (E)	プロバイダー	取得年月日
G07	神戸薬科大学	2007. 6.20	E01	東北大学大学院薬学研究科	2005.12.12
G08	公益社団法人 石川県薬剤師会	2008. 6.18			
G09	新潟薬科大学	2008. 9. 1			
G10	北海道薬科大学	2008.10.20			
G11	星薬科大学	2009. 6.29			
G12	一般社団法人 昭薬同窓会・平成塾	2010. 5.26			
G13	一般社団法人 薬学ゼミナール 生涯学習センター	2010.12.17			
G14	北海道医療大学	2011. 3.25			
G15	埼玉県病院薬剤師会 生涯研修センター	2011. 6. 3			
G16	一般社団法人 日本女性薬剤師会	2012.12.14			
G17	日本大学薬学部	2013. 3.15			
G18	一般社団法人 薬局共創未来人材 育成機構薬剤師生涯研修センター	2016.12.16			
G19	昭和大学薬学部	2016. 6. 3			
G20	一般社団法人 ソーシャルユニバーシティ 薬剤師生涯学習センター	2016.12.16			
G21	公益社団法人 神奈川県薬剤師会	2017. 3.10			
G22	近畿国立病院薬剤師会	2017. 6. 2			
G23	一般社団法人 上田薬剤師会	2017. 6. 2			
G24	京都薬科大学	2018. 2. 2			
G25	公益社団法人 日本薬剤師会	2018. 2. 2			

神戸薬科大学エクステンションセンター開設 10 年の軌跡と今後の展開
— 薬剤師の社会的役割の向上と職能の高度化を目指して —

発行日 2018 年 6 月 1 日
編 者 神戸薬科大学エクステンションセンター
開設 10 周年記念誌編集委員会
発行者 神戸薬科大学 学長 北河 修治
発行所 神戸薬科大学エクステンションセンター
〒658-8558 神戸市東灘区本山北町 4-19-1
TEL 078-441-7627
FAX 078-441-7629
<http://www.kobepharma-u.ac.jp/extension/>

*10th
Anniversary*

神戸薬科大学エクステンションセンター